

# 白髮小僧

夢野久作

青空文庫



第一篇 赤おうむ

一 銀杏いちようの樹

昔或る処に一人の乞食小僧が居りました。この小僧は生れ付きの馬鹿で、親も兄弟も何も無い本当の一人者で、夏も冬もボロボロの着物一枚切り、定きまった寢床さえありませんでしたが、唯ただ名前ばかりは当り前の人よりもずっと沢山に持つておりました。

その第一の名前は白髪しろが小僧というのでした。これはこの小僧の頭が雪のように白く輝いていたからです。

第二は万年小僧というので、これはこの小僧がいつから居るのかわかりませぬが、何でも余程昔からどんな年寄でも知らぬものは無いのにいつ見ても十六七の若々しい顔付きをしていたからです。又ニコニコ小僧というのは、この小僧がいつもニコニコしていたからです。その次に唾おし小僧というのは、この小僧が口を利いた例ためしが今迄一度もなかったからで

す。王様小僧というのは、この乞食が物を貰った時お辞儀をした事がなく、又人に物を呉れと云った事が一度も無いから付けた名前で、慈善小僧というのは、この小僧が貰った物の余りを決して蓄めず他の憐れな者に惜し気もなく呉れて終い、万一人の危い事や困った事を聞くと生命を構わず助けるから附けた名前です。その他不思議小僧、不死身小僧、無病小僧、漫遊小僧、ノロノロ小僧、大馬鹿小僧など数えれば限りもありませぬ。人々は皆この白髪小僧を可愛がり敬い、又は気味悪がり恐れておりました。

けれども白髪小僧はそんな事には一切お構いなしで、いつもニコニコ笑いながら悠々と方々の村や都をめぐり歩いて、物を貰ったり人を助けたりしておりました。

或る時白髪小僧は王様の居る都に来て、その街外れを流れる一つの川の縁に立っている大きな銀杏の樹の蔭でウトウトと居睡りをしておりました。ところへ不意に高いけたたましいい叫び声が聞こえましたから眼を開いて見ると、つい眼の前の川の中にどこかの美しいお嬢さんが一冊の本を持ったまま落ち込んで、浮きつ沈みつ流れて行きます。

これを見た白髪小僧は直ぐに裸体になつて川の中に飛び込んでその娘を救い上げました。が、間もなく人々の知らせで駆けつけた娘の両親は、白髪小僧に助けられて息を吹き返した娘の顔を見ると、只もう嬉し泣きに泣いて、濡れた着物の上から娘をしっかりと抱き締

めました。そして直ぐに雇った馬車に娘と白髪小僧を乗せて自分の家に連れて行きました。その家の大きくて美しい事、王様の住居すまいはこんなものであるうかと思われる位で、お出迎えに出て来た娘の同胞きょうだいや家来共の着物に付けている金銀宝石の飾りを見ただけでも当り前の者ならば眼を眩まわして終う位でした。併しかし白髪小僧は少しも驚きませんでした。相も変わらずニコニコ笑いながら悠々と娘の両親に案内されて奥ひともの一室に通つて、そこに置いてある美事な絹張りの椅子に腰をかけました。

ここで家中うちの者は着物を着かえた娘を先に立てて白髪小僧の前に並んでお礼を云いましたが、白髪小僧は返事もしませぬ。矢張りニコニコ笑いながら皆の顔を見まわしているばかりでした。

お礼を済つちました家中の者が左右に開いて白髪小僧を真中にして居並ぶと、やがて向うの入り口から大勢の家来が手に手に宝石やお金を山盛りに盛った水晶の鉢はちを捧はげて這入はいつて来て、白髪小僧の眼の前にズラリと置き並べました。その時娘のお父さんは白髪小僧の前に進み出て叮嚀ていねいに一礼して申しました。

「これは貴方あなたの御恩の万分の一に御礼するにも当りませぬが、唯ただほんの印ばかりに差し上げます。御受け下さるれば何よりの仕合わせで御座います」

白髮小僧はそんなものをマジマジ見まわしました。けれども別段有り難そうな顔もせず、又要らないというでもなく、家来共の顔や両親や娘の顔を見まわしてニコニコしているばかりでした。この様子を見た娘の父親は何を思ったか膝を打って、

「成る程なほど、これは私が悪う御座いました。こんな物は今まで御覧になった事がないと見えます。それではもつと直ぐにお役に立つものを差し上げましょう」

と云いながら家来の者共に眼くばせをしますと、大勢の家来は心得て引き下がって、今度は軽くて温かそうで美しい着物や帽子や、お美味いしくて頬ほおペタが落ちそうな喰べ物などを山のように持つて来て、白髮小僧の眼の前に積み重ねました。けれども白髮小僧は矢張りニコニコしているばかりで、その中うちに最前ひるねの午寝ひるねがまだ足りなかつたと見えて、眼を細くして眠ねむたそうな顔をしていました。

大勢の人々は、こんな有り難い賜物たまものを戴いたかぬとは、何という馬鹿であろう。あれだけの宝物があれば、誰でも名高い金持ちになれるのにと、呆あきれ返ってしまいました。娘の両親も困こつてしまつて、何とかして御礼しやうを為なしましたが、どうしてもこれより外に御礼の仕方はありませぬ。とうとう仕方なしに、誰でもこの白髮小僧さんが喜ぶような御礼の仕方を考え付いたものには、ここにある御礼の品物を皆遣やると云い出しました。けれども

何しろ相手が馬鹿なので、まるで張り合いがありませんでした。

「貴方をこの家うちに一生涯養つて、どんな贅ぜいたく沢たくでも思う存分まじ為せて上げます」と云つても、又「この都第一等の仕立屋が作った着物を、毎日着換えさせて、この都第一等の御料理を差し上げて、この街第一の面白い見せ物を見せて上げます」と云つても、「山狩りに行く」と云つても、「舟遊びに連れて行く」と云つても、ちつとも嬉しがる様子はなく、それよりもどこか日当りの好い処へ連れて行つて、午睡ひるねをさしてくれた方が余よつ程ほど有り難いというような顔をして大きな眼を瞬ひらいておりました。

とうとう皆持てあまして愛想を尽かしてしまいました処へ、最前さつきから椅子に腰をかけてこの様子を見ながら、何かしきりに溜息ためいきをついて考え込んでいた娘は、この時徐しずかに立ち上つて清すずしい声で、

「お父様、お母様。白髪小僧様は仮令たとどんな貴たつとい品物を御礼に差し上げても、又どんな面白い事をお目にかけても、決して御喜わびなさらないだろうと思わいます。妾わたしはその理わけ由ゆをよく知しっています」

と申しました。

「何、白髪小僧さんにどんな御礼をしても無駄だと云うのかえ。それはどういうわけです」

と両親は言葉を揃えて娘に尋ねました。傍に居た大勢の人々も驚いて皆一時に娘の顔を見つめました。皆から顔を見られて、娘は恥かしそうに口籠くちこりましたが、とうとう思い切つて、

「その訳わけはこの書物にすつかり書いて御座います」

と云いながら、懐ふところから黒い表紙の付いた一冊の書物を出しました。

「この書物に書いてある事を読んで見ますと、白髮小僧様は今までこの国の人々が見た事も聞いた事もない不思議な国の王様なので御座います。ですからこの世の中でどんなに貴い物を差し上げても、どんなに面白い物を御目にかけても、御喜びになる氣遣きづかいはあるまいと思ひます。そうしてそればかりでなく、白髮小僧様わたくしが妾の命を御助け下さるといふ事は、ずっと前から定きまつていた事で、その証拠にはこの書物には、妾が水に落ちましてから、助けられる迄の事が、ちゃんと書いてあるので御座います。決して御礼を貰おうなどいふ卑さもしい御心で御助け下さつたのでは御座いませぬ」

と決きつぱり然とした言葉で申しました。

両親は云うに及ばず、大勢の人々もこの娘の不思議な言葉に、心の底から驚いてしまつて、暫しばらくはぼんやりと娘の顔と白髮小僧の顔とを見比べていました。が、何しろあんまり不



思議な話しで、どうも本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>らしくない事ですから、父様は頭を左右に振りながら――

「これ娘、お前は本気でそんな事を云うのか。私はどうしてもお前の話しを本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>にする事は出来ない。一体お前はどこでそんな奇妙な書物を手に入れたのだ」

と言葉せわしく尋ねました。娘はどこまでも真<sup>ま</sup>面<sup>ま</sup>目<sup>め</sup>で沈<sup>お</sup>ち着<sup>つ</sup>いて返事を致しました――  
 「いいえ、妾はちつとも気が狂つてはおりませぬ。そして又この書物に書いてある事を疑う心は少しも御座いませぬ。お父様でもお母様でもどなたでも、一度この書物に書いてあるお話しを御聞き遊ばしたならば、矢<sup>や</sup>張<sup>っ</sup>り屹<sup>き</sup>度<sup>ど</sup>妾<sup>め</sup>と同じように本<sup>ほん</sup>当<sup>と</sup>に遊ばすに違いありません。でもこの書物には白髪小僧様と、妾の身の上に就<sup>つ</sup>いて、今まであつた事や、行く末の事が些<sup>すこ</sup>しも間違<sup>まちが</sup>いなく委<sup>く</sup>しく書<sup>か</sup>いてあるので御座いますもの。ですからこの書物を読みさえすれば妾がどうしてこの書物を手に入れたかという事も、すっかりおわかりになるので御座います。又今から後<sup>のち</sup>白髪小僧様と妾の身の上がどうなつて行くかという事も、追々とおわかりになる事と思<sup>おも</sup>います」

皆の者は、聞けば聞く程不思議な話に、驚いた上にも驚いて、開<sup>あ</sup>いた口<sup>くち</sup>が塞<sup>ふさ</sup>がりませんでした。

両親もとうとう思案に余つて、とにかくそれでは娘にこの書物を読<sup>よ</sup>まして一通り聞<sup>き</sup>いた

上で、本当か嘘か考えてみようという事に決めました。

両親の許しを受けて娘が書物を読み初めると、室中の者は、皆水を打ったように森となりました。只その中で白髪小僧ばかりは何の事やら訳がわからずに大きな眼をパチパチさせながら、娘の美しい声に聞き惚れていましたが、間もなく聞き疲れてしまつて、又うとうとと居睡りを初めました。

お嬢様はそれには構わずに、書物を繰り拡げて高らかに読み初めました。その話しはこうでした。

## 二 黒い表紙の書物

この書物に書いてある事は、世界一の利口者と世界一の馬鹿者との身の上に起つた、世界一の不思議な面白いお話である。

この話しを読む人は誰もこの中に書いてある事を本当に為さないであろう。皆そんな馬鹿気た不思議な事がこの世の中に在るものかと思うであろう。唯世界一の利口な人と世界一の馬鹿な人だけは、これを本当にして読むのである。今のところそんな人はこの世の中に

唯二人しかいない。その一人はニコニコ王様の長生ながいきの乞食の白髪小僧で、今一人はこの国の総理大臣の美留楼公爵の末娘美留女姫みるめひめである。そうしてこの書物の持ち主は、この書物に書いてある事を、初めからおしまいまで本ほん当とうにして読む人——つまりこの白髪小僧と美留女姫二人より他には無いのである。

この書物にはその持ち主が、自分や他人の身の上について知りたいと思う事、又は他の人に知らせたい、話して聞かせたいと思う事が、自由自在に挿し絵や文字となつて現われて来る。今美留女姫は自分がこの書物を手に入れた仔細わげを、両親ふたおややその他の人々に読んで聞かせたいと思つているから、このお話しは先まず美留女姫の身の上の事から始まらなければならぬ。

今この書物を声高らかに読んでいる美留女姫は前にもある通り、この国第一の金持ちで、この国第一の貴い役目たつとと身分とを持つている公爵美留楼という人の末娘で、今年十四になつたばかりであるが、生れ付きお話が大好きで、毎日一ツ宛ずつ新しいお話を聞かねばその晩眠る事が出来ないのが癖くせであつた。姫の両親ふたおやはそのために、毎日毎日新しいお話の書物を一冊宛ずつ買つてやつたが、今は最早もはやその書物が五ツの倉庫くらに一パイになつてしまつた。この上にはどこの書物屋を探しても、今までと違つた新しいお話の書物は、一冊も無いよう

になつてしまつた。

ところがここに一ツ困つた事には、この美留女姫は大層物もの憶えおぼがよくて、どんなに古く聞いた話でも少しも間違わずにはつきりと記憶おぼえていて、初めの二言三言聞けばすぐにあとの話を皆思い出してしまふから、古い書物を二度読んで聞かせる訳には行かなかつた。それかといつて、この上に新しいお話は世界中に只の一ツも無いのだから、姫は毎日毎晩新らしいお話が聞きたくて聞きたくて夜もおちおち眠る事が出来なかつた。

けれども姫は両親ふたおやにこの事を話すと、却て心配かえつをかけると思つたから、毎晩故意わざとよく眠つたふりをして我慢がまんしながら、どうかして新しい珍らしいお話を聞く工夫はないかと、そればかり考えていた。

ところが或る日の朝の事であつた。姫は昨夜も夜通しまんじりとも為しなかつたので、呆ぼ然んやりしながら起き上つて顔を洗い御飯を喰べて、何気なく縁側に出て庭の景色に見とれた。丁度秋の半ば頃で庭には秋の草花が露に濡れて、眼めまぐる眩くらしい程咲き乱れていたが、姫は又もやお話の事を思い出して、呶あゝ、あの花が皆善いい魔物か何かで、一ツ一ツに面白い話を為してくれればいいものを、彼の林かの中に囁ささつてゐる小鳥が天人か何かで、方々飛びまわつて見て来た事を話して聞かせるといいものをもと独ひとりで詰つままらなく思つてゐると、不意に耳

の傍で——

「美留女姫、美留女姫」

と奇妙な声で呼ばれたので、吃驚してふり向いた。見るとそれはつい昨日の事、美留女姫の兄様の美留矢が、明日王様に差し上げるからそれまで飼っておいてくれと云つて、美留女姫に預けた一羽の赤い鸚鵡で、美留矢の家来が東の山から捕つて来たものであつた。美留女姫はこれを見ると淋しい笑みを浮かめて——

「まあ、お前だつたのかい、今呼んだのは。まあ、何という利口な鳥でしょうねえ。最早妾の名前を覚えたの。大方お父様かお母様の真似でも為ているのでしょう。本当にお前は感心だわねえ」

と云いながら、籠の傍に近寄つた。けれども鸚鵡は籠の真中の撞木に止まりながら、矢張り姫の名を呼び続けた——

「美留女姫、美留女姫、美留女姫」

これを聞くと姫は益々笑いながら——

「まあ、可笑しい鸚鵡だ事。わかつたよ、わかつたよ、妾はここに来ているではないの。そうして妾に何か用でもあるの」

と尋ねた。すると不思議なことには赤鸚鵡たちまが忽ち姫の前の金網へ飛び付いて、姫の顔を真赤まつかな眼で見つめながら――

「美留女姫、美留女姫、用がある。話がある、面白い話がある」と呼んだ。

美留女姫はこれを聞くと、真青になつて驚いた。真逆まさかこんな鳥が、人間と同じように、しかも自分に話しかけようとは夢にも思わなかつたのだから、怪しんだのも無理はない。余りの事に呆あきれて口も利けなくなつて、茫然ほんやりと鸚鵡を見つめっていると、赤鸚鵡は構わずに叫び続けた――

「怪しむな、驚くな、美留女姫、美留女姫。」

お前の願いは今叶かなつた。

新規の話しを聞きたいという。

お前の願いは今叶かなつた。

行け行け、街に行け。

たった独ひとりで街に行け。

この広い街中で一番長く生きている。

白髪頭しらがの人に聞け。

不思議な姿の人に聞け。

その人の身の上話しを……

惻口な美留女姫。

賢い美留女姫。

疑うな、怪しむな、夢でない、本当だぞ。

疑うな、怪しむな、夢でない、本当だぞ」

美留女姫はこの時やつと吾われに帰かえつて、夢から覚めたように思いながら、鸚鵡の言葉を一心に聞いていた。そうして心こゝろの中で、この不思議な鳥の言葉を、驚き怪しみながらも亦またその云う事が決して偽いつわりでも出鱈目でたらめでも何でもなく、本当に珍らしい話しを聞くのに、一等都合の宜よい巧うまい工夫を教えている事が解わかって、心から感心した。成る程この街で、一番珍しい奇妙な風体なりをしている、一番長ながい生いきの白髪頭の老人を見付け出して、その人の身の上話しを聞かしてもらえば、屹度きつと面白い新規の話を聞く事が出来るに違いない。又また仮令たといそんな人でなくとも、身の上話しならばどんな人を捕まえても、十人が十人違っている筈はずだから、同じ話を二度聞かされる心配はない。そうしてその御礼には、書物を一冊買うだ

けのお錢あしを遣れば、貧乏人等は喜んで話して聞かせるに違いないと、こう考え付くと美留女姫は、最早もとう一秒時間も我慢が出来なくなつた。眼の前の鸚鵡の事も忘れてしまつて、直ぐに自分の室へやに帰つて帽子を頭に載のせるが早いか、たつた一人で家を出て只とある人通りの多い橋の袂たもとへ駈けて来た。

そこに暫しばらくの間立つて待つてしていると、間もなくよい都合に向うから、お逃あつちえ通りの奇妙な風なり体をした白髪頭かみの人が遣つて来たから、姫は天にも昇らんばかりに喜んで、いきなりその人の前に駈け寄つて袖そでに縋すがりながら十円じゅうえんの金貨を出して、身の上話をしてくれと頼んだ。その人は頭に高い帽子を三段も重ねて耳の処ところまで冠かむつていた。そして身には赤い襦じゆ衣いを着て、青い腰巻の下から出た毛だらけの素足に半はん長ながの古靴こくつを穿はいていたが、赤い顔かほに白髪髻しらかみを茫ぼう々ぼうと生はやして酒嗅さけくい呼吸いきを吐はきながら、とろんこ眼で姫の顔を呆あれたように見つめていた。けれども姫から大略あらかしの仔細わけを聞くと、大きな口を開いて笑い出した

「アハ……。そうか。ではお前はここまでお話しを買いに来たのか。成る程、それは巧い思おもい付きだ。そうして第一番に俺を捕つかまえたのは感心だ。

世界中で俺位面白い愉快な身の上を持つてゐるものは、他に唯の一人も無いのだからな。



では今から話すからよく聞きなよ。俺は小さい時から酒が好きで、どうしても止められなかつたんだ。親が死んでも構わずに酒を飲んだ。嬢かかあや小供やっばが死んでも矢張り酒を飲んだ。家が火事になつても、打うつ棄ちやつておいて酒を飲んでいた。嬉しいと云うつちや飲んだ。悲しいと云うつちや飲んだ。昨日きのうも飲んだ。今日もたつた今まで飲んだところだ。明日あしたも明後日あさつても……大方死ぬまで飲めむんだらう。今からも亦また、お前のお金で飲んで来ようと思うんだ。これでお仕舞い……目出度めでたし目出度めでたしかね。ハハハ。イヤ有り難う。左様なら」

と云ううちに姫の掌てのひらの中の十円の金貨を引ひつたくつて、よろよろとよろめいて行いつた。

姫は大層面白い話だとは思つたが、何しろあんまり短くて張り合あいがなかつた。だから今度はなるべく長く委くわしく話わしてもらおうと思つて、酔よつ払いのあとから通りかかつたお婆さんの傍へ寄つて、事情わけを話して身の上話しんじやうわしを聞かしてくれと頼んだ。

このお婆さんもお不思議な風体ふうていで、頭は白髪が茫ぼう々ぼうと乱らんれているのに、藁わらで編あんだ笠かさを冠かむり、身には長い穀物こくもつの袋ふくろに穴を明けたのに両手と首を通して着きていて、足には片かた方にスリッパ、片方には膝まで来る長靴ながぐつを穿はいて、一尺ばかりの杖つゑを突張つつて地面ぢめんに這はい付く程に腰を曲まげていた。そうして矢張り最前の酔よ払いと同じように、美留女みりよ姫ひめが出し抜ぬけに奇妙な事を頼んだのに驚おどいたと見えて、杖つゑにつかまつて腰を伸のばしながら、霞かすみんだ

眼を真ま円まるにして姫の顔を見ていたが、やがてニヤリと笑いながら金貨を貰つてそのまま杖を突張つて行こうとした。姫は慌てて袖に縫すがつて――

「アレお婆さん。お話しはどうしたのです。何卒どうぞあなたの上話を聞かして下さいな」

「何も話す事はありません。只ただ三万日の間つまらなく長く生きていたばかりで御座います」

「まあ三万日……八十年ですわね。でもその間に何か珍しい事があつたでしょう」

「アア。そうそうたつた二ツありましたよ」

「それはどんな事ですか？」

「一ツは生れてはじめてお話気違いというものを見た事で御座います」

「オヤ。いつ、どこで？」

「今、ここで」

「マア。でも一ツは？」

「十円の金貨というものをこの手に生れて初めて握つた事で御座います。ほんとに有り難う御座いました。さようなら」

と云いながら袖をふり払つてどこかへ行つてしまった。

こんな風に遇あう者も遇あう者も皆姫を気違いか馬鹿扱いにして、散々嘲から弄かつてはお銭あしを持

って行つてしまつたから、一時間と経たぬうちに姫の財布はすっかり空っぽになつてしまつた。その中でも非道い奴はお金も何も取らない代りに――

「俺は今忙がしいんだ。そんな馬鹿の相手になつてはいられない」

と剣突を喰わして行つたものもあつた。

姫はもうすっかり気を落してしまつて、迎もこんな塩梅では一生涯面白い珍らしい話を聞く事は出来ないであろう。彼の赤鸚鵡は嘘を吐いたのか知らん。もし本当にこれから一ツも新しいお話を聞く事が出来なければ、もう一生涯何の楽しみも無くなつてしまつたのだから、死んだ方がいくらか良いか知れない。噫、情ない事になつた。詰らない事になつたと、しくしく泣きながら、街外れの只ある河岸まで来るともなく歩いて来ると、そこに立つている大きな銀杏の樹の根元に腰をかけて、疲れた足を休めようとした。けれどもまだ腰をかけぬ前に姫はその銀杏の樹の根元に思いがけないものを見つけて、忽ち躍り上らんばかりに喜んだ。その時姫が見付けたのがこの白髪小僧と題した不思議なお話の書物であつた。

姫はこの書物が、竜のようにうねつた銀杏の樹の根本に乗っているのを見つけると直ぐに、この書物こそ自分が今まで一度も見つた事のない書物だと思つて、思はず駆け寄つて手

に取ろうとしたが、又ハツと気が付いて立ち止まった。見れば大分古びた書物のようだから、これは屹度誰かがここに置き忘れて行つたものに違いない。して見ればこれを黙って開いて見るのは泥棒と同じ事だと思つて、出しかけた手を引っこめた。

姫は折角こんな有り難い事に出くわしながら、指一本指す事も出来ず、持ち主の来るのを待つていなくてはならぬのが、自烈度くて堪らなかつた。早く持ち主が来てくれればいい。そうして自分にこの書物を貸してくれればいいと、足摺りをして立つていた。けれどもどういふものか、持ち主は愚か人間らしいものは一人も遣つて来ないで、その代りに空から銀杏の葉が黄金の雪のようにチラチラと降つて来て、書物のまわりに次第次第に高く積りはじめた。そうしてその黒い表紙がだんだんと見えなくなつて、もうあと一二枚落ちるとすっかり銀杏の葉で隠れてしまいそうになると、最前から我慢の出来るだけ我慢をしていた姫は、もう堪らなくなつて、我れ知らず傍に走り寄つて、銀杏の葉を掻き除けて書物を拾い上げて、表紙を一枚夢中でめくつて見た。

すると姫は又もやそこに夢ではないかと思う程不思議なものを見つけた。その初めの処にはつきりとした文字で『白髪小僧と美留女姫』という言葉が、チャンと二行に並んで書いてあつたのである。姫は白髪小僧の事は兼々お附の女中から委しく聞いて知つていた

が、今日の前に自分の名前と一緒にチャンと並べて書いてあるのを見ると、どうしても誰かの悪戯いたずらとしか思われなかつた。

けれども姫が又急いで次の頁ページを開いて見ると、今度はいよいよ二人の名前が出鱈目でたらめに並べてあるのではなく、この書物には本当に、自分と白髪小僧の身の上に起つた事が書いてあるのだという事がわかつた。その第三頁目には王冠いただを戴いた白髪小僧の姿と美事な女王の衣裳を着けた美留女にっこ姫が莞爾ちよつとと笑いながら並んでいる姿が描かいてあつた。

もう姫はこの書物から、一寸ちよつとの間まも眼を離す事が出来なくなつた。すぐに第四枚目を開いてそこに書いてあるお話をお話を次から次へと読んで行くと、疑いもない自分の身の上の事で、姫がお話の好きな事から、身の上話を買くいに出かけた事、そうして銀杏の根本でこの書物を見つけたところまで、すっかり詳くわしく書いてあるものだから、全く夢中になつてしまつて、これから先どうなる事だろうと、先から先へと頁を繰りながら、家うちの方へ歩いていこううちに、一足宛川岸すづつの石崖の上に近づいて来た。折からそこを通りかかつた二三人の人々はこの様子を見て胆きもを潰つぶし――

「危あいッ、お嬢様危あい。ソラ落ちる」

と大声揚げて駈かけ附けた。

併し姫は書物に氣を取られていたから人々の叫び声も何も耳に入らなかつた。

矢張り平地を歩いてはいるつもりで片足を石垣の外に踏み出すや否や、アツと云う間もなく水煙を立てて落ち込んでドンドン川下へ流れて行つた。

けれども仕合わせと白髮小僧の御蔭で危い命を拾つたが、これが縁となつて美留女姫は白髮小僧を吾が家へ連れて来て、両親を初め皆の者に白髮小僧と自分との身の上に起つた、今までの不思議な出来事を読んで聞かせると、皆心から驚いて、一体これはその書物に書いてあるお話しか、それとも本当に二人の身の上に起つた事かと疑つた。そうして今のお話で、この間赤い鸚鵡が云つた一番長生の白髮頭の奇妙な姿をした老人というのはお爺さんでもお婆さんでも何でもなく、この白髮小僧の事に違ひないことがわかつた。成程、白髮小僧ならば、世界中で二人とない不思議な身の上話を持っているに違ひない。そうしてそれを聞くのは世界中でこの人達が初めてで、しかもそれが美留女姫の身の上と一所になつて、どこかまだ知らぬ国の王様と女王になるらしく思われたから、皆の者は最早先が待ち遠しくて堪らなくなつて——

「それからどうしたのです。早く先を読んで下さい」

と口々に催促をした。

## 三 青い眼

美留女姫も同じ事で、最前水さつぎに落ちたのを、白髪小僧に救い上げられてから今までの出来事は、皆本当に自分の身の上につけて起っている事か、それともこの書物に書いてあるお話しかと疑った。そうして皆から催促される迄もなく、白髪小僧と自分の身の上のお話があるか、早く読みたくて堪らなかつたけれども、一先ずじつと気を落ち着けて皆の顔を見まわしながらニツコリと笑った。そうして――

「待つて下さい。妾わたしもこれから先どうなるか知らないのです。今から先を読みますから静かにして聞いていて下さい」

と云いながら、胸を躍らせて次の頁を開いた。

見ると……どうであろう。次の頁は只の白紙しろかみで、一字も文字が書いて無いではないか。これは不思議……今まであつた話が途中で切れる筈はずはないと思ひながら、慌てて次の頁を開いたがここも白紙はくしで何も書いて無い。その次その次とお終ひ迄バラバラ繰り抜けて見たが矢張り同じ事。真逆白髪小僧と自分の身の上が、これでおしまいになつた訳ではあるま

いと、美留女姫は胸が張り裂ける程驚き慌てて、今度は前の方を引っくりかえして見ると又驚いた。今まであんなに書き続けてあつた文字が一字も無く、この書物は全くの白紙しろかみの帳面と同じ事になつていた。

美留女姫はあまりの事に驚き呆あきれて思わず書物から眼を離すと又不思議、今までたしかに大広間の中で大勢の人に取しまかれて、書物を読んでいた筈なのに、今見ませばそんなものは、書物の文字や挿さし絵えと一所に、どこかへ綺麗きれいに消え失せてしまつて、自分は矢張り最初の銀杏いちじょうの根本に、書物を持ったままぼんやりと突立っているのであつた。しかも眼の前の最前書物の置いてあつた銀杏の樹の根本には、いつの間どこから来たか、白髮小僧が腰をかけていて、お話を聞きながらうとうと居いねむ睡りをしていてではないか。姫は何だかサツパリ訳がわからなくなつた。最前からのいろいろの不思議の出来事は、矢張り本当の事ではなく、皆この書物を読みながらそのお話し通りに自分が為したように思つただけで、本当は矢張り最前さつきからここに立つたままで、白髮小僧は自分の気付かぬ間にここに来て眠っているのだとしか思われなかつた。姫は益々呆あきれてしまつて、思わず手に持つていた書物をパタリと地上じへたに取り落すと、間もなく颯さつと吹いて来た秋風に、綴とじ目がバラバラと千切れて、そのまま何千何万とも知れぬ銀杏の葉になつて、そこら中一杯に散り



拡がった。見るとその葉の一枚毎に一字宛、はつきりと文字が現われている様子である。

重ね重ねの不思議に姫は全く狐に憑まれた形で、ぼんやりと突立って見ていると、その内に又もや風が一しきり渦巻き起つて、字の書いてある銀杏の葉をクルクルと巻き立てて山のように積み重ねてしまった。

するとそこへどこからか眼の玉と髪毛と鬚が真青な、黄色い着物を着た一人のお爺さんが出て来たが、この銀杏の葉の山を見ると、これも何故だか余程驚いた様子で――

「これは大変な事になった。一時も棄てておかれぬ」

と云いながら直ぐ傍の石作りの門の中に這入ったが、やがて大きな袋と箒を持って来てすつかり銀杏の葉をその中へ掃き込んで、どこかへ荷いで行く様子である。これを見ていた姫はこの時はつと気が付いて、あの銀杏の葉に書いてある字を集めると、屹度今までのお話しのお話がわかるのに違いないと思つたから、持つて行かれては大変と急に声を立てて――

「お爺さん、一寸待つて下さい」

と呼び止めた。

けれども青い眼の爺様は見向きもしないで唯――

「何の用事だ」

と云い棄ててずんずん先へ急いで行つた。

美留女姫はこれを見ると、慌ててお爺さんに追おいすが縋すがつて――

「お爺さん。何卒どうぞ御願ごんげんいですから待つて下さい。そうしてその銀杏の葉に書いてある字を妾めかけに読よまして下さい」

と叮ていねい嚀ねいに頼たのんだ。けれどもお爺さんは矢張り不機嫌な声で――

「馬鹿な事を云うな。これは悪魔の文字だ。これを見ると悪魔に魅入られるのだ。見せる事は出来ない」

と答えながらなおも足を早めて急いで行く。

美留女姫は気が気でなくななおもお爺さんに追おいすが縋すがつて尋ねた――

「では貴方あなたはそれをどうなさるのですか」

「うるさい女の子だな。山へ持つて行つて焼やいてしまふのだ」

「エエツ。それはあんまり勿もつた体たいないじゃありませんか。それには面白いお話しが沢山書あしたいてあるのです。妾めかけはそれを読よんでしまわなければ、今夜から眠る事が出来ませぬ。明日あしたからは生きている甲斐かいが無なくなります。何卒どうぞ、何卒どうぞ後生ごせいですから妾めかけを助たすけると思おもつて、そ

の銀杏の葉に書いてある字を読まして下さい。ね。ね」

と泣かんばかりに頼みながら、老人に追い付いて袖に縫ろうとした。けれども爺さんは尚も意地悪くふり払って――

「そんな事を俺が知るものか。この銀杏の葉に書いてある文字は、藍丸国あいまるこくの大切な秘密のお話で、これをうっかり読んだり聞いたりすると、藍丸国に大変な事が起るのだ。とてもお前達に見せる事は出来ない。諦めて早く帰れ」

と云いながら一層足を早めて歩き出した。

するとこの様子を見ていた白髪小僧は、何と思ったか忽ちたちまむっくり起き上って、大急ぎであとを追っかけはじめた。その中に美留女姫うらひも一生懸命に走ってお爺さんに追い付いて、何を為るかと思うと、懐ふところから小さな鉢はちまを取り出して、お爺さんが荷かついで行く袋の底を少しばかり切り破った。そうして、その破れ目から落ちる銀杏の葉を、お爺さんが気付かぬように、ずっと後ろから拾って行きながら、その上に書いてある一字一字を清すずしい声で読み初めたが、その一字一字は不思議にも順序よく続き続いて、次のような歌の文句になっていた。

## 四 石神の歌

「三千年の春毎ごとに、栄え栄えた銀杏の樹。

三千年の夏毎ごとに、茂り茂った銀杏の樹。

梢こずえに近い大空を、月が横切る日が渡る。

流るる星の数々は、枝の間に散り落ちて、

千万億の葉をふるう、今年の秋の真夜中の、

霜そに染め出す文字だの数、繋つなぎ繋がる物語。

春はどこから来るのやら。秋はどつちへ行くのやら。

毎まいとし年毎年花が咲き、毎年毎年葉をふるう。

昔ながらの世の不思議、今眼の前に現われて、

眼は見え耳はきこえても、手足は軽く動いても、

昨日きのうし為た事今日忘れ、先刻さつきした事今忘れ、

自分の事も他事も、忘れ忘れていつ迄も、  
 限らない年生き延びた、聞こえ聾の見え盲目。  
 不思議な王の知ろし召す、奇妙な国の物語。

昔々のその昔、世界に生きたものが無く、  
 只岩山と濁り海、真暗闇のその中に、  
 或る火の山の神様と、ある湖の神様と、  
 二人の間に生れ出た、たつた一人の大男。

金剛石の骨組に、肉と爪とは大理石。  
 黒曜石の髪の毛に、肌は水晶血は紅玉。

岩角ばかりで敷き詰めた、広い曠野の真中で、  
 大の字形の仰向けに、何万年と寝ていたが、  
 或る時天の向うから、大きな星が飛んで来て、  
 寝てる男の横腹へ、ドシンとばかりぶつかった。

男はウンと云いながら、青玉の眼を見開いて、  
どこが果ともわからない、暗やみの大空見上ぐれば、  
左の眼からは日の光り、右の眼からは月の影、  
金と銀とに輝やいて、二ツ並んで浮み出し、  
一ツは昼の国に照り、一ツは夜の国に行く。

瞬まばたきすれば星となり、呼吸をすれば風となり、  
嚏くしゃみをすれば雷らいとなり、欠伸あくびをすれば雲となる。

男はやがてむつくりと、山より大きな身を起し、  
ずっと周囲まわりを見まわせば、四方あたりは岩と土ばかり。  
もとより生きた者としては、艸くさ一本も生えて無い。

男はあまりの淋しきに、オーイオーイと呼んで見た。

けれどもあたりに一人<sup>いちにん</sup>も、人間らしい影も無く、  
大石小石の果も無い、世界に自分は唯一人。

青い空には雲が湧く。幾個<sup>いくつ</sup>も幾個も連れ立って、  
さも楽し気に西へ行く。けれども自分は唯一人。

黒い海には波が立つ。仲よく並んでやって来て、  
岸に碎けて遊んでる。けれども自分は唯一人。

もとより不思議の大男。家<sup>うち</sup>も着物も喰べ物も、  
何んにも要らぬ身ながらに、相手といつては人間や、  
鳥<sup>けもの</sup>や獣はまだ愚か、艸<sup>くさ</sup>一本も眼に入らぬ、  
広い野原の恐ろしさ。石の野原の凄<sup>すさま</sup>じさ。

折角生れて来たものの、話し相手も何も無い、

淋しさつらさ情なさ。男はどうとう焦れ出して、  
一体誰がこの俺を、こんな野原に生み出した。  
一体誰がこの俺を、こんな荒野あれのに連れて来た。

寧いっそ眠っているならば、死ぬまで眠っているならば、  
こんな淋しい情ない、つらい思いはしまいもの。  
一体誰がこの俺を、ドシンとなぐって起したと、  
ぬつくとばかり立ち上り、声を限りに怒鳴どなったが、  
答えるものは山彦の、野末に渡る声ばかり。

青い空には雲が湧く。けれども自分は只一人。  
黒い海には波が立つ。けれども自分は只一人。

男はどうとう怒り出し、吾れと吾が髪引拵み、  
赤く血走る眼を挙げて、遠い青空睨にらみつつ、



大声揚げて泣きながら、天も響けと罵った。

大空も聞け土も聞け、山も野も聞け海も聞け。

目に見えるもの見えぬ者、あらゆる者よ皆聞け。

俺は死ぬのだ今直ぐに、この場で死んで了うのだ。

われと自分の淋しさに、天地を怨んで死ぬるのだ。

こんな淋しい恐ろしい、所に長く生きていて、

悲しい思いするよりは、死んでしまった方が好い。

こんな眼玉があつたとて、面白いもの見なければ、

綺麗なものを見なければ、何の役にも立たないと、

われと吾が眼をめぐり出し、虚空はるかに投げ棄てた。

その投げ上げた眼の玉が、地面に落ちたその時は、

一字も文字の書いて無い、巻いた書物となっていた。

二ツの耳もこの上に、面白い事聴かれねば、  
他人ひとの話しもきかれねば、何の役にも立たないと、  
両方一度に引き千切り、地面の上に打ち付けた。  
すると二ツ耳も亦、地面に落ちると一時いちじきに、  
一ツも穴の明いて無い、重たい石の笛となる。

鼻はあつても見る限り、咲く花も無い広い野の、  
埃ほこりに噎むせるばかりでは、却かえつて邪魔じやまにしかならぬ、  
糞くその役にも立たないと、これも千切つて打ち付けた。  
するとガタンと音がして、糸を張らない月琴げつきんが、  
この大男の足もとの、石の間に落つこちた。

又いちにん一人も話しする、相手が無ければこの舌も、  
無駄なものだと云ううちに、ブツリとばかり噛み切つて、  
石の間に吐はき棄すてた。それと一緒にコロコロと

振り子の附かない木の鈴が、地面の上に転がった。

こうして我れと吾が身をば、のろつく 咀い尽した大男、  
息は忽ちたちま絶え果てて、石の野原に打ちたおれ、  
手足も頭もバラバラに、胴と離れて転がった。

折しも四方に雲が湧き、雷が鳴り風が吹き、  
月日の光りも真暗に、砂や小石を吹き上げて、  
車軸を流す大雨を、泥や小砂利の滝にして、  
か 彼の大男の亡骸なきがらも、埋もるばかりにふりかけた。

その時海も野も山も、砕くるばかりに鳴り渡る、  
さも物凄<sup>い</sup>恐ろしい、真暗闇のただ中に、  
か 彼の石男の眉間みけんから、赤い光りが輝やいて、  
額の骨が真まつぶた一二ツに、パツと割れたと思<sup>う</sup>うち、

真赤な鸚鵡が飛び出して、東の方へ飛んで行<sup>つ</sup>た。

又石男の胸からは、青い光りが輝やいて、  
身に宝石の鱗着<sup>うろこ</sup>た、細い海蛇<sup>かいだ</sup>を巻き付けた、  
大きな鏡が現われて、南の方へ飛んで行<sup>つ</sup>た。

やがて空には雲が晴れ、地には嵐が吹き止んで、  
泥の野原に泥の山、濁<sup>は</sup>つた海のその他は、  
何にも見えぬその涯<sup>はて</sup>に、真赤な真赤な太陽が、  
ぐるぐるぐると渦巻いて、眩<sup>まぶ</sup>しく沈みかけていた。

その時地面のドン底の、彼<sup>か</sup>の石男の亡<sup>なきがら</sup>骸<sup>がら</sup>の、  
数限りない毛穴から、何億万とも数知れぬ、  
大きい小さい様々の、石の卵が湧き出して、  
暖かい日に照らされて、一ツ一ツにかえり出す。

足から出たのは艸くさや木に、胴から出たのは虫けらに、  
 手から出たのは鳥とりけもの獸、水に沈めば魚うおくずしに、  
 又頭から湧いたのは、数限りない人間に、  
 われて這い出て世の中に、今の通りに散らばって、  
 一つの国が出来上り、藍丸という名が付いた。

扱さてその中に只一つ、臍へその中から湧き出した、  
 小さい白い一粒は、気高い尊い御姿の、  
 若いお方に抜けかわり、藍丸国の王様の、  
 位つに即いてそのままに、何千何万何億と、  
 数限りない年としつき月を、無事に治めておわします。

この藍丸の国のうち、津々浦々に到るまで、  
 皆正直に働いて、この珍しい長ながい生の、

王に忠義を尽す故、王はおいでになりながら、  
広い國中何一つ、御氣にかかった事もなく、  
いつも御殿の奥深く、銀の寢台ねだいに身を休め、  
現うつつともなく夢ぞとも、御存じのない魂は、  
他の世界へ抜け出でて、他の世界の人々に、  
王の心の気樂さを、示し歩いておわします」

ここまで読んで来ると生憎あいにく、先に立つたお爺さんは、この時不図袋ふとが軽くなつたのに  
気が付いて、変だと思ひながらふり返つて見ると、自分の背中の袋から落ちた銀杏の葉が、  
ずつと背後うしろまで長く続いているのを見付けた。これは大變と吃驚びつくりして袋を調べて見ると、  
最前美留女さつき姫が缺で切り破つた穴が、袋の底に三角あに開いている。お爺さんはこれを見る  
と憤おこるまい事か——

「奴おのれ小娘、覚悟をしろ。こんな悪戯わるさをして俺の大切な役目を破つたからには生かしてお  
く事は出来ないぞ。どうするか見ておれ」

と大きな声で怒鳴りながら、忽たちまち鬼のような顔になつて袋も何も打うつ棄ちやつて、あと引か

えして追っかけて来た。

美留女姫は二度吃驚<sup>びつくり</sup>。もう銀杏の葉の字を読むどころの沙汰<sup>さた</sup>ではない。慌てて逃げ出して、後<sup>あと</sup>から来た白髪小僧の袖に縋<sup>すが</sup>つて――

「あれ、助けて頂戴。白髪小僧さん。助けて頂戴。あのお爺様に殺されます。妾<sup>わたし</sup>を助けて頂戴。連れて逃げて頂戴。早く。早く」

と云いながら、もう先へ立つて駈<sup>か</sup>け出した。この様子を見たお爺さんは益々腹を立てて真赤<sup>ましか</sup>になつて、

「奴<sup>おの</sup>れ悪魔の娘、逃げようとして逃がすものか。空の涯までも追っかけて引つ捕えてくれる。引つ捕えたら生かしてはおかないぞ。あとから行く白髪の男、貴様も待て。二人共悪魔であろう。国を乱す悪魔であろう。石神の文<sup>ふみ</sup>を読んだからには悪魔の片われに違いない。逃がす事は出来ないぞ。生かしておく事は出来ないぞ」

と大きな声で喚<sup>わめ</sup>きながら追っつけた。

ところがこの時白髪小僧は、美留女姫<sup>みるめ</sup>に誘<sup>さそ</sup>われて一所にあとから逃げながら、このお爺さんの喚<sup>わめ</sup>めき声を聞き付けて不図うしろをふり返ると、その顔を一目見るや否や、お爺さんは又もや腰の抜ける程驚いた様子で――

「ヤヤ。貴方様は藍丸国王様では御座いませぬか。どうしてここにお出で遊ばしました。そうしてそのお姿は……まあ、何という恐れ多い……浅ましいお姿……」

と呆氣あっけに取られて立ち止まった。けれども美留女姫は少しも気が付かずに先へ走るし、白髪小僧もそのあとからくつついて、お爺さんが立ち止まった隙ひまにドンドン駈け出して行った。この様子を見るとお爺様さんはもう狂氣きちがいのように周章あわて出して――

「あれ。王様。王様。これはどうした事で御座います。お待ち下さりませ。お待ち遊ばせ。その女は悪魔……大悪魔で御座いますぞ。飛んでもない。飛んでもない。お待ち……お待ち遊ばせ。王様。王様」

と息を機はずませて、又もや宙を飛んで追っかけた。

こうして三人は追いつ逐おわれつ、だんだん人里遠く走って来たが、美留女姫はもう苦しくて苦しくて堪たまらないような声を出して――

「白髪小僧さん……白髪小僧さん……」

と呼びながらふり返りふり返り走って行く。うしろからはお爺さんが青い眼玉を血走らし――

「藍丸王様……王様……藍丸様ア」



と呼びながら追っかける。白髪小僧は只無暗むやみに息を切らして駈け続けた。

やがて夕日は西の山にとつぷりと落ち込んで、あたりが冷たく薄暗くなった。野原には露が降りて、空には星が光り初めた。けれどもお爺さんは追っかける事を止めなかった。とうとう山の中へ分け入って、小さな池の縁をめぐって、深い大きな杉の森に這入った時は、あたりがすっかり真暗になって、あとにも先にももう何にも見えず、只怖ろしさの余り声を震わして泣いて行く美留女姫の声を便りに、木の幹を手探りにして追うて行った。その内に白髪小僧は、ヒョロヒョロに疲れて、息をぜいぜい切らすようになった。それでも構わずに走っていると、あつちの根っ子に引っかけり、こつちの幹に打ぶつかり、もうこの上には一足も行かれないようになって――

「オーツ」

と呼んだと思うと、そのままそこよろめき倒れてしまった。

## 五 七ツの灯火

すると不思議な事には今呼んだ声が、誰かの耳に這入ったものと見えて、遠くで高らか

に――

「オ——オ……」

と返事をする声なきこえた。白髪小僧はじつと顔を挙げて向うを見ると、丁度今声の聞こえたあたりに小さな燈光あかりが一ツチラリと光り初めた。やがて、その光りが三ツになった。五ツになった。七ツになった。と思う間もなくその七ツの燈火ともしびが行儀よく並んでこちらへ進んで来た。その七ツの燈火ともしびに照らされた向うの有様を見ると、見事な飾りをした広い廊下で、天てんじょう井いや壁に飾り付けてある寶石だか金銀だかが五色ごしきの光りを照り返して、まことに眼も眩くらむばかりの美しさである。そのうちに燈火あかりはだんだん近附いて、やがて持つている人の姿がはつきりと見えるようになった。

見ると七人の持ち人もての内真中の一人だけは黄色の着物を着たお爺さんで、あとの六人は皆空色の着物を着た十二三の男の児であった。そうしてそのお爺さんは、最前さつき美留女きりよ姫と白髪小僧とを追っかけた、眼の玉の青いお爺さんに相違ちがひなかつた。その中うちに七人は直ぐに自分の傍まで近附いて来たが、その持つている手燭てしよくの光りで四方あたりを見ると、ここは又大きい広い、そうして今の廊下よりもずっと見事な室へやである。そうして白髪小僧自身の姿をふりかえって見ると、こは如何いかに。最前さつきまでは粗末な着物を着た乞食姿で、土の上に倒れ

ていた筈なのに、今は白い軽い絹の寝巻を着て、柔らかい厚い布団の中に埋もっている。その上に自分の顔にふりかかる髪毛かみのけを見るところであろう！ 今まで滝の水のように白かった筈なのが、今は濃い緑色の光沢つやのある房々とした髪毛かみのけになって、振り動かす度に云うに云われぬ美しい芳香かおりが湧き出すのであった。重ね重ねの奇妙不思議に当り前の者ならば、屹度きつと気絶でもするか、それとも夢を見ているのだと思つて身体からだでも爪つねつて見るところだが、併ししか白髪小僧は平気であつた。昨夜も一昨夜もそのずっと前からここに居て、たつた今眼が覚めたような顔をして、先に立つたお爺さんの顔を横になつたまま見ていた。お爺さんは六人の小供を従えて、寢台ねだいの前に来て叮嚀ていれいにお辞儀をした。そうして畏るおそる口を開いた――

「藍丸王様。青眼あおめじい爺いで御座います。お召しに依つて参りました。何の御用で入らせられまするか。何卒どうぞ何なりと御仰せ付けを願います」

白髪小僧はこう尋ねられても何も返事をせずに、只ぼんやりと青眼爺さんの顔を見ていた。

するとお爺さんは何やら思い当る事があると見えて、傍の小供に眼くばせをしたが、やがてその中うちの一人にんが玉のような水を水晶さかすきの盃さかずきに掬くんで来て、謹つづしんで眼の前に差し出した

から、取り上げて飲んで見ると……その美味おいしかった事……そうしてその水には何か貴たつとい薬でも這入っていたものと見えて、今までの疲れも苦しさもすっかりと忘れてしまつて、身体からだ中に新らしい元気が満ち渡るように思つた。

青眼じいさん翁様は白髮小僧の藍丸王が飲み干した盃を受け取つて、傍の小供に渡すと直ぐに又眼くばせをして、六人の小供を皆遠くの廊下へ退しりぞけて、只ただひと独り王の前に蹲ひざまずいて恐る恐る口を開いた――

「王様。恐れながら王様は只今何か夢を御覽遊ばしたのでは御座いませぬか」

藍丸王は又もや言葉がよく解らないために返事が出来なかつた。只何だかわからないという徴しるしに、頭を軽く左右に振つて見せた。けれども青眼翁は何だか心配で堪たまらぬように、じつと藍丸王の顔を見つめていた。そうして重ねて一層叮嚀な言葉で恐る恐る尋ねた。

「王様。私は今日迄王様のお守り役で御座いました。で御座いますから、今まで何事も私にお隠し遊ばした事は一つとして御座いませぬでした。私は王様を御疑い申し上げる訳では御座いませぬけれども、もしや王様は、只今御覽遊ばした夢を御忘れ遊ばしたのでは御座いませぬか。白い着物を着た悪魔の娘と一所に、私の跡をお追ひ遊ばして、銀杏の葉に書いた文字を御覽遊ばしたのでは御座いませぬか。屹度、屹度御覽遊ばしませぬか。もし

御隠し遊ばすと王様の御身の上やこの国の行く末に容易ならぬ災いが起りますぞ」

青眼の言葉は次第に烈しくなつて来た。そしてさも恐ろしそうに王の顔を見入りながら、力を籠めて問い詰めた。

青眼がどうしてこんな事を尋ねるのか、又あの銀杏の葉に書いてあったお話が何故こんなに気にかかるのか。そうして又あのお話を聞けば何故そんな災いがふりかかるのか——そして青眼はどうしてそれを知っているのでしょうか。藍丸王がもし当り前の人間ならば、こんないろいろの疑いを起して青眼にその仔細を尋ねるであろう。ところが藍丸王は旧来の白髪小僧の通り白痴で呑気でだんまりであつた。第一今の身の上と最前までの身の上とはどつちが本当なのか嘘なのか、それすら全く気にかげなかつた。その上に自分が白髪小僧であつた事などは疾くの昔に忘れてしまつてゐる。そして只眼を丸く大きくパチパチさせながら頭を今一度軽く左右に振つた切りであつた。

青眼は、いよいよ王がああ夢を見ていないのだと思つと、急に安心したらしく、ほつと嬉しそうな溜め息をした。そして又恭しく長いお辞儀をしながら——

「王様。私はこのように安堵致した事は御座いませぬ。夜分にお邪魔を致しましていろいろ失礼な事を申し上げた段は、幾重にも御許し下さいまし。最早夜が明けて参りました。

小供達を喚んで朝のお支度を致させましよう」

と云つた。

老人が又改めて長い最敬礼をして退くと、入れ交つて空色の着物を来た最前の小供等が六人、今度は手に手に種々な化粧の道具を捧げながら行列を立てて這入つて来て、藍丸王に朝の身支度をさせた。

一人がやおら手を取つて王を寢床から椅子へ導くと、一人は大きな黄金の盥に湯を張つたのを持つて、その前に立つた。傍の一人は着物を脱がせる。他の一人は嗽をさせる。も一人は身体中を拭き上げる。残つた一人はうしろから髪を梳く。おしまいの一人は香油を振りかける。皆順序よく静かに役目をつとめて、先ず黒い地に金モールを附けた着物を着せ、柔らかい青い革の靴を穿かせ、金銀を鏤めた剣を佩かせて、おしまいに香油を塗つた緑色の髪を長く垂らした上に、見事な黄金の王冠を戴せて、その上に厚い白い、床に引きずる位長い毛皮の外套を着せたから、今まで着物一枚に跣足でいた白髮小僧の藍丸王は、急に重たく窮屈なものに縛られて、身動きも出来ない位になつた。それから六人の小供達は三組に分れて、室の三方に付いている六ツの窓を開いて、朝の清らかな光りと軽い風とを室一パイに流れ込ませた。そうして暁の透き通つた青い光りの裡にうつらうつ

ら瞬く星と、夢のように並び立っている宮殿と、その前の花園と、噴水と、そのような美しい景色を見て恍惚うっとりとしている藍丸王を残して、種々の化粧道具と一所に、六人の小供はどこへか音も無く退いてしまった。

## 六 大臣と漁師

これから後のち、藍丸王が見たいいろいろの出来事は、当り前の者ならばその都度つど驚いて、眼でも眩まわして終わなければならぬような事ばかりであった。

今日は藍丸国王の御誕生日だというので、紅木公爵べんぎという、丈の高い、黒い髪を生やした、あの美留女姫みるめのお父様によく肖にた総理大臣と、沢山の護衛の兵士に連れられて、お城の北の紫紺樹しこんじゆという樹の林の中に在る、石神の御廟みたまやに朝の御参りをしたが、その時沢山の兵士が皆一時に剣を捧げて敬礼をした時の神々こうこうしかった事。それから宮中の大広間に出て、大勢の尊い役人や、この国の四方を守る四人の王様や、その家来達から、一々御祝いの言葉を受けた時の厳おごぞかだった事。又は美事な十二頭立の馬車に乗って、前後を騎兵に守らせながらお城の南の広い野原に出て、何万何千とも知れぬ兵隊の觀兵式やを行らせ

た時の勇ましかつた事。それから夜になつて、宮中に催された大音楽会と、大舞踏会と、大晚餐会の大袈裟であつた事。その他見る者聞くもの何一ツとして、眼を驚かし耳を驚かさぬものはなかつた。

けれども白痴の白髮小僧の藍丸王は、相変らず悠々と落ち付いて、まるで生れながらの王でもあるように、ニコニコ笑いながら澄まし込んで、大勢の家来に平常よりずっと気高く有り難く思わせた。

けれどもこの日の内に藍丸王が心から美しい、可愛らしい、珍しい、不思議だと感心したらしいものが只一ツあつた。それは一羽の赤い羽子を持つた鸚鵡であつた。この鸚鵡は最前の紅木という総理大臣の息子で、平生王の御遊び相手として毎日宮中に来ている紅矢という児が、今日は少し加減が悪くて御機嫌伺いに参りかねます故、代りの御慰みにと云つて遣したもので、王の室の真中の象牙張りの机の上に籠に入れて置いてあつたが、奇妙な事にはその歌う声が昨夜夢の中で聞いた美留女姫の声にそっくりで、眼を瞑つて聞いていると姫が直ぐ側に来ているように思われた。

その上にも不思議な事には、何事に依らず見た事は見たまま、聞いた事は聞いたままその場限りで綺麗に忘れて了う白髮小僧の藍丸王が、彼の美留女姫の姿や声だけははつきり



とよく記憶おぼえていたものと見えて、今しも宴会が済んで自分の室へやに連れられて帰ると直ぐに、この赤鸚鵡の声に耳を留とめて、着物を着かえる間まも待ち遠しそうに、急いで傍の銀の椅子に腰を卸おろすとそのまま一心にその歌に聞き惚とれた。

その歌の節は云うに及ばず、文句までも昨夜ゆうべの夢の美留女の読み上げた歌によく似ていた。

「青い空には雲が湧く、けれども直ぐに消え失せる。

黒い海には波が立つ、それでも直ぐに消えて行く。

昔ながらの世の不思議、見たか聞いたか解かったか。

昨夜ゆうべ妾わたしが見た夢の、扱さても不思議さ恐ろしさ。

白髪小僧の物語。そして妾の物語。

その又夢の中で見た、この身の上のおしまいに、昨夜ゆうべどこかの森中なかへ、白髪小僧と逃げ込んで、樹の根に倒れたそれ迄は、妾わたしは美留楼公爵みるろうの、

第三番目の女の子、名をば美留女というたのに、今朝眼けさが覺めて気が付けば、扱あつかも不思議や見も知らぬ、藍丸国の大臣で、紅木と名乗る公爵の、第三番目のお姫ひいさま様、これはどうした事でしょう。

着物も家も何もかも、すっかり變つて吾が名さえ、美紅みくにとかわつております。只変らぬは御両親、お兄様や姉様や、又は家来の顔ばかり。

これは夢かと疑えば、傍みんなから皆笑い出し、お前は何を云うのです、何か夢でも見たのかえ。お前は旧来もとからこの家うちの、可愛い可愛い美紅姫。

ずっと前からお話が、何より何より大好きで、御本ばかりを読み続け、夢中になつておつた故、

いづらか気持が変になり、十幾年のその間、  
他の処へ居たという、馬鹿氣た長い夢を見て、  
それを本当にして終い、寝ぼけているのに違いない、  
可笑しい人と皆みんなから、お笑い草にされました。

けれども妾はどうしても、今の妾が本当か、  
昔の妾が夢なのか、疑わしくてなりません。

妾の今が夢ならば、あれだけ皆みんなで笑われて、  
また疑っている筈は、どう考えてもありません。  
昔の妾が本当ほんとなら、まだ夢を見ぬその前を、  
少しも思い出す事が、出来ない筈はありません。  
今も昔も本当ほんとなら、又はどちらも夢ならば、  
妾は居るのか居ないのか、解らぬようになります。

よし夢にせよ何にせよ、妾の不思議な身の上を、  
よく考えて頂戴な、妾の窓の直ぐ傍に、  
妾の歌の真似をする、大きな綺麗な赤鸚鵡。

怪しい夢の今朝醒めて、日が出て月は沈んでも、  
鳥が木の間に歌うても、まだ眼に残る幻影は、  
白い御髪おんかみに白い肌おんかお、月の御顔まゆ雲の眉、  
世にも気高い御姿おんすがた、乞食の王の御姿。

白い御髪おんかみを染め上げて、緑の波をうずまかせ、  
金の冠こがねむり差し上げて、銀の椅子に召されたら、  
まだ拝まねどこの国の、尊いお方に劣るまい。

妾だいしの大切な姉様は、はや近い内皇后の、  
位おつに御即おつきなさるとか、今朝兄上おつが仰しやつた。

兄上様の御名前は、聞くも凜々しい紅矢様、  
 姉上様の御名前は、花の色添う濃紅姫。

妾は大切な姉様の、世にも目出度い御仕合わせ、  
 嬉しい事と思いつつ、楽しい事と思いつつ、  
 自分は独り居残つて、昨夜の夢の御姿、  
 白いお髪の毛を、又無いものと慕うては、  
 淋しく暮す身の上を、誰かあわれと思おうか。

よしや憐れとも思つても、よしや不憫とも思つても、  
 昨夜の夢をくり返し、又見る術はないものを、  
 青い空には雲が湧く、けれども直ぐに散り失せる。  
 黒い海には波が立つ、けれども直ぐに消えて行く。  
 消えぬ妾のこの思い、見たか聞いたか解つたか。

空行く鳥を追い止むる、それより難いこの願い。

早瀬の香魚あゆを掬すくい取る、それより難いこの願い。

夢かまことかまだ知らぬ、うつつともないまぼろしを、

愚かに慕うこの心、見たか聞いたか解ったか」

藍丸王は我れを忘れてこの歌に聞き惚とれていた。そうして昨夜ゆうべの夢の続きでも見ているように、美留女姫の姿を想い浮うめていると、暫しばらく黙もっていた鸚鵡しばらは又もや頭を低く下げて前と同じ声の同じ節で違ちがった歌を唄うい出した。

「青い空には雲が湧わく、けれども直ぐに消え失せる。

黒い海には波が立たつ、けれども直ぐに凪ないでゆく。

昔ながらの世の不思議、見たか聞いたかわかったか。

藍丸国のその中で、南の国に湖の、

数ある中で名も高い、多留美たるとみと呼よばるる湖は、

お年寄としよりられた父様とうと、妾めかけが魚うおを捕とるところ。

翡翠ひすいの波なみを潜くぐっては、金銀きんぎんの魚うおを追おいまわし、

瑠璃るりの深淵ふかみに沈しんでは、真珠まじゆの貝かいを探り取る。  
 捕とつて尽つきせぬ魚うおの数かず、拾ひろうて尽つきぬ貝かいの数かず。  
 扱さては楽しい明あけ暮くれれに、小こさい船ふねと小こさい帆ふたを、  
 風かぜと波なみとに送おくられて、歌うたうて尽つきぬ海うみの歌うた。

けれども妾めかけは昨夜ゆうべから、この身みの上うへの幸しあわせ福ふくは、  
 只ただこれ切りきりのものなのか、それともつとこの世よには、  
 楽しい事ことがあるのかと、疑うたがわしくてなりませぬ。

今朝けさ明あけ方かたに見みた夢ゆめの、扱さても不思議ふしぎさ面白おもしろさ。  
 漁いし師しであつた父ちち様さまが、美留みり楼ろう公こう爵しゃく様さまとなり、  
 おわかれ申まをした母かあ様さまと、兄にい様さま姉ねえ様さまお揃そろいで、  
 十幾年じゅうねんのその間ま、楽たのしく暮くしたものがたり。

銀杏いちようの文字もじのお話わしの、惜あはしいところであと絶たえて、

石神様のお話しは、わが身の上の事となり、  
白髪小僧と青眼玉、それに妾と三人で、  
追いつ追われつ行く末は、真暗闇の森の中。

扱さて眼が覚めて気が付けば、この身は矢張もと旧のまま。  
十幾年の栄耀えいようをば、只片時の夢に見た、  
枕に響く波の音、窓に吹き込む風の声、  
身は干ほし藁わらのその中に、襪ぼろ褌ろを着たまま寝ています。

今の妾が仕合わせか、夢の妾が仕合わせか。  
青い空には雲が湧く、黒い海には波が出いづ。

よしや夢でも構わない。よしうつつでも構わない。  
妾は不思議な珍しい、又面白い恐ろしい、  
あの石神のお話しの、続きをもっと見たかった。



ほんとに惜しい事をした、ほんとに惜しい事をした。

おやまあお前は赤鸚鵡、夢に出て来た赤鸚鵡。

まだ夜も明けぬ窓に来て、窓の敷居に掴まって、

星の光りを浴みながら、ハタハタ羽根を打っている。

お前は本当に居たのかえ、本当にこの世に居たのかえ。

もしもお前が夢でなく、本当にこの世に居るのなら、

お前の仲間の化け物の、四つの道具や扱は又、

蛇や鏡もこの国の、どこかに居るに違いない。

そしてお前が眼の前に、今まざまざと居るように、

美留女の智恵や学問を、妾はちゃんと持っている。

夢は覚めても忘れずに、妾はちゃんと持っている。

扱は今のは正夢か、本当にあつた事なのか。

そして妾があのように貴い身分になる事を、  
前兆まえじらせする夢なのか、本当ほんとに不思議な今朝けさの夢。

銀杏の根本で繻ひもといた、不思議な書物の中にある、

妾の女王の絵姿は、絵空事ではなかつたか。

空には白い星の数、海には青い波の色。

棚引く雲の匂やかに、はや暁の色染めて、

東の空にほのぼのと、夢より綺麗な日の光り。

赤い鸚鵡ようどうしたの、まあ恐ろしい美しい、

真赤な真赤な光明を、眩しい位輝やかし、

あれ羽ばたきをするうちに、窓から高く飛び上り、

東の空に太陽の、光りが出ると一時いちじきに、

海おもての面に湧き上る、金銀の波雲の波、

蹴立て蹴立てて行く末は、あと白波の沖の方、

あれあれ見えなくなりました……」

藍丸王は又もやこの歌に聞き惚とれて、うっとり眼を細くして夜よの更ふけるのも忘れていた。

するとその中うちお寝やすみの時刻が来たと見えて、今朝けさの青眼老人が、六人の小供と一所に、手燭を持って這入こって来たが、王が真暗へやな室うちの中に鸚鵡うらの籠を置いて、一心にその歌に聞き入こっている様子を見ると、何故なにだか大層驚いた様子で、慌あわてて王の前に進み寄よって――

「王様は飛んでもない事を遊あそびします。王様はこの国の古い掟をお忘れ遊あそびしましたか。

『人の声を盗ぬすむ者、他ひとの姿を盗ぬすむ者、他ひとの生血いきちを盗ぬすむ者、この三つは悪魔である。見当り次第に打ち壊こせ、打ち殺ころせ、焼やいて灰にして土に埋くめよ』この言葉をお忘れ遊あそびしましたか。この鳥こそは今申し上げた、人の声を盗ぬすむ悪魔で御座ごりまするぞ。悪魔が王様の御声を盗ぬすみに来きているので御座ごりまするぞ。吁あ。恐おそろしい、恐おそろしい。御免下ごされませ。この鳥は私が頂戴して殺して仕舞し舞まいます」

と云いう中うちに籠を取り上げて持つて行いこうとした。するとその時どうした拍ひ子ょうしか籠の底

が抜け落ちたから、鸚鵡は直ぐにパツと飛び出して、さも嬉しそうに羽ばたきを為したが、  
忽ち眼も眩む程真赤な光りを放ちながら闇の中を大空高く舞い上がって雲の中へ隠れてし  
まった。

### 七 眼、耳、鼻、口

藍丸王は翌る朝眼を覚ますと直ぐに身支度を済まして、昨日のように紅木大臣と一所に  
お城の北の先祖の御廟へ参詣をしたが、それから後は昨日のように種々な大仕掛な出  
来事は無かつた。お附の者に連れられて自分の室に帰って、昨日にも倍して結構な朝御飯  
を済ました。ところがその御飯が済むと、やがて一人の立派な軍人が這入って来て藍丸王  
に最敬礼を為しながら――

「紅矢様が御出でになりました」

と云つた。そうして王が軽く頷くと間もなく軍人と入れ違つて、紅い服に白い靴を穿いた、  
彼の美紅姫とよく肖た少年がさも嬉しそうに元氣よく走り込んで来た。そうして藍丸  
王と抱き合つて挨拶をしたが、紅矢は抱き合つた手を離すと直ぐに口を開いた――

「王様。昨日は私、本当に参りたくて参りたくて堪りませんで御座いましたよ。本当に私  
 は一日王様にお眼にかかりませぬと、淋しくて淋しくて一年も二年も独りで居るような  
 心地が致しますよ。今日はその代り何か面白い遊びを致しますよう。魚釣りに致しまし  
 うか、馬乗りに致しましうか。それとも山狩りに致しましうか。私は何でも御供致し  
 ますよ」

と凜とした活発な声で熱心に話す顔を見ると、どんな者でも誘い込まれて、一所に遊び  
 たくなりそうである。すると紅矢は不図、昨夜青眼老人が机の傍に置き忘れて行つた鸚鵡  
 の空籠を見付けて、驚いて眼を真円にして尋ねた――

「オヤ。この籠は空では御座いませぬか。あの赤い鳥は逃げたので御座いますか」

王はニコニコ笑いながら點頭いた。

「オヤツ。最早逃げてしまつたか。憎い奴め。私がいろんな面白い芸当を教えておきま  
 したのに。そしてどちらへ逃げて参りましたか」

藍丸王は矢張り黙つて、昨夜鸚鵡が逃げ出した東の窓を指した。これを見ると紅矢は膝  
 をハタと打つて――

「ああ。解りました。解りました。それでは自分の旧居た山へ帰つたので御座います。何

でも私の家来が四五日前に彼の山へ小鳥を捕りに参りました時に一所に網に掛かりましたのだそうで、私もあまり珍しゅう御座いましたから妹に預けておいたので御座います。名前は何と申しますか存じませぬが、何の声でもよく真似る面白い鳥で御座いましたのに惜しい事を為しました。ではこう遊ばしませぬか。今日は山狩りの御供を致しましょう。そうして今一度彼の鳥を捕えようでは御座いませぬか。何、訳は御座いませぬ。直ぐに捕まえてこの籠に入れられますよ。如何で御座います。そう為様では御座いませぬか」と熱心に勧めた。そうして藍丸王が軽く點頭くのを見るや否や、気の早い兎と見えて直ぐに兵隊に云い付けて狩りの支度をして仕舞った。

弓矢を背負うた四十人の騎馬武者と、角笛を胸に吊した紅矢を後前に従えた藍丸王は白い馬に乗つて、華やかな鎧を着た番兵の敬礼を受けながら、悠々とお城の門を出かけたが、流石藍丸国第一の都だけあって、王の通った街々はどこでも賑やかでない処は無く、雲を突き抜く程高い家が隙間もなく立ち並んでいるために、往来は井戸の底のように昼間でも薄暗く、馬や、牛や、犬や、駱駝や、駝鳥だの、鹿だの、その他種々のものに引かされた様々の形をした車が、行列を立てて歩いて行く。そうして髪の毛や、眼色や、顔色が赤や、白や、鳶色や、黒等とそれぞれに違つた人々が、各自に好きな仕立ての着物を着

て、華やかに飾り立てた店の間を、押し合いへし合あひして行き違ちがう有様は、まるで春はる秋あきの花が一いち時じに河を流れて行くようである。けれども藍丸王の行列が見えると、こんなに繁華な往来が皆一時にピタリと静まつて、見る間に途みちを左右に開いて、馭ぎよ者しやは鞭むちを捧げ畜生は前膝を折り、途行く人々は帽子を取つて最敬礼をする。その間を王の行列は静々と通り抜けて、間もなく街外れに來ると、そこから馬を早めて野を横切つて、東の方に並んでいる山の中に駈け入つた。

この日お供をしている四十人の騎馬武者は、皆紅矢の命い令つげを守つて他たの鳥獸けものには眼もくれずに、只赤い羽根を持つて人間の声を出す鳥が居たらばと、そればかり心掛けて、眼を見張り、耳を澄まして行つた。中にも紅矢は真先に立つて、もしや人間のような鳥の鳴き声があるか、赤い羽根の影が見えはせぬかと、皆と一所に油断なく気を付けて次第に山深く分け入つたが、見ゆるものとは山々の燃え立つような紅葉もみぢばかり。聞こゆるものとは遠くを流るる谷川の音。それさえ折々は途絶え途絶えて、空には雲一つ見えず、地には木の葉一枚動かず、気味の悪い程静かに晴れ渡つた日であつた。

それでも皆気を落さずに一心になつて探し続けたが、やがて正午ひる近くなつて、人も馬もとある檜かしの樹の森に這入つて、兵ひやうろう糧うを遣つかいながら一休みしてから、夕方ここで又会

う約束で、四十人が四組にわかれて、四方の山や谷を残る処無く探した。けれども相変らず森閑しんかんとしていて、眼指す赤い鳥は影も形も見せない。

中にも藍丸王の十人の組は、以前の檜さつきの森から東側へかけて、夕方まで探していたが、最早日もはやが暮れかかってもそれらしい影は愚か、小雀こどり一羽眼に這入らぬから、皆落胆がっかりして疲れ切つてしまつて、約束の通り最前さつきの檜の樹の森へ帰ろうとした。

するとこの時不意にどこか遠い処で、鳥のような人間のような奇態な声で歌を唄つているのを十人が一時に聞いた。

「妾わたしはここに居ります。淋しくここに居ります。

恋しい御方の御出おいでをば。御待ち申しております。

青い空には雲が湧く。黒い海には波が立つ。

昔ながらの世の不思議。見たか聞いたか解つたか。

よしや夢でも現うつでも。妾はここに居ります。

淋しくここに居ります。妾の名前は赤鸚鵡」



皆は顔を見合わせて、それつと俄にわかに元氣百倍して駈け出したが、どう為したものか十人が十人共、各自てんでに一人は東、一人は西と違つた方に声を聞いて、こつちだこつちだと云いながら、八方に散つて行つた。

あとに残つた藍丸王は、どつちとも解らず、只その声の為する方に迷い迷うて、いつの間にか只とある谷の奥深く、真暗な杉の木立の中へ這入つて仕舞つた。

その時は最早もつ短い秋の日が暮れて、鳥の声も聞こえなくなつていたが、その代り真暗な杉の森の奥にチラチラと焚火たきびの光りが見えて来た。その火を見ると今まで音おとなく王を乗せて来た白馬しろうまが驚いたと見えて、急に四足を突張つて動かなくなつたから、藍丸王は馬から降りて手綱たづなを放り出したまま、つかつかと焚火の側に近寄つて来た。

見ると火の傍には四人の不思議な人間が、寝たり座つたりして火にあたっている。右の端に坐っているのは黄色い髪を垂らして、穴の無い笛を吹いている汚きたないお爺さんで、その次に寝ころんでいるのは絶えず振り子の無い木の鈴を振り立てている、眉毛も髯も無いクリクリ坊主である。

それからその端にうつ伏せに寝ころんでいるのは、瘡やせこけて青ざめた、眼ばかり光る顔に、黒い髪かみのけ毛をバラバラと垂らした女で、手には一冊の字も絵も何も書いて無い、白

紙の書物を拵げて読んでゐる。そしてその右には赤膨れに肥つた真裸体の赤ん坊が座つて、糸も何も張つて無い古月琴を一挺抱えて弾いていた。並大抵の者がこのような処でこんな者を見たならば、身体中の血が凍えて終うかも知れないのであるが、そこは藍丸王は平気な者で、却て珍しそうにニコニコ笑いながらその前へ近寄つて、火の上に手を翳した。

すると今まで顔中皺だらけで、どこに眼があるか口があるか解からなかつたお爺さんは、藍丸王が側に来て来て居んだのを見るや否や、皺の間から大きな皿のような眼と、真赤な口をパツと開いてゲラゲラと笑つたと思つたと、それを相図に他の三人は一度に立ち上つて、焚火と藍丸王の周圍をグルグルまわりながら、奇妙な舞踊を始めた。先ず瘡せ女が白紙の書物を開いて、奇妙な節を付けて歌を唄いながら踊り初めると、あとから赤ん坊が糸の無い月琴をボタンボタンと掌で叩きながら従つて行く。それにつれてあとの二人は、手に持つた道具を振り廻しながら、まるで蟋蟀か海老のように、調子を揃へてはねまわつて行つた。その歌はこうであつた。

「占めた。占めた。旨い。旨い。

王様になる時が来た。

この国取つて我儘わがまま云うて

楽しみをする時が来た」

俺達は石神様の

大切な四人の家来。

眼と口と。鼻と耳と」

藍丸の国のはじめに

御主人の石神様が

見るもの聞くもの何にも無くて

たった一人の淋しさつらさ

我慢出来ずに吾が身を咀のろい

天地を咀つて死んでしまった」

眼には荒野あれのの石より他に

見るものも無い恨みを籠こめて

耳には風音波音ばかり

他には何にも聞かれぬ恨み

鼻には湖の香埃ほこりのかおり

他には何にも嗅かがれぬ恨み

舌には話しの相手も無くて

泣くも笑うも只身一ツの

淋さみしい淋さみしい怨みを籠めて

あとに残して死んでしまった」

見たい見たいが眼玉の望み――

耳は何でも聞きたい願ひ――

鼻は何でも嗅かぎたい願ひ――

舌は何でも話したい――

俺等おいらが主人あるじの石神様の

怨みの籠もった四つの道具」

書物から出た瘠せ女。

笛から湧き出たお爺さん。

月琴から出た裸体はだかの赤児あかこ。

鈴から出て来たクリクリ坊主」

四人の家来は石神様の

この世を咄う使わしめ」

坊主の持つてる木の鈴は

王の口をば閉じるため。

女の持つてる書き物は

王の眼玉を潰すため。

赤児の持つてる月琴は

王の鼻をば塞ぐため。

爺じいの持つてる石笛は

王の耳をば鎖とぎすため。

そうして王を追い出して

四人が代りに王様の

一人の姿に化け込んで

王の威光を振りまわし

勝手な事を為度いため」

面白い。面白い。有難い。有難い。

占めた。占めた。旨い。旨い。

王様に。なる時が来た。

この国とつて。我儘云うて

楽しみをする時が来た」

とこんな風に繰り返し繰り返し唄っては踊り、踊っては唄いしていたが、その内に真まっば裸だか体の赤ん坊が、糸の無い月琴を弾き止めると、皆一時にピタリと踊りを止めて、手に持つている道具を藍丸王に渡した。

藍丸王が何気なく、クリクリ坊主から振り子の無い木の鈴を受け取ると、こは如何いかに、急に唇や舌が痺しびれて仕舞って声さえ出なくなった。次に瘠しせ女から白紙の書物を受け取ると、今度は眼が見えなくなった。赤ん坊から月琴を受け取ると鼻が利かなくなってしまう。爺じいから笛を受け取るととうとう耳まで聾つんぼになつて、どっちが西やら東やら、自分がどこに居るのやら、全く解からなくなつてしまった。

この体ていを見た四人の魔者は、又もや嬉しそうに藍丸王の周囲まわりを踊り廻わつて――

「藍丸王はどうとう死んだ。

生きていながら死んで終った。

この世に居ながらこの世に居ない」

面白面白面白い。

俺等おいちの主人の石神様は

眼も見え耳も聞こえていたが

広い荒野あれののその只中に

見るもの聞くもの何にも無くて

たった一人の淋しさつらさ

堪こらえ切れずに天地を恨み

吾が身を怨んで死んでしまった」

残る怨みのその一念が

眼玉に移って女に化けて

口に残って坊主になって

鼻に移って赤児に化けて

耳に残つて爺じじいになつて

今はこの世で藍丸王に

昔の主人の淋しさつらさ

思い知らせる時が来た」

花が咲いても紅葉もみじをしても

風が吹いても時雨しぐれが来ても

見えもしなければあ聞こえもしまい。

飢うえも渴うきもせぬその代り

どんな御馳走ごちそう貫つたとても

味もわからず香気においも為しまい」

鞭むちに打たれて血ちが浸しみ出ても

痛くもなければ悲しくもない。

音かも香かも無い不思議な身体からだ。

この世に居ながらこの世を知らぬ。

夜か昼かは愚かな事よ



我が身の在り家も我が身に知らぬ

世にも淋しい憐あわれな生命いのち」

世界の初めの石神様が

闇へと生れて闇へと帰る

たった一人の淋しい心

思い知ったか。思い知れ」

と口々に唄つて踊つていたが、やがて赤ん坊が一声ギャツと叫ぶと一所に、四人は一度に燃え立つ火の中へ飛び込んで終しまつた……と思う間もなく燃え上る火の中から、一人の少年が髪かみのけ毛けの色から衣服きものまで藍丸王そっくりの姿で、藍丸王の眼の前に踊り出した。見ると今までの藍丸王はいつの間にか見すばらしい乞食の白髪小僧しんまの姿に變つて終しまつて、緑色の房々した髪かみの毛けも旧来もとの通り雪のように白くなっていた。

この有様を見た新規の藍丸王は、忽ちカラカラと笑つて、直ぐに傍の焚火の中へ右手を突込んで掻きまわしながら、高らかに呪文を唱えた――

「世界中の何よりも赤い

世界中の何よりも明るい

世界中の何よりも美しい

火の精、血の精、花の精――

その羽子はねが羽ばたけば

またた瞬またたく間に天の涯

すぐに又土の底

一飛びに駈け廻る――

その紅あかい眼の光りは

夜も昼も同様に

千里万里どこまでも

居ながらに皆わかる――

声という声、音という音

皆聞いて皆真似る――

声の精、言葉の精、歌の精――

赤い鸚鵡出て来い――

と叫びながらその手を火の中から引き出すと、その拳こぶしの上には一匹の赤い鳥が乗っかつ

ていた。その赤い鳥は藍丸の王宮から逃げ出して今大勢の兵隊に一日がかり探されている彼の赤鸚鵡と寸分違わなかったが、只その眼玉ばかりは今までと違って、紅玉ルビーのように又は火のように、あたりを払って輝やいていた。

それを左の手に据えて、新規の藍丸王はつかつかと白髪小僧に近寄りながら――

「どうだ、藍丸王。見えたか、聞こえたか、解かったか。ハハハハハ。見えまい、聞こえまい、解かるまい。併し無駄だろうが云つて聞かせる。云うまでもなく俺は最前の四人の魔者が化けたのだ。石神の怨みの固まりだ。今まで赤鸚鵡を種々いろいろに使つて、やつとお前をここまで連れ出して来たのだ。気の毒だがお前の姿は俺が貰つた。只生命いのちだけは助けてやるから、その代り賤いやしい乞食姿になつて、何も見ず、何も聞かず、食べず云わず嗅かがずに、世界中をうろ付いておれ。その間まに俺は王に化け込んで、勝手気儘きままな事を為するのだ。

ああ、東の山に月が出かかったようだ。どれ。そろそろ出かけようか」

と二足三足踏み出したが、又引きかえして来て――

「待て待て。ここでは顔付きがまるで同じだからどっちが本物か解からない。序ついでにこうしておいてやる」

と云いながら傍に消え残つた真赤な燃えさしを取り上げて、ニコニコ笑っている白髪小

僧の顔へいきなりぐつと押し付けて、大きな十文字の焼け痕を付けた――

「ハハハハ。こうしておけば、よもや本当の藍丸王と気付く者はあるまい。おお。馬よ、来い来い」

と招き寄せると、不思議や立ち竦んで石のようになっていた筈の馬が、今は易々と動き出して直ぐに王の傍へ来た。王はそれにヒラリと飛び乗って、赤鸚鵡の眼の光りを使い、森の外へと駈け出した。あとに残った盲目の唾の白髮小僧は、最前の焼けどは熱くも何ともなかつたと見えて、赤く腫れ上って引つた顔のまま、ニコニコ笑いながら四ツの道具を抱えて、どこを当ともなく、この森を彷徨い出た。

話し變つて、最前四方にわかれて、赤鸚鵡を探しに行つた紅矢や兵隊達は、何も見つからぬ内に日が暮れてしまったので、急いで約束の檜の木に森に来て見ると、今度は他の者は皆揃つたが肝要の王様が居ない。これは大変だと皆一度に馬に飛び乗って、口々に藍丸王様藍丸王様と叫びながら暗い山の中を駈け出すと、その中に南の方の立木の間から、真赤に光る松明が見えて来た。

ところが不思議や四十人の騎馬武者が乗っている馬は、この光りをチラリと見るや否や一度に立ち竦んで一步も前へ進まなくなつた。打つても叩いても動かない。蹴つても煽つ

てもどうしても、石のように固くなっている。

皆は驚き慌てて、これはどうした事と騒ぎ立てたが、中にも紅矢は吃驚して――

「皆の者、気を付けよ。あの光りは怪しい光りだぞ。事に依ると魔者かも知れぬぞ。皆馬から降りて終え。弓を持っている者は矢を番えよ。剣を持っている者は鞆を払え。あれあれ。だんだん近付いて来る。皆紅矢に従いて来い。相図をしたらば一時に矢を放して斬りかかれ」

と叫んだ。声に応じて四十人の武者は、一度に馬から飛び降りて、二十人は弓を満月のように引き絞り、あとの二十人は剣を構えて眼の前に近付いて来た光る者にあわや打ちかかろうとした。ところがこの時遅く彼の時早く、紅矢は又もや一声高く――

「待て。粗相するな。王様だぞ」

と叫んだ。それと一所に、向うから来る者は赤い鳥を左の拳に据えて馬の上でニコニコ笑いながら帰って来る藍丸王だという事がわかつて、兵隊共は皆一度に矢を外し剣を納めて、地面の上にひれ伏した。中にも紅矢はホツと一息安心すると一所に、今までと打つて変った鸚鵡の眼の光りに驚いて、どういう訳かと怪しんだ。

その時に王は皆の前に馬を停めて、左の拳を高く差し上げながら――

「皆の者。よく見よ。これが今まで探していた赤鸚鵡という鳥だぞ。今までこの山の神様の使わしめで有つたのだぞ。自分は今まで彼の谷底の杉の森に行つて神様にお目にかかつて、この鳥がいろいろの不思議な役に立つ事を教えてもらつていたのだ。皆の者、よく見ておけ」

と云いながら鸚鵡に向つて――

「ウウウウ。月が出たぞ」

と云い聞かせると忽ち今までの赤い眩まぼゆい光りが消え失せて、四方が真暗になつた。その代り東の方の林の間には、黄色い大きなお月様が、まんまるくさし昇つていた。

皆の者は夢に夢見る心地がして、互にその不思議な術を驚き合いながら、この時やつと動くようになつた馬に乗つて、王の後に従うしろつて、月の光りを便りに王宮へ歸つて行つた。

## 八 象牙の机

贗にせ藍丸王は狩場から宮中へ歸つて、晩の御飯を済ますと直ぐに、家来に云い付けて、自分の室へやに新しい椅子を四ツ運ばせて、象牙の机の周囲まわりに並べさせた。それからお傍の者

を遠ざけて自分独りになると、入り口の扉を固く閉めて、門かぬぎを入れて、真暗になった中で一声高く——

「鸚鵡。鸚鵡。赤鸚鵡」

と叫んだ。

その声の終るか終らぬに、忽ち室へやの隅から真赤な光りが輝き出して、赤鸚鵡はさも嬉しそうに羽ばたきをしながら、室へやの真中の机の上に来たが、その眼の光りで室へやの中を見るとこは如何いかに……。今までこの室へやには藍丸王唯一人しか居なかつた筈なのに、今見ると最前の森の中に居た四人の化け物——爺じじと、女と、赤ん坊ぼとクリクリ坊主とが、四ツの椅子に向い合つて、ちゃんと腰を掛けていた。

その中でお爺さんが真先に皺しやが枯れ声で口を利いた——

「どうだ、赤鸚鵡、嬉しいか。嬉しいか。いよいよこの国は俺おらたち達のものになった。これから何でも見たい、聞きたい、話したい、嗅ぎたい放題だ。ところでこれからどうすれば、この国に大騒動を起させて、珍しい事や面白い事に出で会わす事が出来るか。赤鸚鵡よ、考えてくれ。お前は今の事ばかりでなく、行く末の事までも少しも間違わずに考える事が出来るのだから。先ず俺は石神の耳から現われたのだから、何でもかんでも聞くのが役目だ。

何卒<sup>どうぞ</sup>面白い話を沢山聞かせてくれい」

と云った。するとその横に座っていた青い瘠せ女は直ぐにその言葉を打ち消した——

「イヤ。妾<sup>わたし</sup>は石神の眼から生れたもので、何でもかでも見るのが役目です。何卒<sup>どうぞ</sup>早く面白いものが見たい。赤鸚鵡よ、早く面白い珍らしいものを見せておくれ」

瘠せ女がこう云い切つてしまわぬうちに、今度は向<sup>むかい</sup>側<sup>がわ</sup>に居た、赤膨れの赤ん坊<sup>ぼ</sup>が甲走つた声で——

「否<sup>いや</sup>だ。否<sup>いや</sup>だ。イケナイイケナイ。私から先だ私から先だ。私は美しい<sup>い</sup>香気<sup>におい</sup>が嗅ぎ<sup>か</sup>たい。花だの香木だのの芳香<sup>におい</sup>が嗅ぎ<sup>か</sup>たい。早く早く」

と叫んだ。すると直ぐ横に居たクリクリ坊主も負けていず、頓<sup>とんきよう</sup>狂<sup>きやう</sup>な声で——

「ドッコイ待つた。俺が先だ。石神の舌から生れた俺こそ、真<sup>ま</sup>つ先に美味<sup>うま</sup>いものを頂戴せねば相成らぬ」

と云い張つた。四人はこうして暫<sup>しばら</sup>く睨<sup>にら</sup>み合いの姿で黙つていたが、赤鸚鵡はこの様子を見て奇妙な声を出して、ケラケラと笑いながら云つた——

「耳の王。眼の王。鼻の王。舌の王。よく御聞<sup>おあし</sup>きなされよ。よく御味<sup>あじ</sup>いなされよ。どなたが先という事はない。どなたが後という事もない。



皆様一同にアツと御驚き遊ばすものを近い内に御覧に入れます。

貴方がたはこの世界の初め、石神の身体から出た三つの宝物、白銀の鏡と宝石の蛇と私の役目をお忘れになりましたか。

私は生れ付いて知っている魔法で以て、世界中の事を見たり聞いたりしまして王様方にお話し申すのが役目で御座います。又兄弟の白銀の鏡は、そんな面白い有様を王様に御目にかけるのが役目で、それから宝蛇奴は、そんな面白い出来事の初まるようにするのが役目で御座います。

今白銀の鏡と宝蛇は、南の国の多留美という湖の底に沈んでおりますが、その中で宝蛇は、貴方方四人が一人の藍丸国王となつて、初めてこの国に御出で遊ばしたその最初の御慰みに、世にも美しい伶俐な、それこそ王様が吃驚遊ばすような御妃を一人、御話し相手として差し上げたいと思ひまして、私に探してくれと頼みましたので御座います」

これを聞くと坊さんは横手を打って感心をした――

「成る程、これはよい思い付きであつた。わし等の主人の石神様が初めてこの世にお出で遊ばした時に、第一番に御困り遊ばしたのは、一人も話し相手の無い事であつた。もしも彼の時一人でも御話し相手があつたならば、あんなに淋しがりは遊ばさなかつたであろう。

してその妃は見つかったか」

「はい、三人見つかりました」

「してその名は何と云うのだえ」

「年は幾つだ」

とあとの三人が畳みかけて尋ねた。

「はい。第一番に見つけましたのは、紅木大臣の姉娘で、紅矢べにやの妹の濃紅姫こべにと申しまして、年は十六。溫柔おしなしい静かな娘で御座います。この娘はこの間真実ほんとの藍丸王様が御妃に遊ばす御約束を、兄の紅矢と遊ばしたので御座いますが、もし王様がこの娘を御妃に遊ばしたならば、この国はいつでも泰平で、王様はこの世の果までも、御位みくらひに御出で遊ばす事が出来るで御座いましょう」

「何だ、その濃紅姫を妃にすると、この国はいつも静かに治まるといふのか。イヤ、そんな静かな溫柔おしなしい娘では、話し相手にしても嘸面白くない退屈さそな事であろう。俺達はそんな女は嫌いだ。それにこの国がいつまでも静かでは詰らぬ。何でも何か大騒動おおさわぎが起つて、珍らしい事や危ない事や不思議な事が、引つ切りなしに始まらなくては駄目だ」

とお爺さんは頭からはね付けてしまった。

これを聞くと赤鸚鵡は、さも困つたらしく首を傾<sup>かし</sup>げて黙<sup>もく</sup>り込んでしまった。そうして暫<sup>しばし</sup>くの間何か考えている様子だから、四人の者は待ち遠しくなつて――

「これ赤鸚鵡。それではあとの二人の娘はどんな女だ」

「早く聞かせておくれな」

「どこに居<sup>お</sup>るの」

「何を為<sup>し</sup>ているのか」

と口を揃えて尋ねた。

赤鸚鵡はこう急<sup>せ</sup>ぎ立てられると仕方なしに答えた――

「はい。それでは申し上げますが、あとの二人は二人共、この世に又とない賢い美しい娘で、一人は紅木大臣の末娘美<sup>み</sup>紅<sup>べに</sup>と申し、今一人は南の国に在る多留美という湖<sup>かたわら</sup>の傍<sup>かたわら</sup>に住む藻<sup>も</sup>取<sup>とり</sup>という漁師の娘で、名を美留藻<sup>みるも</sup>と申します。けれどもその二人の内どちらが王様の妃になるかという事が私にわかりませぬ。それで考えているので御座います」

「何……どちらか解<sup>と</sup>からぬ」

「はい。その二人は、どちらも顔付きから智恵や学問や背<sup>せ</sup>恰<sup>か</sup>好<sup>こう</sup>、髪<sup>かみ</sup>の毛<sup>け</sup>の数<sup>かず</sup>まで、一分一厘違<sup>ちが</sup>わぬので御座います。で御座いますから、どちらが王様の御妃になる運<sup>うん</sup>を持ってお

る女なのか、今では全く区別みわけがつかないので御座います」

「フーム。ではしまいになればわかるのか」

「ハイ。けれども王様の御命の尽きる迄はわからずにおしまいになるだろうと思います。  
なによえ

何故かと申しますと、もし藍丸王様がその娘のどちらかわかりませぬが御妃にお迎え遊ばすと、どうしても王様の御命は来年中に、丁度その御妃の素性がおわかりになる少し前にお果てになりますし、私や鏡の生命いのちも、それと一所に尽きてしまうからで御座います。

その代りその間は毎日毎日不思議な話や珍しい物語の詰め切りで、濃紅姫と千年御一所に御暮し遊ばすよりもずっと面白う御座います」

「ふむ。それは成る程面白かろう。けれどもその面白い出来事の根本もとになるその妃の素性  
がはつきりわからないではつまらないではないか。折角、今この世に王となつて現われて  
面白い事を見聞きしながら、その事の起りがわからないというのは何にしても残念な事だ。  
折角の面白い事も楽しみが半分になつてしまふであろう。これ、赤鸚鵡。どうかしてその  
妃の素性だけを知る事は出来ないか。美留藻か美紅かどちらかという事がわかる工夫はな  
いか」

「はい。それは当り前から申しますれば到底出来る事では御座いませぬが、只一ツここに

私が世にも不思議な魔法を心得ております。

その魔法を使う事を御許し下されますれば、王様がこの世を御去り遊ばして後の事までもはつきりとおわかりになる事が出来るので御座います。そうすれば王様のお妃が美留藻か美紅かという事もやがておわかりになる事と思います」

「何、俺達がこの世を去つても。それは可笑しい話ではないか。俺達がこの世を去れば又旧の森に帰つてこの眼を閉じ、この耳を塞いで、この鼻から呼吸を為すにしっかりと口を閉じて、じつと焚火にあたつていなければならぬではないか。何も見る事も聞く事も出来ないではないか」

「イエイエ。それが出来るので御座います。私もまたこの世では殺されながら、この世の事を詳しく見たり聞いたりして王様に御伝え申し上げる事が出来るので御座います」

「何だ。それではお前も俺達も生きているのと同じ事ではないか」

「はい。死にながら生きていますので御座います」

「フム。それは不思議な魔法だ。してその魔法というのはどんな事を為るのだ」

「私が今から行く末の事をすっかり考えてお話し致すので御座います。皆様眼を瞑つてそのお話しを聞いておいで遊ばせば、本当に御自分がその場においてになってその事を見

たり聞いたりしておいで遊ばすのと同じ事で御座います」

これを聞くと四人は手を拍うつて感心しを為した――

「成る程、それは巧い法だ。お前がたつた今の事からずっと後あとの事まで考えて、それをすつかりここで話す。それを俺達が聞いていれば、どんな恐ろしい危い事でも安心して面白がつておられる。そんな危なつかしい妃を迎えて生命いのちを墮おとすような事があつても、根がお話しだからちつとも差し支えはない。その後のちの後のちの事までもすつかりわかる。妃の素性もわかるに違いない。成程、返す返すもよい工夫だ。では今から直ぐに話してくれ。四人一所に聞いていようから」

「一体これからどんな事が始まるのか」

「嬉しい事か。悲しい事か」

「楽しい事か。恐ろしい事か」

「早くその魔法を使つてくれ」

「待ち遠しくて堪らない」

と四人は口を揃えて頼んだ。

けれども赤鸚鵡は暫くは話しを初めなかつた。じつと耳を澄まし眼を光らし、遠くの後のち

の事を考えている様子であったが、やがて羽根づくろいをして静かに奇妙な声で話を初めた。

## 第二篇 水底の鏡

## 九 湖の秘密

この藍丸国は四つの国にわかれておりまして、東の方を日見足国ひみたるこくといい、西の国を夜見足国よみたるこくといい、北を加美足国かみたるこくといい、南の方を宇美足国うみたるこくといって、それぞれその国の名を名前にした王様が治めているので御座いますが、藍丸王はその四人の王の上の王様で、四ツの国を合わせて一つの藍丸国と称なづえているので御座いました。

又藍丸国の北と西は、涯はてしない沙原さばくで囲まれていて、南と東側はどこまでも続いた海になつていますが、中にも南の宇美足国には湖や河が沢山あつて、商売の盛んな処で御座います。その湖のうちで一番広い、多留美という湖の傍かたわらに住んでいる漁師で、名を藻取もとりという爺さんがおりました。お神さんと小供二人を早く亡くして、今では末の一人娘の美留藻みるもというのが大きくなるのを、何よりの楽しみにして仕事に精を出していましたが、美留藻



は実に美しい娘で、その上に村一番の水潜りの名人だと近郷近在の評判になっておりました。そうして誰がその婿になるだろうと、方々で種々噂をしていましたが、やがて美留藻が年頃になると、その噂は一ツになって、隣り村の宇潮という漁師の二番目の息子で、これは水潜りも上手だが、取りわけて横笛が名人で、お母さんの身体の中から鉄の横笛を握って生れて来たという評判の、香潮という若者が、一番似合った婿であろうという事に定まりました。

この噂はすぐに本当になりました。両方の間に或る世話好きの男が這入りまして、相談をしますと、両方の両親も、本人同志も喜んで、承知をして、はや今年の秋の末には、婚礼をするという事に定まりました。

両方の親達や親類や又は香潮や美留藻の喜びは申すまでもありません。村同志の人々も皆その婚礼の日が来るのを楽しみにして今か今かと待ちかねていましたが、最早その日まで三週間しかないという時になって、大変な御布告が藍丸王の御言葉だといってこの湖の岸に伝わりました。その御布告はこうでした。

「王様はこの頃世に珍らしい赤い鸚鵡という鳥をお捕えになった。その鸚鵡という鳥の話で、この多留美の湖の底に白銀で出来た大きな鏡という宝物が沈んでいるという事が解

かつた。その鏡というものは自由自在に人の姿を写し取るもので、大昔世界の初めに出来た石の神様の胸から現われ出たものだが、今度王様が是非その鏡が御入り用だと仰せ出された。だからこの湖の縁に住む者のうち誰でも、水潜りの上手な者が水底の鏡を取って差し上げねばならぬ。その鏡は湖の真中の一番深い処に沈んでいるのだから素より並大抵の者では取れぬが、併し首尾よくこの役目をつとめて水底の鏡を取って来たものには、男ならば金の舟、女ならば銀の舟を一艘御褒美に下さるとの事だ。誰でもよい、王様のためにこの鏡を取りに行く者は無いか」

この御布告を、美留藻と香潮が住んでいる村の間の、丁度中程に在る魚市場で、役人が大勢の人々を集めて申し渡した時に真先に――

「それは妾が取つて参りましょう」

と願ひ出たものは誰あろう、水潜りにかけては村一番と評判の美留藻でした。そうしてそれと一緒に、美留藻の許嫁の香潮も美留藻と共に鏡を取りに行きたいと申し出ました。

これを聞いた役人は躍り上らんばかりに喜んで、今までこの湖のふちをぐるりと布告てまわつたが、まだ二人のような勇ましい青年と少女は一人も居なかつたと賞め千切りま

したが、とにかくそれでは今から直ぐに支度をして、明日にも取りに行くようにと申し渡して、やがて都の方へ帰りました。村の者の喜びも一通りではありませぬ。何しろこの大きな湖のふちで、この二ツの村より他にこの大役を引き受ける処が無く、しかもその引き受けた者は、村第一の立派な青年と、村第一の美しい少女ですから、皆は最早自分達が取りに行くよりもずっと勢い付いて、直ぐに支度に取りかかりました。その中でも美留藻のお父さんは取りわけ大威張りで――

「どうだ。俺の娘と婿殿を見ろ。えらいもんだ。二人で行けばどんな深い海に沈んだ者でも、直ぐに見つけるに違いない。又どんな恐ろしい魚が来ても大丈夫だ。二人共魚よりよく泳ぐのだから。ああ嬉しい。俺の娘と婿を見る。豪いもんだ。豪いもんだ」

と無性に喜び狂うておりました。

村人は先ず沢山の湯を沸かして、二人の身体を净めました。それから髪を解かして、身体と一所に新らしい布で包みました。そして新しく作った喰べものを喰べさせて、新規に作った布団の中に、静かに二人を寝かしました。そうして翌る朝、まだ太陽の出ないうちに種々の準備をすっかり整えまして、一ツの船には布で巻いた二人の潜り手、それからもう一ツの船には長い綱を積み、それから村中有り限りの船を皆、沢山の赤や青の藻で

飾り立てまして、陸の方から吹く朝風に一度に颯と帆を揚げますと、湧き起る喊の声と一緒に舳を揃えて、沖の方へと乗り出しました。

折柄風は追手になり波は無し、舟は矢のように迅く湖の上を迂りましたから、間もなく陸は見えなくなつて、正午頃には最早十七八里、丁度湖の真中程まで参りました。そこで皆帆を巻き下して、船と船とをすつかり固く繋ぎ合はして、どんな暴風雨が来ても引つくり返らないようにして、二人の潜り手が乗っている船と、綱を積んでいる船とを真中に取り囲みました。この時二人は身体に巻いてあつた布を取つて、各自に綱を一本宛身体に結び付けますと、船の両側から一時に、水煙を高く揚げて、真青な波の底に沈みました。その中で美留藻は香潮よりも余程水潜りが上手だったと見えまして、香潮よりもずっと先に水を蹴つて、銀色の泡を湧かしながら、底深く沈んで行きましたが、沈むにつれて四周が次第に暗くなつて、今まで泳いでいた魚は一匹も見えず、その代り今まで見た事もない、身体中口ばかりの魚だの、眼玉に尻尾を生やしたような魚だのが泳いでいます。しまいにはとうとう真暗闇になつてしまつて、遠くから螢の火のように光る者が見えて来て、だんだんはつきりと傍へ寄るのを見ますと、人間の頭や、鳥の足や、狼の尻尾のような種々の形をした魚で、それが方々で青い提灯のように光つたり消えたりしまして、何

だか様子が物凄くなつて来ました。美留藻は恐ろしさの余り、よつぽど引き帰そうかと思いましたが、又考え直しまして――

「こんなに気が弱くては仕方がない。妾あたしはこの間の夢が本当ほんとか嘘か、たしかめに来たのではないか。わざわざお役人様に願つて、彼の石神の胸から出た鏡が、本当にあるのか無いのか、見に来たのではないか。もし鏡が本当にこの湖の底にあつて、その上に彼の石神の歌の通り、宝蛇が見付かれれば、いよいよこの間の夢は本当の夢で、妾は夢の中の美留女姫の生れ変りで、行く末は女王になれるのではないか。

そうしてあの面白い、石神の話しの続きがわかるのではないか。このまま止めて引つ返しては何にもならない。妾は矢張り旧もとの漁師の娘になつて、面白い事、楽しい事は一ツも見事もなく出来なくなるではないか。妾は死んでも引き返す事は出来ない。そしてもし妾が女王になるならば、ここで魚うおに喰われるような事はあるまい。もし女王になれるのならば、一層いっその事喰われて死んでしまった方がいい。何でも彼かでも運だめしだから、このまま行けるだけ行つて見よう」

と勇気を奮ふるい起こしてなおも底深く沈み入りました。すると又あたりの様子が變つて来て、何の影も見えなくなり、水は死んだ人の肌のように冷たく、静かに、動かなくなりま

したから、その恐ろしさ、気味の悪さ。却て最前の怖い形をした魚が居た方が、余程淋しくなくていいと思つた位でした。

けれどもその中にそこも通り越したと見えまして、はるかの底に、何か美しく光るものが見えて来ましたから、嗚呼嬉しい、あれこそ鏡の置いて在る処に違いないと、なおも水を掻き分けて潜つて行きますと、やがてそこら中が眼の醒める程美しく、明るくなって来ました。見ると湖の底の深い、透き通つた緑色の水の中に、滑らかな光沢を持つた藻が、様々の色の花を着けて茂り合つていて、その間を眩しい光りを放つ魚が、金色銀色の泡を湧かしながら、右往左往にヒラヒラと泳ぎまわり、中には不思議そうに眼玉を動かしながら、美留藻の顔を覗きに來たり、または仲よさそうに身体をすり付けて行くのもあります。その中に湖の底と見えて、沢山の宝石が一面に敷き並んで、色々の清らかな光りを放つてゐる処へ来ました。

何しろ美留藻は生れて初めて、こんな不思議な美しい処へ來たのですから、感心のあまり暫くは夢のように、恍惚と見とれていましたが、又鏡の事を思い出しまして、斯様な美しい処に隠して在る鏡というものは、どんな美しい不思議な宝物であろう。早く見付けたいものだ、と思ひながら、又もや長い深い藻を掻き分け、魚を追い散らして、宝石の上

を進んで行きますと、間もなく向うの一際美しい藻の林の間に、チラリと人間の影が見えました。扱さては香潮さんが最早来ているのかと思ひまして、急いでその方へ足を向けますと、向うでも気が付いたと見えて、この方ほうへ急いで来る様子です。その中うちにだんだん近寄って参りますと、香潮と思つたのは間違いで、彼の夢の中で見た美留女姫に寸分違わぬ、凄いらしいお姫ひいさま様がたつた一人、静かに歩いて来るのでした。美留藻は今更にその美しさに驚いて思わず立ち止まりますと、向うも美留藻の姿を見付けて、驚いたような顔をして歩みを止めました。美留藻はこれは屹きつと度夢の中の美留女姫が現われて、妾に鏡の在あり所かを教えにお出でになつたに違ひない。そうして妾は矢つ張り旧来もとの通りの美留藻で、お姫様でも何でもなかつたのだと思ひまして、あまりの恥かしさに顔を手で隠しますと、先方むこうでも顔に手を当てました。自分の真似をされて、美留藻はいよいよ恥かしくなつて、宝石の上にはペタリと座りますと、先方も亦ペタリと座ります。オヤと思ひながら立ち上つて向うを見ますと、向うも矢張り立ち上つてこの方ほうを見ていました。試しに両手を動かして見ますと、向うでも動かしません。足を踏みますと先方むこうも踏みます。

扱さてはと思つて近寄つて見ますと、これが紛まぎれもない白銀の鏡で、今まで美留女姫と思つたのは自分の姿が向うに映つていたのでした。

美留藻は驚いた余りに、我れを忘れて、あつと叫ぼうとしましたが、その拍子ひょうしに冷たい水が口の中に這入りましたので、又やつと自分が湖の底に居るのに気が付きました。そうして手足をぶるぶると震わせながら、眼の前の不思議に見惚みとれて、恍惚うっとりとしてしまいました。美留藻は今まで賤いやしい漁師の娘で、自分の姿なぞを構いった事は一度も無く、殊にこの国では昔から、鏡というものを見た者も聞いた者も無く、つまり自分の姿を見たのはこれが初めてでしたから、驚いたのも無理はありません。

扱あはこれが妾の姿か。妾は矢張り美留女姫であつたのか。妾はこんなに美しかったのか。こんなに気高い女であつたのか。漁師の娘なぞというさえ勿もつた体たいない。女王と云つた方がずっとよく似合あっているこの美しさ、気高さ、優しさ。まあ、何という艶あでやかさであろう。そうして妾は矢張り彼の夢の中の書物で見た通りに、女王になるのであつたかと思うと、最早嬉うれしいのか恐ろしいのか解かからずに、そのまま気が遠くなりまして、宝石の上に座り込んで、一生懸命しんけんを押おし鎮しずめました。

扱あやつと気が落ち付いてから、又もや鏡の傍へ差し寄つて、つくづくと自分の姿に見とれましたが、見れば見る程美しく、とてもこの世の人間とは思われませぬ。こんな綺麗な容きり色ようを持ちながら、こんな気高い姿でありながら、もし彼の夢かを見なければ、彼の低



い暗い家の中に住んで、あの泥土を素足で踏んで、彼の腥い魚を掴むのを、自分の一生の  
 仕事に為るところであつたのか。姿は美しいとはいえ、又笛は名人とはいえ、どうせ只の  
 漁師の俵の、彼の汚い着物を着た香潮の妻になつて、つまらなく暮すのが自分の身の上だ  
 ったのか。嗚呼、勿体ない。勿体ない。この鏡や宝石を海の底に沈めておくよりも、まだ  
 ずっと勿体ない事だ。どうかして妾は妾に似合つたずっと気高いお方の処へお嫁に行つて、  
 彼の絵の通りに女王になつて見たいものだ。藍丸国の天子様の御妃になつて、この姿をも  
 つと美しく気高くして、国中の人達に見せびらかしたいものだ。思えばこの鏡は世界中の  
 女の中で、妾が一番最初に自分の姿をうつしたのだから、もしかしたら妾をそういう身分  
 にするためにここに沈んで、妾を待つていたのかもしれぬ。いや、屹度そうなのだ。それ  
 に違いない。そうだそうだと、忽ちの内に気が変りました美留藻は、最早女王になつた気  
 で腰に結んだ縄も何も解き放して、又もや鏡を覗きながら莞爾と笑つたその美しさ、物凄  
 さ。あたりに輝いていた宝石の光りも、一時に暗くなる程で御座いました。その時に鏡の  
 上からぬらぬらと這い降りて来て、美留藻の髪毛の中に潜り込んだ一匹の小さい蛇があ  
 りました。その蛇は身体中宝石で出来ていて、その眼は黄玉の光明を放ち、紅玉の舌をペ  
 ロペロと出していました、この蛇が美留藻の紫色の髪毛の上に、王冠のようにとぐろ

を巻いて、屹と頭を擡げますと、美留藻は扱こそと胸を躍らせまして、今は彼の石神の物語の赤い鸚鵡と、鏡と、蛇の話はいよいよ夢でなく本當に在る事で、しかも三ツ共妾が誰よりも先に見付けたのだ。つまりは妾が女王になるその前兆に違いないと思ひ込んで、嬉しさの余りに立ち上つて鏡のまわりを夢中になつて躍りまわつていました。

## 十 生きた骸骨

ところが一方は香潮です。

香潮は美留藻よりも潜るのが下手だったと見えまして、余程美留藻より後れて沈んで行きました。その中に香潮も亦、最前美留藻が通つたような恐ろしい処にさしかかりました。すると今度は形の恐ろしいものばかりではありませぬ。鱧だの鮫だのは素より、身体中に刃物を並べた鱖だの、棘の鱗を持った海蛇だのが集つて来て、烈しい渦を巻き立てて飛びかかりましたから、香潮は一生懸命になつて、拳固で擲り飛ばし、足で蹴散らして、追いつ追われつ底の方へわけ入りましたが、その中にやっところんな魚の居る処から逃げ出した時には、もう身体がグタグタになつて、胸が苦しくて眼が眩んで、死にそうになつて

いました。けれどもここで引き返しては、村の人々や、両親や、兄弟や、美留藻に対しても極まりが悪いし、第一王様の御命令に背く事になりますから、ここは一番死んでも行かねばならぬと、固く思い詰めまして、夢中で手足を動かして行きました。その苦しさ、切なさ。その苦しみのために香潮の身体は見る見る肉が落ちて、顔は年寄りのように痩せかけてしまいました。そうしてとうとう底まで行きつかぬうちに気が遠くなって、手も足も動かなくなつたまま、ずんずん沈んで行きました、やがて鏡の傍の宝石の上に落ち付きました。

これを見付けた美留藻は、最前ならば驚いて直ぐにも駆け寄って助け上げるところですが、今ははやすつかり気が變つていましたから、そんな事はしませぬ。香潮の顔を一目見ると、あまりの變りように愛想をつかしまして、いよいよこんな鬼のような顔をした者の妻となる事は出来ないと思ひました。

そうしてここで香潮に捕まつては、逃げて行く事も出来ぬし、女王になる事も出来ぬ。どうしたらよかろうと鳥渡困りましたが、又氣を落ち付けて傍へ寄つて見ますと、全く死んだように見えましたから、ほつと一息安心をしまして、何かうなずきながらそつと香潮を抱き上げて、鏡の前に寄せかけました。

それから最前さつぎ自分が解き棄てた綱の端を見付けて、香潮の身体からだを鏡にグルグル巻きに縛ってしまいますと、その綱を三度強く引いて、上で待つている人々に引き上げてくれと相図をしましたが、自分はそのまま藻を押し分けて、水底みずそこを伝って、どこかへ逃げて行つてしまいました。

美留藻が引いた三度の相図は、舟の上に両方の綱を持って待つていた、藻取の手にはつきりと伝わりました。それつとというので選りよ抜き力の強い若者が四五人、バラバラと駆け寄つて綱に取り付いて、一生懸命引き初めましたが、こは如何いかに。綱はピンと張り切つたまま、一寸ちよつとも上へ上がつて来ませぬ。これではいかぬと又四五人綱に取り付きました。が、それでも綱は動きませぬ。それではというので今度は船の上に、かねて用意の車を仕掛けて、それに綱を引つかけて二三十人の者が力を揃えて巻き上げにかかりましたら、やつと二三寸宛ずつ綱が上がり初めました。占めたというので気狂きちがいのように勇み立った藻取と宇潮の音頭取りで、皆の者は拍子を揃えて曳えいや曳やと引きましたが、綱は矢張り二三寸宛しか上りませぬ。そうして不思議な事には、最早鏡もとうを見付けて、綱を結び付けたら用事は済んでいる筈の香潮も、美留藻も、波の上に影さえ見せませぬ。その中うちに短い秋の日は、とつぷりと暮れてしまいました。

今まで最早香潮が上がって来るか、最早美留藻が浮き出すかと、一心に海の面を見つめていた親や身内の者共は、最早いよいよ二人共に、死んだものと諦めるより他に、仕方がなくなりました。

二人の両親の歎きは素より、村の者共の悲しみと驚ろきは一通りではありませんでした。いくら水潜りが上手でも、こんな長い事水の底に居て生きておられる道理はありません。けれどももしや船と船との間に、浮かみ上っているのではあるまいか。又はもしや悪い魚に喰われたとしても、せめて髪毛位浮き上がりそうなものだ。いや、死んでいないから浮き上らないのだ。いや、死んでいても浮き上らないのだろう。

ああかも知れぬ、こうかも知れぬと、吾が事のように皆の者は八釜しく評議を初めました、この時宇潮と藻取とはやつと気を取り直して、皆の者に向って異口同音に叫びました——

「皆の衆、聞いて下さい。私達はもう立派に諦めを付けました。二人の者は水の底で、鏡を見付けて、綱を結び付けて帰って来る途中で、何か悪い魚の餌食になったに違いない。そうでなければ最早疾くに浮き上って来る筈だ。こうと知ったらば、前から刃物の一ツも持たせてやるところだったものを。けれども今は歎いても仕方がない。それよりもつと

大切な鏡を引き上げるのが、何より肝要だ。

この鏡は二人の身代りだ。この上もない大切な形見だ。王様のお望みの品だ。さあ御苦労だが皆の衆、元氣を出して引いた引いた」

と涙を払つて頼みましたから、皆の者も励まされて、疲れた身体からだを起こして、一所に涙を拭き拭き、又もや綱に取り付きました。

それからその夜は夜通し引きましたが、綱は相変わらず二三寸宛ずつしか上つて来ませぬ。とうとうその翌あくるひ日終いちにち日、その翌る晩も夜通し、その又翌る日も終いちにち日、入れ代り立ち代り大勢の人々が、オイオイ泣きながらこの綱を引きましたが、やつと三日目の晩方、いよいよ綱が残り少なくなりますと、不思議や今まで雲一ツ見えなかつた空が、俄にわかに墨を流したように掻き曇くもつて来まして、忽たちまち轟ごうごう々と雷かみなり鳴りが鳴り初め、風が吹き、雨が降りしきりまして、海の上は何千何万の白馬黒馬が駈けまわるように波が立って、沢山つみなに繋ぎ合わせた船を一時いちじに揉み潰つぶそうとしました。けれども皆の者は、今度はちつとも氣を落しませんでした。最早もはやこの鏡を取らなければ、香潮と美留藻が死んだ甲斐もなく、王様のお望みも絶えてしまうのだ。死んでもこの鏡を引き上げなければ、第一亡くなった二人に対して済まない、死に物狂いになつて夜半過ぎまで引いていますと、その中うちに雨も止み風も絶

えて、湧き返る波の上の遠くに、電光がするばかりとなりました。

すると間もなく海の上に何か真黒な大きなのが出て来て、舷にドシンと打つつかつた様子ですから、ソレッとばかり皆が手を添えて、船の上に引き上げました折柄、又一しきり吹き出した風に忽ち空の黒雲が裂けて、磨ぎ澄ましたような白い月の光りが、颯と輝き落ちて来ましたから、その光りで初めて浮き上ったものの正体を見ますと、皆の者は一度にワツと叫んで飛び退きました。

真黒く、又真白く湧き返る波の飛沫を浴みて、船の上に倒れているものは、見るからに凄い程光る白銀の鏡で、ギラギラ月の光りを照り返しています。そうしてその真中には顔や手足の肉が落ちて、濡れた髪毛をふり乱して、眼を剥き歯を噛み出した生きた骸骨のようなものが、呼吸をぜいぜい切らして、あおむけに寝ているではありませんか。皆の者はその恐ろしさ物凄さに、皆ペタペタと座ったまま、暫くは口も利けず、身体も固くなっていますと、今の怪物はなおも烈しい呼吸を続けて、唇を笛のようにヒューヒューと鳴らしていましたが、やがて片手で身体の綱を解いて、立ち上ってあたりを見まわしながら、皺枯れた声で――

「美留藻は帰ったか」

と尋ねました。その時その白い齒は、月の光りに輝いて、皆を嘲り笑っているように見えしました。

この声を聞くと、今まで腰を抜かしていた藻取翁と宇潮は、こいつが何でも香潮と美留藻を殺した化物に違いないと思ひ詰めましたから、急に元氣が出て立ち上りまして――

「これ化物、美留藻も香潮も帰つて来ぬぞ」

「大方貴様が喰つたのだらう」

と掴みかからんばかりに睨め付けました。

その声を聞くと又怪物は急に嬉しそうに――

「才。そう云う貴方はお父さん、私はその香潮です。そして美留藻はまだ帰らぬと仰しやるのですか」

と早や声を震わしています。二人は香潮と聞いてハツと驚きましたが、併しこんな化物が香潮などとは思ひも寄りませぬから、異口同音に怒鳴り付けました――

「馬鹿な事を云うな。香潮は貴様のような化け物ではない」

「そんな事はありません。私は香潮です。私が香潮です」

と云いながら狼狽て宇潮の傍へ走り寄ろうとしましたが、折から又もや雲の間を洩る月



の光りに自分の姿がありありと鏡の中へ映りました。その姿をチラリと見ますと、化物は今度は自分の姿に驚いて、キャツと云うとそのまま眼をまわして、又もや湧き立つ大浪小浪の間に真逆様に落ち込んでしまいました。そうしてあとには只白銀の鏡だけが、ありありと月の光りに輝いて残っておりました。

## 十一 金銀の舟

香潮は浅ましい姿になって、不思議に生命を長らえまして、一度は人々の前に姿を見せましたが、憐れや化物と間違えられて、そのまま又、湖の波の間に沈んでしまいました。美留藻も最初から湖に沈んだまま姿を見せませぬ。とうとう二人共死んだ事に定まりましたから、人々は泣く泣く船を陸の方へ漕ぎ返しました。二人の形見の鏡を載せて、漕いで行く二人の両親の心地はどんなでしたらう。又彼の鏡を車に載せて、都へ送る両方の村人の思いはどんなでしたらう。やがて藍丸の都の王様の御殿へ着いて、御殿の大広間で皆が王様にお目通りを許されて、この鏡を取った前後のお話しを申し上げた時、この珍しい鏡というものを拝見に来ていた、沢山の貴い人々の内で、泣かぬ者は一人もありま

せんでした。そうして両方の村の人達には、王様から沢山の御褒美を下さるし、又香潮と美留藻の両親ふたおやには、約束通り金の船と銀の舟を一艘宛賜ずつわってお帰しになりましたが、二人の親達はもしも今二人が無事に生きていて、この金銀の船を見たならば、どんなにか嬉しかろうと云つて歎きました。

藍丸王はこのお目見得が済むと、直ぐに紅木大臣を呼んで二つの事を申し付けました。一ツはこの鏡を自分の居間の壁に掛けて、まわりに美事な飾りを付ける事。それからも一ツは国中に布告ふれを出して、「今度藍丸王様がお妃を御迎え遊ばすに就つては、国中で一番の美しい利口な女を御撰みになる事になった。だから今から一週間の内に、東西南北の四ツの国の中で一番の美しい賢い娘を一人宛撰ずつり抜いて御殿まで差し出せ。一週間目の朝、藍丸王様が御自身で御撰みになるから」という事を知らせるとの事でした。

第一の命令は、この都で第一の名高い飾職かざりやと宝石商人あきんどとが、大勢の弟子を連れて御殿へ参りまして、その日の内に仕上げてしまいました。それから第二の御布告おふれは銅の板あかがねに書きまして、馬乗うまのりの上手な四人の兵士に渡して、四方の国々の王宮へ即座に出発させました。

藍丸王は鏡の取り付けが出来上るのを待ちかねて、直ぐに只一人、自分の室へやに這入つて、

入り口の扉の内側からピタリと掛け金をかけました。それから四方の窓をすっかりと締め切つて真暗にしてみました。今まで室の隅の隅の留り木に凝然として留つていた赤鸚鵡は、忽ち真赤な光りを放つて飛んで来て、王の頭の上に停まりました。そうしてその眼の光りで水底の鏡の表面を照しますと、鏡の表面は見る見る緑色に曇つて来まして、間もなくその中から美紅姫の姿が朦朧と現われましたが、見ると今美紅姫は自分の室に閉じ籠もつて、机の上に頬杖を突いて窓の外を見ながら何か恍惚と考へているところでした。この時赤鸚鵡は一声高く叫びました――

「王様。王様。御覧遊ばせ。」

美紅の姿。美紅の姿。

紅木の娘。美紅の姿」

王はこれを聞くと莞爾と笑ひまして――

「ハハア。これが美紅姫か。成る程、これは美しい利口そうな娘だ」

と申しましたが、その中に鏡の中の美紅姫がこの方を向いて、王の顔をじつと見たと思ふと、美紅の室も机も着ている着物も消え失せてしまつて、あとに残つた美紅の姿はそつくりそのまま、海の中の藻の林で、美留藻が鏡を覗いているところになりました。この時

赤鸚鵡は又も一声高く叫びました――

「王様。王様。御覧遊ばせ。」

美留藻の姿。美留藻の姿。

藻取の娘。美留藻の姿――

美留藻は鏡の中から王の姿を見て莞爾にっこりと笑いましたが、王もこれを見て莞爾にっこりと笑いました――

「才才。これが美留藻の姿か。成る程。美紅姫と少しも違わぬわ。してこの美留藻の許嫁となっていた、香潮というのはどんな男であろう――」

と身を乗り出しました。すると間もなく美留藻の姿は鏡の表から消え失せまして、今度は醜い、怖ろしい、骸骨のような化物の姿が現われました。そこは丁度鏡を取り上げた船の上の景色で、荒れ狂う波の上には、月の光りが物凄く輝いて、化物の姿を照しておりました。

「何だ。これが美留藻の許嫁の香潮という奴か。何という恐ろしい姿であろう。此奴こいつが今に美留藻が俺の后きさきになった事を知ったならば、嗚俺さぞを怨む事であろう。成程、これは面白い。赤鸚鵡赤鸚鵡、何卒どうぞして此奴こいつが死なないように考えて話してくれ。そうして俺に刃向

つて、大騒動を起すようにしてくれ。こんな珍らしい化物を無残無残と殺しては、面白い話しの種が無くなる。相手に取つて不足のない化物だ」

と叫びました。すると赤鸚鵡は静かに答えました――

「はい、畏まりました。もとより御言葉が無くとも香潮の身の上は今に屹度そうなつて参ります」

この言葉の終るか終らぬに又鏡の中の様子が変わつて、今度は広い往来が見え初めました。その往来の左右はどこかの青物市場と見えまして、大勢の人々が、新らしい野菜や果物を、忙しそうに売つたり、買つたり、運んだりしています。そこへどう迷つたものか、白髪小僧が遣つて来ましたが、見るとこの間の通り顔は焼け爛れて、眼も鼻もわからず、身には汚い衣服を着て、鈴や月琴を一纏めにして首にかけ、左手には孔の無い笛を持ち、右手には字の書いてない書物を持つておりました。その姿が珍らしいので、あとから大勢の小供が従いて来て、石や泥を雨のように投げ付けていますが、白髪小僧は痛くも何ともない様子で、平生のようにニコニコ笑いながら、ぼんやり突立つて逃げようともせぬ様子です。するとそこへ又一人、手足から顔まで襤褸で包んだ男が出て来まして、白髪小僧の様子を見て気の毒に思いましたものか、小供を四方に追い散らして白髪小僧の傍へ寄つて、手を

引いてどこかへ連れて行こうとする様子でしたが、その時どうした途端か顔を包んでいた布きれが取れると、これが彼の半腐れの香潮で、集まっている者は皆その顔付の恐ろしさに、大人も小供も肝を潰して、散り散りに逃げ失せてしまいました。

その間に香潮と白髮小僧が急いでここを立ち去りますと、その後暫くの間は誰一人ここへ出て来るものはありませんでした。

すると不思議にも直ぐに眼の前に並べてある昆布こんぶの籠かごの内の一ツが、独り手ひとでむくむくと動き出して、やがて横に引っくり返りますと、その中から海に飛び込んで行衛ゆくえ知れずになつていた美留藻が、首だけ出しましてじつと周囲まわりの様子を見まわしました。見るとそこ等には誰も居いませんで、直ぐ前の横路地に、香潮の姿を見て逃げ出して行った果物屋の婆さんが、逃げかけに打つ棄ちやつて行った灰色の大きなマントと、黒い覆面の付いた茶色の頭巾と、毛皮の手袋と木靴とがありましたから、それを盗んで手早く身に着けて、すっかりお婆さんに化けてしまいました。それから又あたりを見まわして、まだ誰も来ない事がわかりますと、今度は傍にあつた果物の籠を抱えて、その中にいろいろの果物を拾い込んで外套の下に隠して、傍に在る金箱かねばこに手をかけようと思いました。その時にどうしたものか鏡の表が急に暗くなつて、何も見えなくなつたと思うと、今まで身動きもせず王の頭の

上に留つていた赤鸚鵡が、何に驚いたか急にバタバタと飛び降り、机の下に隠れてしまいました。

## 十二 三ツの掟

藍丸王はこれを見ると、急に不機嫌な顔になつて、椅子から立ち上りました――

「何だ。何だ。誰かお前の嫌いなものが、扉の外に近づいて来るのか。よしよし。お前はそこに隠れておれ。俺が追い払つてやる」

と云いながら急いで四方の窓を明け放して扉の傍へ来て――

「誰だ。そこに来ているのは」

と云いながら扉を開きました。

外には黄色い着物を着た青眼が、謹しんで敬礼をして立っていました。

「何だ。お前か。そして何の用事があつてここへ来たのか。又この間の鸚鵡の時のように、鏡を乃公おれから奪いに来たのか。鏡は最早もはや疾くとつの昔に受け取りの儀式を済まして、居間の壁に取り付けてあるぞ。それとも他に用事でもあるのか。早く云え」

と畳みかけて尋ねました。

青眼は静しずかに顔を挙げて王の顔を見ましたが、忽ちハラハラと涙を流して申しました——  
「嗚呼あゝ。王様。御察しの通り、私が参りましたのはその鏡の事に就てで御座います。承うけたまわれ  
ば王様は、私がお止め申し上げるのも御聴みき入れ遊ばさず、あの水底みずそこの白銀しろがねの鏡を御  
取り寄せ遊ばして、御居間に御据え遊ばしたとの事。まあ、何という恐ろしい事を遊ばす  
ので御座いましょう。

この間申し上げた、この国の古い掟もとを最早お忘れ遊ばしましたか。

『人の声を盗む者。人の姿を盗む者。人の生き血を盗む者。この三ツは悪魔である。見当  
り次第に打ち壊せ。打ち殺せ』

只今までこの国に、人の声を盗む鸚鵡かぶつという鳥が一匹も居ず、人の姿を盗む鏡というも  
のが一ツも無く、人の生血を盗む蛇へびというものが一ツも無いのはこの掟があるために人々  
が……」

「八釜やかましい。黙れ」

と王は烈しく叱り付けました。

「そのような事は貴様から聞かずとも、疾とつくに俺は知っている。俺は今までのように、貴



様に欺されてばかりはおらぬぞ。貴様は悪魔でもないものを悪魔と云って、俺を馬鹿にしようとしたのだ。この鸚鵡の御蔭で、俺は居ながらに世界中の声を聞き取る事が出来、又この鏡の御蔭で、俺は世界中の出来事をいつでも見る事が出来るのだぞ。この二ツのものがある御蔭で、俺は世界一の賢い者になったのだぞ。それに貴様はこの重宝な宝物を無理に俺から取り上げて、俺を王宮の中に睡むらせて、世界一の馬鹿者にしようとする。貴様はこの国第一の不忠者だぞ。貴様、よく考えて見る。何にも知らぬ世界一の馬鹿が王様になつてゐるがいいか。それとも何でも知らぬという事は一つも無い、世界一の賢い者が王様になつてゐるがいいか。どっちがいいか」

「はい。それは賢いお方が王様になつておいでになる方が、この国の仕合わせで御座います」

「それ見ろ。それに貴様は何のためにこの俺を、何にも知らぬ馬鹿者にしようとしたのか。何のために鸚鵡や鏡を王宮に入れまいとするのか」

「あゝ噫、王様。それは御無理と申すもので御座います。王様はそんな鏡や鸚鵡をお使い遊ばさずとも、もと旧来から御賢い有り難い王様でいらせられるので御座います。それにその鏡や鸚鵡が参りましたからは、王様の御眼を眩まし御耳をし聾いさせて……」

「黙れ。黙れ。この二ツのものは、今まで一度も俺を欺いた事はないのだぞ。それにこの二ツの物を悪魔だなどと、無礼者奴が。何を証拠にこの二ツが悪魔だと云うのだ。その証拠を見せろ」

「その証拠は昔から申し伝えて御座りまする、この三ツの掟が何よりの証拠……」  
「アハハハハ」

と王は不意に高らかに笑い出しました。そうして意地の悪い眼付で青眼の顔を見つめながら尋ねました――

「その掟は誰が作ったのだ」

「ハイ。それは私の先祖の矢張り青眼と申す者が、申し残しておるので御座います」

「ウム、そうか。してその先祖はなぜこの三ツのものを悪魔だと定めたのか。この三ツのものを悪魔と定めるには何か深い仔細があるのか。仔細が無くて、只無暗にこのような重宝なものを悪魔だと定めるわけはあるまい。その仔細を云え」

この藍丸王の言葉を聞くと青眼はどうした訳か急に真青になって、唇までも見る見るうちに血の色が失せてしまいました。そうしてそれと一緒に手足をぶるぶると震わせながら、返事も何も出来なくなつて、只その青い眼を一層まん丸く見張つて、王の顔を見つめてお

りました。この様子を見ると王は益々勢込んで青眼の前に一歩進み寄りながら、一層厳格な顔をして睨み付けて申しました——

「これ、青眼。貴様はなぜ返事を仕ないのだ。なぜその証拠が云われぬのだ。さ、その証拠を云え。その仔細を云え。なぜその三ツの者が悪魔なのだ。なぜこの鏡と鸚鵡が悪魔の片われなのだ。貴様は今まで何一ツとして俺に隠した事はないではないか。云え。云え。その三ツの掟の出来た訳を云え」

と王は如何にも言葉鋭く詰め寄りました。けれども青眼先生は王の勢が烈しくなればなる程縮み上って、ふるえ方が烈しくなつて、今は立っている事が出来ず、床の上にペタリと座り込んでしまいました。王はじつとその有様を見ておりましたが、なおも厳そかな口調で責めました——

「青眼。これ、青眼。貴様はなぜそのように恐れるのだ。なぜそのように顫えるのだ。なぜその仔細を俺に隠すのだ。一体貴様の為る事は俺にはちつとも訳が解からぬぞ。この間のように見もせぬ夢を見たらう等と尋ねたり、又はこのような重宝なものを俺から奪い取つて、罪も無い鸚鵡を殺そうとしたり、又は大勢の者が生命を棄てて拾い上げてくれたこの貴い鏡を打ち壊そうとする。俺にとってはこれ位有り難い貴い重宝な宝物は無いのだ

ぞ。それをなぜ貴様はそのように悪むのだ。そうしてその仔細を云えと云えばそのように青くなつて顫え上つてしまう。一体どういう訳でそのような妙な事を云つたり為したりするのだ。少しも訳がわからぬではないか。なぜそのように隠すのだ。なぜそのように恐れるのだ。さあ、云え。さあ、返事をしろ。すっかり白状してしまえ」

王はこう云いながら一層鋭く青眼を見つめました。けれども青眼は矢張りその眼を睜つたまま返事をしませぬ。じつとその顔を見ていた王は、やがて莞爾と笑つて申しました――

「ハハア、解かった。貴様が隠す訳がわかった。恐れる訳がわかった。隠す筈だ。云えない筈だ。その掟は矢張り嘘の掟だからだ。貴様の先祖から代々貴様までも、根も葉もない作り事をして、俺にこのような貴い有り難い宝物を近づけぬようにして、自分だけ世界一の利口者になろうとしているのだ」

「いえ、決してそんな事は御座いませぬ。悪魔はどうしても悪魔で御座います。何卒何卒王様、私の申す事を……」

と青眼は慌てて口を利きました。

「黙れ。青眼。貴様はどうしても俺を欺そうとする。貴様こそ悪魔だぞ。イヤ悪魔だ。悪

魔に違いない。貴様の家は先祖代々云い伝えて、俺のお守役になって、嘘の掟を作つて、こんな重宝なものを遠ざけて終しまいに俺を何にも知らぬ馬鹿者にしようとしたのだ。最早俺もはやは貴様の云う事を聞かぬ。俺はこの鸚鵡から、世界中の事を聞かせてもらった。又この鏡から、世界中の事を見せてもらった。御蔭で大層利口になった。こんな嬉しい事はない。こんな有り難い事はない。今まで俺に何事も知らせまい知らせまいとしていた貴様は、大不忠者だぞ。これ兵隊共、此奴こいつを王宮の外に抓つかみ出せ。以後俺が許す迄は王宮に来る事は相成らぬぞ」

と云いながら扉をドシンと閉めました。

青眼は忽ちむつくと起き上つて、今閉まつたばかりの扉に取り付いて男泣きに泣き出しました。

青眼は藍丸王のこのように荒々しい、狂きちがい氣がいじみた姿を見たのはこれが初めてでした。又このように無慈悲な言葉で、嘲のけられ罵のられた事も初めてでした。あまりの事に扉に取り付いて、流るる涙を拭ぬぐいもあえず――

「王様。王様。王様は気でもお狂い遊ばしましたか。この間まであのようによくに優しく、あのようによくに気高くておいで遊ばした王様が、どうしてそのようなお情ない浅ましい御心にお変

り遊ばしたので御座いましょう。これと申すもあの鏡と鸚鵡、二ツの魔物が、王様の御心を眩くらましたからで御座いましょう。何卒どうぞ、王様。御心を御静め遊ばして私の申す事を御用い遊ばして……」

と喘あえぎ喘あえぎ口説き立てましたが何にもなりませんでした。扉の中からは何の返事も聞かえず、却かえつ却かえつ廊下番の兵隊共に引き立てられて、王宮の御門から逐おい出されてしまいました。ところが青眼先生が引つ立てられて行くと間もなく、又もや赤鸚鵡が叫び立てました――

「あれあれ、王様、今度は紅矢が御目にかかりに来る様子で御座います。今家うちから馬に乗りまして、この御殿の方へ出かけるところで御座います。」

只今紅矢が参りますのは他の事でも御座いませぬ。紅矢はずっと以前まえに旧もとの藍丸王から、自分の第一番目の妹濃紅姫こべにをお后に差し上げるよう、固い御言葉を受けておりまして、まだ家の者には話しませぬが、兄きょうだい妹い共はそれを楽しみに致しておったので御座います。ところが紅矢はこの間から父の用事で、北の加美足国へ参っておりましたが、今日帰つて参りますと、今朝けさ王様があのような御布告おふれをお出し遊ばして、他の国々からお后をお選みになるといふ事を聞いて、妹思いの事で御座いますから、夢かとはばかり驚きまして、直

ぐに王様の御布告おふれが本当かどうか伺いに参るので御座います。今紅矢は廊下の番兵にお取次を頼みました。御聞き遊ばせ」

と云いも了おわらぬうちに兵士の声が扉の外から――

「紅矢様の御出おいでで御座います」

と高らかに聞こえました。

王は直ぐに返事をしました――

「まだ誰もこの室へやに這入る事は相成らぬ。用事があるなら後のちに来い」

この言葉を扉の外で聞いていた紅矢は、全く夢に夢見る心地がしました。紅矢も青眼先生と同じように、王様からこのような荒々しい、菅すげな無い言葉を受けたのは、これが初めてでした。それだけでなく濃紅姫の事を思うて、胸が一パイになっていた紅矢は思わず扉に取り付いて叫びました――

「王様。王様。王様は如何遊いばしたので御座いますか。どうしてそのようなお情ない事を仰せられますか。紅矢で御座います。紅矢で御座います。何卒なにとぞ一度だけ御眼にかからせて下さいまし。私の妹の濃紅の事で、是非申し上げなければならぬ事が御座いますから」

「濃紅がどうしたというのだ」

「エエツ。最早もはや王様は御忘れ遊ばしましたか。彼の御約束を御忘れ遊ばしましたか」

「忘れはせぬ。けれども約束を守るなぞという事は大嫌いになった。昨日きのうの王と今日の王は別人だ。そんな約束を守らなくともよい。もしその濃紅姫とやらを后にし為たいと思うならば、最前さつき国中に布告ふれされた通りに、今日から一週間の後のちに、国々の女と一所に宮中へ差し出せ。もし氣に入ったら后にしてやる。帰ってその事を妹に知らして、支度をさせておけ。間違うと許さぬぞ。その他に用事は無い。帰れ」

と世にも無法な言葉です。紅矢は今日まで、両親ふたおやよりも、妹共よりも、誰よりも慕わしく懐かしく、天にも地にも二人と無い、慈悲深い氣高い王様と思ひ込んでいたのに、今は鬼よりも無慈悲な、獣けだものよりも賤いやしい御心になられて、その声までも虎のように荒々しくなられた事が解かりました。その上に今まで、何よりも楽しみにしていた濃紅姫の事を、王は自分で約束しながら、自分で破って、あられもない国々の賤いやしい女共と一所に、一週間の後に御目見得に出せとは、まあ何という浅ましい仰せであろうと、余りの悲しさ情なさに紅矢は前後を忘れてしまつて、泣くにも泣かれず、只狂氣のように頭の毛を搔かきむしりながら、驀まっしぐら然に王宮を駈け出しました。



## 十三 名馬の蹄音

紅矢が王宮を駈け出ますと、直ぐに王は又鏡に向つて、最前の美留藻みるもがお婆さんに化けた後の有様を見せると命じました。けれどもまだ鏡に何も映らぬ前に、王は不意に恐ろしい物音を聞きつけて叫びました――

「あれ。あの音は何だ。雷の響か。霰あられの音か。否いやいや々々。馬の蹄ひづめの音だ。何という高い蹄の音であろう。何という疾はやい馬であろう。あれ、王宮の周囲まわりを街伝いに、もう一度廻つてしまった。あの馬の騎のり手はこの夜更けに何のためにこの王宮のまわりを駈けめぐるのであろう。あんな疾い馬がこの世に在るか知らん。騎のり人は俺の知らぬ魔者ではないか知らん。あれ、最早も二度まわつてしまった。今度は三度目だ。これ、白銀しろがねの鏡。赤鸚鵡。美留藻の行衛ゆくえは最早も見なくともよい。それよりも早くあの馬と、その騎のり人を見せてくれ。あれ、もう三度まわつた。疾い疾い。何者だ。何者だ」

と呼吸いきはずは機はずませて尋ねました。この言葉の終らぬうちに、早くも赤鸚鵡の眼から電光のように光りがさして、鏡の表面おもてが颯さつと緑色に曇つて来ました。そうして又ギラリと晴れ渡つたと思うと、一人の騎馬の少年の姿が現われました。それは最前王宮を出て行つた紅矢

でした。

紅矢は今まで親よりも敬つて、兄弟よりも親しく思つていた藍丸王が、まるで鬼よりも無慈悲な心になり、虎よりも荒々しい声に變つて、その上に今は又、自分の妹の事を露程も思つて下さらない事がわかりますと、あまりの事に驚き悲しんで狂きちがい氣がのようになつて王宮を駈け出ると直ぐ、そこに繋いでおいたこの国第一の名馬「瞬またたき」というのに飛び乗つて、手綱たづなを執とるが早いか馬の横腹を拍車で千切れる程蹴り付けました。すると今まで只の一度も鞭の影さえ見せられた事のない「瞬」は、思いがけない主人の乱暴な乗り方に驚いて、これも夢中になつてしまひまして、ヒーンと一声棹さおだ立ちになつたと思うと、そのまま一足飛びに駈け出しました。

けれども紅矢は「瞬」がどんなに驚いて、どんなに疾く駈けているのか気が付きませんでした。只最後の王の荒々しい言葉や声が、まだ聞こえるように思い、又家に歸つてこの事を濃紅姫に話す時の濃紅姫の顔が、今眼に見えるように思つて、胸の内は掻き撈むしられるようでした。そうしてこのままこの馬と一所に高い崖からでも落ちて死ねばいいと思ひながら、両手を手綱から放して、頭の毛を掻き掴んで、星の光りの冴さえ渡つた空を仰ぎながら、馬の横腹を蹴立て蹴立てて、人通りの無くなつた都の街を、滅茶苦茶に走らせました。

すると馬は益々驚き慌てまして、白泡を噛み立髪を逆立てながら、足を空に揚げて王宮の周囲を瞬く間に六七遍ぐるぐるとまわりましたが、七遍目に王城の前の広い通りへ出ますと、そのまま南の宇美足国へ通う街道を一散に駈け下りました。

紅矢は馬が走れば走る程、気持ちがだんだん晴々して来るようですから、なおも構わずに走らせていますと、その中に夜が明け離れて、向うに遠く白く光るものが見えて来ました。これは一つの湖で、大層大きい様子ですから、紅矢ははじめて馬を控えて通りがかりのお婆さんに――

「お婆さん。あの湖は何という湖ですか」

と尋ねました。そのお婆さんは頭巾と覆面で顔をすっかり隠して、片手に短い杖を突き片手に重たい果物の籠を提げて、さも疲れたらしくよぼよぼと歩いていましたが、今紅矢からこう尋ねられると、立ち停まりながらやつとこさと腰を延ばしまして――

「はい。あれは多留美という湖で御座います」

と教えました。紅矢は思いの外に遠くに来ているのに驚きまして――

「何。あれが多留美という湖かい。これは驚いた。では南の国の都も最早遠くないんだ。それではそろそろ引き返そうか」

と馬の首を引き廻しましたが、又不<sup>ふと</sup>図<sup>と</sup>このお婆さんが如何にも疲れているのに気が付きまして――

「お婆さんはどこへ行くのですか」

と尋ねました。そのお婆さんは覆面の下から、しきりに紅矢の様子を見ている様子でしたが、この時さも弱り切ったように溜<sup>ため</sup>息<sup>いき</sup>をしまして、自分はあの多留美の湖の片<sup>かた</sup>傍<sup>ほと</sup>りに住んでいる者だが、近い内に王様がお后を御迎え遊ばすという事を聞いたから、そのお祝いに自分の家の庭の樹<sup>な</sup>に生<sup>な</sup>った果物を籠<sup>かご</sup>に入れて差し上げに行くのだと答えました。これを聞くと紅矢は濃紅姫の事を思い出して、嗚呼<sup>あ</sup>これをもし自分の妹が受け取るのだったら、どんなにか嬉しい事だろうと胸が一杯になりました。併し今このお婆さんの忠義な心掛けにも大層感心をしまして、いよいよその疲れているのが気の毒になりました。それでは自分も都からここまで散歩に来たもので、今から引きかえすのだから丁度いい、一所に馬に乗せて宿屋の在る処まで連れて行って上げようと勧めました。お婆さんは頻<sup>しき</sup>りに遠慮をしました。けれどもとうとう紅矢の親切な言葉を断り切れず、鞍<sup>まへわ</sup>の前輪<sup>まへわ</sup>に乗せられて都の方へ連れて行かれました。

紅矢はお婆さんが眼をまわすといけなないと思ひまして、わざとそろそろ馬を歩かせまし

たが、このお婆さんは中々話し上手で、紅矢の顔色の悪いのを見て、いろいろ親切に尋ねましたから、紅矢もうっかり釣り込まれて、自分の心配の種の濃紅姫の事や、王様の御気性が荒々しくならせられた事、それからあまりの事に驚いて何が何やら解からなくなつて、夢中に王宮を飛び出して、無茶苦茶に街中を駈けめぐつて、夜通しの裡にここまで来た事、又この馬はこの国第一の名馬で瞬く間に千里走るといふ評判があるから、名を「瞬」と付けてある事等を、詳しく話して聞かせました。お婆さんは聞く事毎に感心をして、紅矢が天子様の御言葉に少しも反かなかつた心掛けを無暗に賞め千切りましたが、なおその上にも紅矢の家や、王宮の中の模様を根ほり葉掘り尋ねましたから、紅矢は少し気味が悪くなりましたして、終いには極く短い返事ばかりしていました。けれどもお婆さんは中々止めませぬ。

やがてさも勿体らしく、咳払いを一つしまして――

「紅矢様。よく教えて下さいました。御蔭で妾は貴方様の御宅の様子や、王宮の中の様子がよくわかりました。けれどもそれと一所に、妾は世にも恐ろしい災が、貴方のお身体や、貴方の御家にふりかかっている事を知りまして、どうしたらよいかと思っております」

「何。災が降りかかっている」

と紅矢は思わず釣り込まれて尋ねました。

「お婆さん、それは本当かえ」

「ハイ。何をお隠し申しませう。妾は南の国で名高い女の占者で、今年で丁度八百八十歳になりますが、まだ一度も嘘を云った事は御座いませぬ。今ここに持つておりまする果物も、その占いに使うための不思議な果物で、今度王様が御妃を御迎え遊ばすに就いて、この世で一番賢い美しい姫君をお撰みになるように、この果物を差し上げに行くので御座います。この果物がどんな不思議な働を致しますかという事は、直きに貴方にもお目にかかる事が出来ませう。そうしたら貴方もこの婆の申し上げる事が、嘘でないと思し召すで御座いませう」

と申しました。

この婆さんの落ち付いた話ぶりには、流石の紅矢もすっかり引き込まれてしまいました

「何。それは本当かえ。私の家にはそんな恐ろしい災が降りかかろうとしているのかえ。どうしてそれがわかるの、お婆さん。教えておくれ」

と急ぎ込んで尋ねました。

## 十四 果物の占い

するとお婆さんはうしろから覗き込んでいる紅矢の顔を、黒い覆面の下からそつと見返りながら申しました。

「そんなにお騒ぎにならなくとも大丈夫で御座います。災というものは前からわかっていれば、誰でも免れる事が出来るもので御座います。けれども貴方のお家の災がどんな災か、はつきり前からわかるためには、わたし妾はまだもつと貴方のお家の中の事に就いて、お尋ね申し上げねばならぬ事が御座います。貴方は少しも隠さずに、私が尋ねる事をお答えになりますか」

「ああ、どんな事でも。屹度きつと」

「ではお尋ね致しますが、貴方の末のお妹さんは、みへに美紅姫と仰おつしやるのですね」  
「そうだ」

「その美紅姫は貴方とお顔付きがよく肖にておいでになりますか」

「ああ……よく肖にていて、着物を取りかえると一寸わからない位だよ」

「その美紅姫に就いて、この頃何か不思議な事は御座いませぬか」

「ああ、よく知っているね。お婆さん。本当ほんとうに私はその妹の事に就て解からない事があるのだよ。一体その美紅姫は、小さいときからお話が何より好きで、今まで毎日毎日お話の書物ばかり読んでいたのだが、この頃急にそのお話が嫌いになって、只一人自分の室へやに閉じ籠もって何かしきりに考えながら、折々解からない解からないとひとりごと独言を云っているのだよ。だから皆心配してその訳を聞いて見るけれども、どうしてもその訳を云わないで、只明けても暮れても解からない解からないと云い続けている。けれども別段病気でもなさそうだから、打つちやらかしておくのだよ」

「まあ、それで御座いますか。それでやつとわかりました。それではその美紅姫は、黒い大きな眼をした、眉まゆの長い、そして紫色の髪かみのけ毛が地面まで引きずる位、長いお方では御座いませんか」

紅矢はこのお婆さんが、自分の妹の事を、どうしてこんなによく知っているのかと、怪しみながら答えました。

「そうだよ。それにすこしも違ちがはない」

「フム、それで御座いましょう。ではもしやその美紅姫は、この間の朝不思議な夢を御覧



になりはしませんでしたか」

この言葉を聞いた紅矢はあまりよく中るのに驚いてしまって、口を利く事が出来ず只やつとうなずいたばかりでした。けれども婆さんは構わずに――

「フム。フム。フム。いよいよ妾の占いは本当だ。では今一つお尋ね申し上げます。その美紅姫がその夢を御覧遊ばした朝、お眼が覚めて吃驚なすった時、窓の処に一匹の赤い鳥が居はしませんでしたか」

紅矢はもう、余りの不思議に呆れてしまって、只深いため息をつくばかりでした。

「へへへ……。よく中りましたで御座いますよう。妾はこの国第一の年寄りで、又この国第一の占者なので御座いますもの。当らない筈は御座いませぬ。妾は初め、向うから貴方が馬に乗ってお出でになるのを見付けまして、貴方のお顔を見ました時、すぐに貴方は貴い身分の御方で、御両親や妹御様方があり、しかもその末の妹御様は、この間十何年の長い間、他の国で美留女姫と名乗ってお話狂気とまで云われた夢を御覧になつて、その夢が覚めると、枕元の窓の処に一匹の赤い鳥が居た事、そうしてその長い夢の間に、昨日までの事を忘れてしまって、却つて今の御身の上を夢ではないかと思つておいでになる事なぞが、一時にすっかり解かつたので御座います。

紅矢様。お気をお付け遊ばせ。その妹御様の美紅姫こそ、貴方のお家の災の種で御座いますぞ。美紅姫はこの間御覧になった夢の中で悪魔になつてしまつて、赤い鸚鵡という鳥を召し使いにして、貴方のお家に恐ろしい災を降らせ、貴方の御両親や、貴方や、濃紅姫こべにや、家からゆう中の人々を塵みなごろしにして、只自分独り生き残つて、そうしてこの国の女王となつて、勝手気儘な事をしようと思つておられるので御座いますぞ」

「では濃紅姫はお后になる事は出来ないのか」

と紅矢は声を震わして尋ねました。

「はい、出来ませぬ。出来ませぬ。妹御の美紅姫が邪魔を遊ばします。いや、美紅姫ではない。悪魔にのろ咀われた美紅姫、つまり夢の中の美留女姫が邪魔を遊ばします」

「嘘だ。美紅姫はそんな悪い女でない。又そんな悪魔に魅入られるような女ではない。私はお婆さんの云う事を本当にする事は出来ない。他の占うらなは皆当つたけれども、今の占だけは決して当らない」

と紅矢は顔を真赤にして、身を震わしながら云い切りました。けれどもお婆さんは中々凹へこみませんでした——

「今までの占がもし当つたとすれば、今の占も決して中あたらぬ筈は御座いませぬ。嘘だと思おぼ

し召すならば、その証拠を御覧に入れましようか」

紅矢はお婆さんからこう云われても、どうしても妹の美紅がそんな事をするとは思われませんでした。そしてあの可愛い妹を悪魔のように云うこの婆さんが、心から憎くなりまして、もう一時も馬に乗せておく事は出来ない位腹が立ちました。けれども又思い直しまして、この婆さんは決して悪い気で云っているのではあるまい。屹度占いを間違えて、それを本当にして心配して、自分に教えてくれるのに違いないと考え付きましたから、それならば一つその証拠を見て、それから間違っている事を教えてやろうと思ひまして——

「では、お婆さん、その証拠を見せておくれ」

と頼みました。

「その証拠というのは、これ、この果物で御座います」

と云いながら婆ばあさん様は、手に持った果物の籠を見せました。

「何、その果物が証拠とは……」

と紅矢は驚いて中を覗きますと、中には見事な林檎が七ツ這入っております。

「妾はこれでその占いを立てたので御座います。御覧遊ばせ、七ツ御座いましょう。丁度悪魔の数で御座います。これを倍にすると美紅姫のお年になります。つまり美紅姫は悪魔

に取り付かれて身体が二ツになつて、その半分は今貴方の御命をつけねらつてという事になります」

「馬鹿な。そんな事があるものか。都からここまでは何百里とあるものを」

と又紅矢は馬鹿馬鹿しくなつて笑い出しました――

「ではその果物が美紅姫だと云うのかえ」

「イイエ。そうでは御座いませぬ。けれども悪魔の美紅姫はこの果物の直ぐ傍に居るといふ事で御座います」

「何、私の傍に」

と紅矢は思わずそこらを見まわしましたが、そこは丁度只ある森の中の橋の上で、あたりには人一人通らず極く淋しい処でした……と思う間もなくどうした途端か、お婆さんは不意に今まで大切に抱えていた果物の籠を、馬の上から取り落し――

「あれっ。大変だア」

と叫びながら、自分も一所に馬の上から転がり落ちて、周章で果物を拾おうとしましたが、生憎果物は橋板の上を八方に転がり出して、大方河の中へ落ちてしまいました。するとお婆さんは俄に泣き声を張り上げて――

「あれッ。大切な果物が皆河へ落ちた。王様へ差し上げる占うらなの果物は皆流れて行つて終う。ああ、勿体ない。勿体ない。あれ、取つて下さい。取つて下さい。誰も取つてくれなければ妾が行く」

とそのまま欄干てすりに走り寄つて、今にも飛び込もうとしました。これを見た紅矢は驚くまい事か、「お婆さん、危い」と叫びながら直ぐに馬から飛び降りて、お婆さんを抱き止めて、代りに自分が素裸すはだか体になつて、橋の欄干てすりから身を躍らして河の中へ飛び込みました。

この体ていを見ますと、今まで橋の欄干てすりに縋り付いて泣いていた婆さんが、急に泣き止んで轟すつくと立ち上りまして、いきなり頭巾や、外套や、手袋をかなぐり棄てますと、お婆さんが見えたのは美留藻みるもが化けたので、今ドンドン流れて行く果物と、それを追おいかけて行く紅矢を眺めて気味悪くケラケラと笑いました。そうして声高く、

「お兄様……悪魔の美紅をよく御覧なさい」

と云うかと思うと直ぐに、傍に脱ぎ棄ててある紅矢の帽子から靴まですっかり盗んで身に着けるが早いのか、ヒラリと「瞬」に飛び乗つて、強く横腹けりを蹴付けながら、一足飛びに都の方へ飛び出しました。

## 十五 白木綿

悪魔美留藻はやがて何百里という途を矢のように飛ばして、名前の通り瞬く間に都に到着しますと、美留藻は先ず呉服屋へ参りまして、晒木綿さらしめんを買いまして、それからある人通りの少ない横路地へ這入りました。そうして上衣やズボンの方々に泥を沢山なすり付け、その上に顔中すっかり繻帯ほうたいをして眼ばかり出して、男だか女だか解らぬようにして終いますと、今度はこの都第一の仕立屋へ這入りまして、紅矢の声色を使つて、自分は総理大臣の息子の紅矢である。最前馬から落ちて顔に怪我をした上に、大切な着物を汚してしまつたのだが、明日は又王宮に行かねばならぬから、今日の正午迄ひるに今一着同じ服と、外套一枚を仕立て上げる。但し材料しなもののや飾りは出来るだけ派手な上等のものにして、鈕ぼたんにはこれを附けるようにと云いながら、髪毛かみのけの中から大粒の金剛石ダイヤモンドを十二三粒取り出して渡しました。

折よくこの仕立屋の亭主は紅矢の家へ出入りの者で、紅矢の身体からだの寸法を心得ていて、委細承知致しましたと受け合つて、金剛石ダイヤモンドを受け取りましたから、美留藻はなおも念を押して、家中総掛りうちで屹度間に合わせると命じて、又馬を飛ばせました。それから帽子屋

へ参りまして上等の帽子を、矢張り正午迄の約束で誂えまして、その飾りにと云つて、こへも大きな金剛石ダイヤモンドを一粒渡しました。それから劍屋つるぎやへ行つて劍を、靴屋へ行つて靴を、手袋屋へ行つて手袋を、皆正午までに最上等の分を調べておくように申し付けまして、今度は王城の西の方に向つて馬を飛ばせました。どこへ行くのかと思うと、やがて美留藻は紅矢の家を尋ね当てまして、大胆にも表門から駈け込みましたが、馬から降りると直ぐに玄関に駈け寄つて、その石段の上に伏し倒れて、悲し気な声で家の者を呼びました。

家の者は、紅矢が昨日旅から帰ると、直ぐに王宮へ行つて、又王宮を飛び出して、「瞬」に騎つて王宮の周囲まわりを七遍も駈けまわつて、そのまま昨夜の内に行衛ゆくえが知れずになつたという噂を聞きまして、薩張り理由さつぱわけが解らず、もしや王様から大層な急用でも仰せ付かつたのではあるまいか。それとも帰り途に散歩に行つて、大怪我でもしたのではあるまいかと、大層氣を揉んでいるところでしたが、この声を聞くや否や皆一時に、素破こそと胸を轟かして玄関に駈け付けて見ますと、こは如何に。

紅矢は余程の大怪我をしたものと見えて、顔中繃帯をして、呼吸いきを機はずませて倒れております。この体ていを見た両親や、その他の者の驚きは一通りでありませんでした。直ぐに大勢で紅矢の寢床へ担かつぎ込みましたが、生憎な時は仕方のないもので、この家うちのお抱えの医

者は、二三日前から遠方の山奥へ薬になる艸くさや石を採りに行った留守で、とても一月や二月で帰つて来る氣遣いはなく、今の間まには勿論もちろん合あいませんでしたから、仕方なしに宮中のお抱えの青眼先生の処へ使いを立てて、大急ぎで御出おいで下さるようにと頼みました。丁度青眼先生は藍丸王のお叱りをうけて家に引き籠もっているところでしたが、紅矢が怪我をしたと聞くと直ぐに承知をしまして、薬を取り揃えて出かけました。

青眼先生が来る迄に、美留藻の似せ紅矢は鋭く眼を配つて、家うちの中の様子を見ますと、案の定この家の中に居る人々は、この間自分が夢の中で見た、美留楼公爵の家の人々にそっくりで、声までも少しも違ひませぬ。美留藻は吾われながら眼の前の不思議に、今更に驚いてしまいました。又氣を取り直しまして、それではこの家の末娘の美紅というのが、いよいよ自分と同じ夢を見て、吾れと吾が身を疑っているのに違ひない。そうしてその姉の濃紅姫は、自分と一所に王様の前にお眼見得めみえに出るとの事、念のため今一度、二人の顔を見ておきたいと、なおもよく氣を付けて眼を配っていますと、この時姉あねいもうと妹の二人は、兄の怪我を氣遣いながら、両親の身体からだの間から涙ぐんだ顔を出して、一心に様子を見ておりました。やがて美留藻が二人の顔を見付けて、繙帯の中からじつと眼をつけますと、二人は悲しさと恐ろしさに堪え切れないうで、顔に手を当ててこの室へやを出てしまいました。



あとを見送つた美留藻は、ほつと深い溜め息をしました。美紅姫の姿の美しくて気高い事。湖の底の鏡の中で見た自分の姿に、一分一厘違わぬばかりでなく、ずっと清らかに神々しく見えたからで御座います。又姉の濃紅姫の方は、流石に紅矢が自慢するだけあつて、本当に溫柔おとなしく優しいには違いありませんが、併しその美しさは逆も妹の美紅や、又は美留藻自身の美しさとは比べものにならないと思ひましたから、これならば自分と一所に藍丸王様の御前にお目見得に出ても、決して負けるような事はないと安心をしました。

けれどもとにかくこの家の人々は、この間の夢の中で、美留女姫の両親や兄きょうだい妹となつた人々で、しかもその末娘の美紅姫は、矢張り自分と同じように、美留女姫になつた夢を見たのみならず、不思議にも自分と少しも違わぬ姿を持つているのですから、もしかすると美紅姫の方が本当の美留女姫の生れ変りで、自分が女王になるといふのは嘘かも知れないと思ひました。もしこの美紅姫がああ夢を本当にして、女王になろうとも思つたならばそれこそ大變で、折角自分が骨を折つて、本当の事にしようと思つてゐるあの夢が、皆嘘になつて仕舞いますから、最早一寸も油断がなりません。これは何でもこの美紅姫を亡ないものにして、出来る事ならあの夢の事を知つてゐるものは皆息の根を止めてしまわなければ、自分は一寸の間も安心して眠る事は出来ない。そうしなければあの夢のために

自分に向いて来た幸福しあわせを、自分一人占めにする事は出来ないのだと、恐ろしい覚悟を定めてしまいました。けれども紅木公爵も公爵夫人も、こんな悪い女が似せ紅矢となつて、今眼の前に寝ていようとは夢にも知りませぬ。只思いもかけぬ吾が兎の大怪我に気も狂う程驚き慌てまして、一体どうしてこんな事になつたのかと言葉を揃えて尋ねました。

似せ紅矢の美留藻はこの言葉を待ちかねて、紅矢の声色を使いまして、さも苦しそうな呼吸いきの下から、「何卒どうぞ皆の者を遠ざけて下さい。只御両親だけ御残り下さい。他人に聞かれてはよくない事で御座いますから」と申しました。そうして両親と差し向いになりますと、美留藻はさも痛々し気に床の上に起き直りまして、両手を支つかえて、繃帯の間から涙をポロポロと落して見せました。

両親は益々驚き周章あわてまして左右から、

「お前はどうしたのだ。訳を云わずに泣いたとて訳が解からんではないか。どういう訳で涙を流すのだ。これ。紅矢。早く聞かせてくれ。心配で堪たまらない。ええ、紅矢」

と問い詰めました。この様子を見て美留藻は、先まず占しめた、両親は飽あくまで自分を紅矢と思つていと安心しました。そしてなおも弱り切つた声で――

「実は私は御両親に今日只今まで、固く御隠し申していた事が御座います。けれども最早

斯様かよになりましたは到底御隠し申す訳に参りませぬ故、すっかりお話し致します」

と申しましたが、これから濃紅姫が王様をお慕い申し上げていた事を初めとして、今度王様が御自身で濃紅姫を妃に迎える約束を遊ばしながら、又御自身でその約束をお破り遊ばした上に、今から一週間の後のちに他の女と一所にお目見得に出せと仰せられた事、自分は余りの切なさに夢中になつて「瞬」に乗つて駆け出した事、それからその夜よの内に多留美の湖の傍まで行つて歸りがけ、只ある橋の上で馬が躓つまずいたために落ちて怪我をした事など、有る事無い事、紅矢から聞いた話に添えて、詳しく話して聞かせました。

両親は聞く事毎に驚く事ばかりでした。そうして事情わけはすっかり解かりましたが、その中で濃紅姫を他の女と一所にお目見得に出す事だけはあまりに情ない浅ましい事で、殊に都合よく御妃になる事が出来れば兎も角も、もし間違つて王様の御気に入らないような事があると、これ位恥辱はじな事はないからと云つて、両親は容易たやすく承知致しませんでした。

併し美留藻の似せ紅矢はここが大切なところと思ひまして、一生懸命になつて濃紅姫の容きりよう色を賞め千切つて、仮令たとひどんな女が来ても妹以上に美しい女は居ないから大丈夫だ。それに藍丸王様も今は濃紅姫の美しさをお忘れになつたから、あのような菅すげ無ない事を仰せられたのであろう。けれども又今度御覧になれば、屹度昔のように御気に入るに違いない。

そしてもし濃紅姫がお目見得に出ないために、他の賤しい女がお妃になるような事になると、かえって王様に対して恐れ多い事になる。だから濃紅姫が今度のお目見得に出るといふ事は、十方八方のために大層都合のよい大切な事で御座いますと、さも苦しそうな呼吸の下からあらん限りの言葉を尽して勧めました。

両親も聞いて見れば成る程道理ですから、一つは濃紅姫の可愛さと親の鼻負目で、やつの事それに定めて両親揃って濃紅姫の室へ相談に出かけました。

そのあとへ青眼先生が、女中の案内を受けて大急ぎで遣って参りました。先生は今まで宮中より他にはどこにも行つた事がなく、この家に来たのはこれが初めてで、宮中に来る紅木大臣と紅矢の他は一度も会つた事のない人ばかりでしたから、一々皆に叮嚀に挨拶を致しましたが、只美紅姫だけは自分の室に隠れていて、姉様の濃紅姫が呼んでも出て来ませんでした。

美紅姫は青眼先生が来たと言ふ声を聞くや否や、もしやあの夢の中の怖いお爺さんではあるまいかと思つたので御座います。そうしてもしそうなれば、今の自分の身の上はどこから夢でどこから本当だかいよいよ解からなくなる。いよいよ不思議に恐ろしくなる。何にしても青眼先生という人が、あのお爺様かどうか見て見なければわからないと思いま

した。けれどももし真正面まともに顔を合わせて、又悪魔と間違えられでもしては大変と思いましたが、それと扉に隙間を作つてそこからそつと眼ばかり出して様子を見ておりました。

その前を通る青眼先生の顔を一眼見ると、美紅姫は思わずアツと声を立てるところでした。その肩まで垂れた青い髪かみのけ毛、その青くて鋭い眼付、青い髻むげ、黒い顔色、そうしてその黄色い着物、皆あの夢の中のお爺さんにそっくりそのまま、歩きぶりまで違つたところはあります。美紅姫は恐ろしさの余り身体からだ中の血が凍つたように思いました。

そうして慌てて扉を閉じて、内側から鍵をしっかりとかけて、ほつと一息安心すると、そのまま気が遠くなつて、床の上に倒れてしまいました。けれども家中は今、上を下へと混雑しているところでしたから、気の付く者は一人もありませんでした。

ところが似せ紅矢の美留藻も青眼先生の顔を見ると、同じように慄ふるえ上る程驚きました。そうしていよいよあの夢が嘘でない事が解かりましたが、それと一所に青眼先生の眼付が如何いかにも鋭くて、もしやあの夢の中での銀杏いちじょうの葉を容いれた袋の底を鋏はさみで切り破つた女が自分だという事が繃帯の上からわかりはしまいかと心うちの中で恐れた位でした。けれども又よく考えて見ると、青眼先生がもしあの美紅姫を一眼でも見ていれば、妾わたしより先に姫を疑う筈なのに平気でこの家に遣つて来るところを見ると、青眼先生はこの家に初めて来た

ので、まだ美紅姫の顔を見た事がないのかもしれない。それとも初めからあの夢を見ないのであろうか。イヤイヤそんな筈はない。美紅姫があの夢を見たように、この青眼先生も、それからあの白髮の乞食小僧も屹度あの夢を見たに違いない。それでなければ理屈が合わなくなる。そしていよいよ見たか見ないかは、そのうちに美紅姫とこの青眼先生と出会わして見ればわかる事だ。とにかく今のところではこの青眼先生はまだ一度も美紅姫と顔を合わせず、又自分が似せ紅矢という事も気が付かずにいるに違いないと、ほっと安心をして気を落ち付けました。

けれども青眼先生の方はそんな事は露程も気が付きませぬ。徐しずかに進み寄って美留藻の似せ紅矢に敬礼をしまして、それから先ず脈を見ましたが何ともないので、これならば死ぬような事はあるまいと安心をしました。ところがその次に顔の繃帯を取ろうとしますと、似せ紅矢は無暗に痛い痛いと言切声をふり絞って、どうしても繃帯に触らせませぬ。青眼先生は仕方なしに、葉籠の中から油葉を出して、繃帯一面に浸しませて、こうやっておけば直すくに痛くないように繃帯が取れるであろう。それからこの葉は一滴程嘗なめておくと一週間眠り続ける事が出来る葉だ。その間には大抵痛みも取れるであろうから、あとであまり痛みが烈しいならば、飲ましておくがよいと云って、小さな瓶びんを一つ病人の枕元に置いて行

きました。

青眼先生が帰ってから暫くの間、美留藻は痛みが取れたように見せかけてスヤスヤと眠っておりました。ところがやがて正午頃ひるになって、看病のために残っていた女中が一寸の間居なくなりますと、美留藻は急にむっくりはね起きて、枕元の眠り薬の瓶を取るが早いか、又室へやの窓から飛び出して、裏手の廐うまやへ来て馬丁を呼んで「瞬」を引き出させました。そうして怪我が急に痛くなつたから青眼先生の処へ行くのだと云い捨てて、ヒラリと鞍に飛び乗るが早いか、裏門から一目散に逃げ出しました。

## 十六 金剛石

美留藻は紅矢の家を逃げ出しますと、先ず一番に仕立屋に行つて着物を受け取りまして、賃だちんには一粒の大きな金剛石ダイヤモンドを投ほうり出して来しました。

その次には帽子屋、その次には靴屋、その次には剣屋と、それぞれ尋ねてまわつて、品物を受け取つて、代金には皆宝石を一粒宛ずつ、髪かみのけ毛けの中から摘つまみ出して与えましたが、それから都の大通りを驀まつしぐら然ぜんに南に走りますと、暫しばらくして向うから美留藻の脱ぬけ殻がらのお婆

さんの着物を着て、喘ぎ喘ぎ走つて来る紅矢に出会いました。すると美留藻は乱暴にも、突然馬を紅矢に乗りかけて、逃げる間もなく踏み蹴散らして、大怪我をさせてしまいました。そうして全く呼吸が絶えて、うつ伏せに倒れたのを見澄まして引き返して来て、助けて行く風をして馬の上に抱え乗せて、只或る森の中へ這入りました。

そこで美留藻は自分の顔の繻帯を取つて、紅矢の血まみれの顔をすっかり包んでしまひまして、それから今まで借りていた紅矢の着物を返して旧の通りに着せて、自分は新しい男の着物を着込んで、お婆さんの着物は打つ捨ててしまいました。

こうしておいて、美留藻はグタリとなつた紅矢を、又もや「瞬」の上に抱え乗せて、再び都へ一散に駈け上りましたが、今度は王城の西の大銀杏の樹を目標に、青眼先生の門の前に来まして、紅矢を馬の上から突き落とし、自分はキャツと叫びながら馬から飛び降りると、そのまま素早くどこかへ逃げて行つてしまいました。

あとに残された名馬の「瞬」は畜生の事ですから何事も知つていよう筈がありません。けれども今自分の背中から落つこちたものを見ますと、自分の主人の紅矢ですから、畜生ながら気にかかると見えまして、しきりに紅矢の身体を嗅ぎながら、ぐるぐる歩きまわつていましたが、やがて首を擡げて高く悲し気に嘶きました。



最前から青眼先生の家へは、紅矢の家から引つ切りなしに使いが来て、紅矢はまだ来ぬかまだ来ぬかと尋ねていました。そのお使いから詳しい様子を聞いて、青眼先生はどうしたことであろうと立つても居てもおられず心配をしているところへ、不意に表の門の前で馬の嘶いななき声が聞こえましたから、もしやと思つて駈け出して見ますと、こは如何に、紅矢は銀杏の樹の根元に血まぶれになつて倒れていて、傍には「瞬」が心配そうにうろろしています。

青眼はこの有様を見て、腰を抜かさんばかりに驚きました。が、兎とも角かくも紅矢の家から使いに来たものに頼んで、二人で紅矢を自分の寢台ねだいに運び入れて、すっかり裸体はだかにして血を拭い清めて、傷口を調べて見ますと、案外に傷は浅くて、ここ一週間も経つたら癒なりそうです。只胸と頭を非道ひどく打つたと見えまして、全く気絶して呼吸も通わず、脈も打たず、身体からだは氷のように冷たくなつて、唇は紫色になっていました。けれどもお使いの者が「瞬」に乗つて歸つて、取るものも取り敢えず紅矢の両親を連れて来ました時には、紅矢は青眼先生の上手な介抱と、良い薬の利き目とで呼吸いきを吹き返して、スヤスヤと静かに眠つていました。

これを見ると両親は、又もや一人小供が生れたように喜んで、嬉うれし泣きに泣きました。

そうして今更に青眼先生の介抱の上手なのに感心をしまして、紅矢のみならず私共の生命の親と云つて深く深く御礼を申しました。

## 十七 銅の壺

紅矢はその夜家の者に担がれて、自分の家に連れて行かれましたが、大層熱が高くて平生の自分の寢床に寝かされても、まだ夢中でうんうん唸つておりました。そうしてその夜は夜通し嘔言ばかり云つていましたが、時々眼を開いて両親や妹共の顔を見るかと思うと、忽ち狂気のように騒ぎ出しまして――

「この室へ這入つちやいけない……お父様も……お母様も妹共も……家来共も皆いけない。聞け……聞け……私は悪魔に咀わられている。悪魔の果物。悪魔の美紅。そうして悪魔の『瞬』……七ツの果物は悪魔の数であつた。……私は七ツの数に咀わられた。悪魔の美紅に欺された。悪魔の『瞬』に踏み蹂られた。吁恐ろしい。……嗚呼苦しい。お父様……お母様……妹共……危い危い。私の傍に居ると危い。悪魔は娘の美紅に化けている。そうしてあの悪魔の乗り移つた『瞬』に乗つて今にもこの窓から駈け込んで来たら……危い危い。

出て行つて下さい。妹共、出て行け。一人も私の傍へ居ちやいけない。早く早く」

と叫ぶかと思うと、又ガツクリと枕に頭をのせて、うとうと睡ねむつてしまいました。こんな事が夜通しに二三度もありましたが、傍に居る人々は何の事やら訳が解からず、唯驚ただき慌てるばかりでした。そうして何は兎もあれ用心のために、お母様や妹共をこの室へやから遠ざけまして、お父さんとその他にも一人、気の強い、力も強い家来の黒牛くろうしという者と二人で枕元に居る事にしまして、一方は、廐屋うまやの馬丁べつとうに申しつけて、『瞬』を嚴重に柱に縛り付けて動かぬようにして、その上に番人を二人までもつけておきました。

翌る朝になりますとまだ薄暗いうちに、青眼先生が見舞いに来ました。紅矢の両親や家の人々はもう昨夜ゆうべから心配に心配を重ねて、夜通しまんじりともせず先生が来るのを待ちかねていたところでしたから、先生の顔を見るとまるで神様がお出でになったように前まえ後えうしろから取り付きまして、昨夜ゆうべからの事をすっかり話しました。すると青眼先生はどうした訳か、見る見るうちに顔色が変わって、唇がぶるぶると震えて来ましたが、やがて思わず——

「七ツの悪魔。七ツの悪魔。そんな筈はない。そんな筈はない」

と口走りました。けれども皆から、どうかしてこの紅矢の不思議な病気を助ける工夫は

ないかと責め立てられますと、いよいよ何だか恐ろしくて堪らなくなった様子で、齒を喰い締め眼を見張ったまま天井を睨にらんで立っていました。併しやがて先生はほっと一息深いため息をしながら皆の顔を見まわして申しました――

「はい、承知致しました。もし悪魔が、私の知っている悪魔で御座いましたならば、屹度退治して差上げます。けれども私の考えではこれは悪魔の仕業ではないと思います。私は悪魔の居いどころ所をよく存じておりますから」

「そしてその悪魔とはどんな悪魔ですか」

と紅木大臣は言葉せわしく尋ねました。青眼先生はこの問いを受けると又ハツと驚いた様子でしたが、やがて又何喰わぬ顔をして答えました――

「ハイ。その悪魔は世にも恐ろしい悪魔で、誰でもその悪魔の名前だけでも聞くと直ぐに悪魔に乗り移られて、自分が悪魔になってしまうので御座います。ですからその名前は申し上げられませぬ」

「では貴方はその名をどうして御存じですか」

紅木公爵夫人がこう尋ねますと、青眼先生はグツと行き詰ゆまりました。そうしてさも苦しそうに返事をしました――

「それは私だけはその名前を聞きましても、又その姿を見ましても何ともないので御座います」

「まあ。不思議ですね。何か悪魔に乗り移られないいい工夫でも御座いますのですか」

「ハイ。それはあります。けれどもそれは私の家の先祖代々の秘密で、今申し上げる事は出来ませぬ。私の家は代々この秘密を守つて、そして彼かの昔からの掟——人の姿を盗む者の声を盗むもの。人の生血いさちを盗む者。この三ツは悪魔である。見当り次第に打ち殺せ。打ち壊せ——という言葉おのを国中に広く伝えるのが役目で御座います」

「そうだそうだ。皆そんな掟さてが在つたという事を聞いた。それで思い出した。今美紅の姿を盗んでいる奴は悪魔に違いない。何卒どうぞ青眼先生、是非その悪魔を退治して下さい。貴方は病気の事ばかりでなく悪魔の事までも詳しく御存じだ。何卒どうぞ何卒御頼みます」

と紅木大臣は青眼先生の手を握つて涙をこぼしながら頼みましたが、これを聞いていた他の者は皆真青になりました、扱さてはいよいよ本当の悪魔が、紅矢様を狙っているのかと恐れ戦おのいておりました。

青眼先生は承知したという印に胸に手を当て、敬礼をしました。そうして静かに紅矢の室に這入つて、病人の様子を見ましたが、すっかり見てしまいますと、青眼先生は、ほつ

と安心した様子で皆に向つて――

「皆様、御安心下さいまし。紅矢様の御病気は矢張り私の思い通り普通の怪我で、決して悪魔が狙っているのでは御座いませぬ。その御怪我も、只今は余程よくなつておいでになつて、遠からず起きてお歩きになれる事と思ひます。けれどもなお用心のために、皆様は今までの通り、充分御気を付け遊ばして、御介抱なさるが宜しゅう御座いましょう」

と申しました。そうして皆に挨拶をして悠々と家に帰つて行きました。

けれども青眼先生は紅木大臣の家の門を出ると直ぐに、腕を組んで頭をうな垂れて、何かしきりに考えながら歩き出しました。そうして口の中で絶えず――

「悪魔。悪魔」

と繰り返して行きました。やがて自分の家の門うらちの前に来ますと、青眼先生は立ち止まつて、矢張り腕を組んだままじつと門の前の銀杏の樹を見上げました。

銀杏の樹は最早すっかり葉が落ちてしまつて、晴れ渡つた大空に雲のように高く枝を拈ひげておりました。青眼先生は暫くその梢を見上げていましたが、やがて又眼を落してその根元を見ました。根元には黄色い葉がまだ腐らずに重なり合つています。そこをじつと見ていた青眼先生は、何か決心したらしく、独りで大きくうなずいて四方をグルリと見まわ

しましたが、人間は愚か猫一匹も通らない様子で、只前を流るる川の水音ばかりがサラサラと聞こえていました。この様子を見定めると青眼先生は又何かうなずいて、急いで門の中に這入って行きましたが、やがて又出て来たのを見ると、肩に一梃の鍬を荷になえておりました。

何を為するのかと思うと先生は、又一度あたりの様子を見渡して、誰も通らないのを見澄まして銀杏の根方に立ち寄って、積った葉を掻き除けると、切せつせつ々そこを掘り初めました。そして四五尺も掘ったと思うと、一枚の鉄の板が出て来ました。

青眼先生がその板の端を鍬の先でやつと引き起こしますと、その下は石の箱になっていて、中には余程大切な秘密のものでも入れてあるらしい、真鍮の帯で嚴重に封をした、銅あかがねの壺が一ツ置いてありました。けれどもその周囲まわりには、太い頑固な銀杏の根つ子が、幾重にも嚴重に取り巻いていて、中々鍬の一梃や二梃持つて来ても掘り出す事は出来そうに見えませんでした。まるで銀杏の樹がこれは俺のものだ。誰にも渡す事は出来ないといって、確しっかり掴んでいるようです。青眼先生はこれを暫く見つめていましたが、やがてほっと一息安心をした様子で、

「先ず大丈夫。この塩梅あんばいならば残りの四ツの悪魔はまだ、あの壺の中から逃れ出してい

ない。今のところではあの鏡と鸚鵡と、それからまだ現われて来ない宝蛇の三ツだけは退治ればよいのだ。それにしても宝蛇はどこに隠れているのであろう。そしてどこから現われて来るのであろう。心配な事ではある。もしや事に依つたらば紅矢様を狙っているものは宝蛇ではあるまいか。もしそうならばいよいよ油断がならないぞ」

と独り言を云いながら、じつと王宮の方を睨んでおりましたが、やがて又気が付いて、急いで壺の上に土を被せて、銀杏の葉を撒き散らして、あとをわからないようにしておきました。

## 十八 氷と鉄

その日も無事に過ぎて翌る朝になりますと、紅矢の家から又もや急な使いが来て、青眼先生に大急ぎで来てくれとの事でした。先生は取るものも取りあえず直ぐに駈け付けて見ますと、昨夜夜通し寝ず番をした紅矢のお父さんと黒牛とが、玄関に出迎えていまして、両方から手を引いて、紅矢の寢床へ案内をしました。そうしてその椅子に腰かけさせまして、暫く黙つて紅矢の様子を見ていてくれと頼みました。青眼先生は愈々不審に思っ



て、一体これはどうした事と怪しみながら、頼まれた通りにじつと紅矢の寝顔を見つめて  
いますと、やがて紅矢は頬の色を真青にして、火のように血走った両方の眼をパツチリと  
開きました。そうして天井を睨みながら身もだえをして、

「昨夜来た、悪魔が来た。美紅姫にそっくりの悪魔が男子の着物……紫の髪毛……銀の  
剣……ダイヤモンドの鈕……窓から白い手を出して……手には美しい宝石の紐を持って……そ  
の紐を投げ付けた。

お父さんも眠っていた。黒牛も眠っていた。

私だけ知っている。悪魔だ。悪魔だ。この間の悪魔だ。おのれ悪魔。もう一度来い。今  
後は逃がさぬぞ。この繃帯を解いてくれ。この蒲団を取ってくれ。早く。早く」

と叫びましたが、やがて又疲れたと見えてグタリと横になって、ウトウトと眠り初めま  
した。

この様子を見た青眼先生は又もや腰を抜かさんばかりに驚いたらしく思わず――

「ム――ム。悪魔……」

と叫びましたが、有り合う椅子にドツカと腰を下して、眼を閉じ口を一文字に結んでさ  
も口惜しそうに――

「宝蛇だ。宝蛇だ。扱さては自分の思い通りであつたか」

と独り言を云いました。

傍に居た人々は両親を初め皆、いよいよ不思議な青眼先生の言葉や行いに驚いて、一体これはどうした訳であろうと怪しみました。そうして黙つて考え込んでいる青眼先生の、物凄い顔付きを穴の明く程見つめていました。すると青眼先生は間もなく考かんがえが付いたと見えまして、眼をパツと開いて――

「よし。覚悟した。私はどうしてもその悪魔の正体を見届けずにはおかぬ」と申しました。

それから青眼先生は紅木大臣夫婦に、今夜からは自分一人で夜伽よとぎをして、悪魔の正体を見届けたいから、何卒どうぞ自分に任せて下さるようにと熱心に願いました。両親はこの頼もしい青眼先生の言葉を聞きますと、何で否いなやを申しましよう。直ぐに承知を致しまして、青眼先生を只一人この室へやに残して引き取りましたが、なお念のため家の周囲まわりには、力の強い勇気のある家来を大勢配つて、油断なく見張らせるようにしました。

青眼先生は、室へやの中に一人も居なくなりますと、やおら立ち上つてそこらを見まわしましたが、この室は扉を締めておきさえすれば、あとは只窓一ツしか無く、他に出入りする

処はありませんから、悪魔は屹度あの窓から這入つて来たに違いないと思ひました。青眼先生はこれを見定めて、なおもその窓の外をよく見ようと思つて、不図窓の縁に手をかけますと、その隅の処に妙なものを見つけました。それは三粒の美しい紅玉ルビーでした。

青眼先生はこの世の中にありとあらゆるもので知らぬものは無く、殊に宝石の事は詳しく知つていましたから、この三粒の紅玉ルビーを一目見ると、直ぐに、これは世にも稀まれな上等飛び切りの紅玉ルビーで、当り前の者が持つているものではないと思ひましたが、扨誰さてが何のためにこんな処に置いてあるかという事は全くわかりませんでした。只ただもしかすると、これは悪魔が何かのためにした悪戯いたづらかも知れぬ。それならばなるべくいじらぬ方がよいと思つて、そつくりそのままにしておきました。

その中うちに夜はだんだん更ふけて来ましたから、青眼先生は眠られぬ薬を飲みまして、只一人紅矢の枕元に椅子を引き寄せて座りました。そうしてその懐ふところ中には、悪魔を見たらば直ぐにも注ぎかけるために、別に一つの薬瓶を用意して、その夜よ夜通しまんじりとも為せずせに過ごしました。その薬は一寸でも身体からだにかかると、直ぐに身体中の血が氷になつてしまふという恐ろしい毒薬でした。けれどもその夜は何事も無くて済みました。その次の夜よも次の夜よも無事に明けました。いよいよ明日あすは宮中でお目見得の式があるという晩になると、

その間家中は濃紅姫の身支度で大変な騒ぎで御座いましたが、すっかり支度が済みますと、姫はこの家の一番の奥の石の神様を祭つてある大広間の真中に、寝台を置いてその上に寝かされて、その周囲には四人の家来が代り番に寝ずの番をしておりました。これは姫の身体に万一の事が無い用心です。

両親はこの様子を見て安心をして自分の室に引き取りました。美紅姫もその枕元に来て

「お姉様、お寝み遊ばしまし」

と云つて、あとを見返り見返り出て行きましたが、その顔は云うに云われぬ悲しさに満ち満ちていました。これを見ると濃紅姫は――

「ああ、美紅姫と一所にこの家で眠るのもこれがおしまいになるかもしれぬ。美紅はそれで泣いているのであろう。何という悲しい事であらう」

と思ひながら美事な香木で作つた格天井を見ていましたが、熱い熱い涙が自ずと眼の中に溢れて、左右にわかれて流れ落ちました。その時にこの広い宮中はひっそりと静まり返つて、針の落ちる音までも聞こえる位でした。

この時青眼先生は只一人紅矢の枕元に座つて、毒薬の瓶を懐に入れたまま、最早悪魔が

来るか来るかと待っていました。けれども夜中過ぎまでは何事も無く、只紅矢の苦しい呼吸の音が、夜の更けると一所に静まって行くばかりでした。ところが真夜中が過ぎて、やがて夜が明けようかと思わるる頃になりますと、庭のどこからか歌を唄う女の美しい声が聞こえて来ました。

「紅矢は顔を見た。

悪魔の顔を見た。

悪魔の顔を見たものは

殺されるのが当り前。

あたし

妾は悪魔。妾は悪魔。

屹度紅矢を殺すぞよ」

その声は、青眼先生がどこかで一度聞いた事のある声のように思いましたが、この時はどうしても思い出せませんでした。この声を聞き付けますと、紅矢は忽ち眼を見開き、頭を擡もたげて――

「あの声。あの声。悪魔のこえ。妹の美紅の声」

と叫びました。

青眼先生は直ぐに窓から飛び出して、声のする方に駆け出しました。そうして片手を鑿びんの栓へかけて、出会い頭に毒薬をふりかけてくれようと、血眼ちまなこで駆けまわりましたが、不思議や悪魔はどこへ行つたか影も形も無く、只霜風しもかぜが身を切るように冷たくて、大空には星の光りが降るように輝いているばかりでした。

青眼先生は何だか狐に掴つままれたような気がして、呆然ぼんやりと立っていました。けれどもその中に又不図これは悪魔の計略はかりごとだなど気が付いて、急いで紅矢の室へやに帰って見ますと、こは如何に。紅矢は何を為したのか、布団の中から身体からだを半分脱け出しまして、呼吸いきをぜいぜい切らして、眼を怒らして、齒を喰い締めて、窓の外を睨んでいます。そうして左の手には何か固いものを一ツ、しっかりと握り込んでいる様子です。青眼先生はハツとしまして、扱は悪魔は自分を誘い出しておいて、又もや紅矢を苦しめに來たのだなど気が付いて、急いで紅矢の傍へ寄つて――

「紅矢様。若様。どう遊ばしたので御座います。悪魔がここへ参りましたか。そうしてどちらへ逃げて行きましたか」

と尋ねました。けれども紅矢はそれには返事を為せずに――

「悪魔。悪魔奴。美紅の悪魔奴、取り逃がしたか」

と叫びました。そうして又がつくりとうしろに倒れますと、どうでしょう。この間から窓の処に置いてある紅玉と同じ位に美しい、同じ位の大きさの紅玉が一掴み程、バラバラと寝台から転がり落ちて、床の上で血のような光りを放って散らばっているではありませんか。この様子で見るとこの紅玉は、紅矢の妹共が忘れて行ったものでも何でもなく、全く悪魔が何かのために置いて行ったものに違いないと思われました。青眼先生は一寸の猶予も無く両親を呼んで紅矢の番を為せました。そうして自分は有り合う提灯に火を灯して、窓の外へ出まして、そこらをよく検めて見ますと、石畳のあすここに、一粒か二粒宛紅玉が落ちています。青眼先生は占めたと思ひまして、なおも提灯を地面にさし付けて、紅玉を探しながら、だんだんと跡を付けて行きますと、その跡は一間置いて隣りの室の窓の下に来て止まっています。そうしてその窓掛けの間からは薄い黄色い光りが洩れていました。

青眼先生はこの室が美紅の室という事をかねてから聞いておりました。けれども中を覗いた事は一度もありませんでした。ですから直ぐに提灯の火を吹き消して、その窓からそつと中を覗いて見ました。

窓の中の有様を一眼見るや否や青眼先生は思わず棒のように立ち竦んでしまいました。窓の直ぐ傍の寢台の上には一人の美しい少女が寝ております。その顔。その姿。それから寢台の左右に垂れた髪の毛の色から縮れ工合まで、あの夢の中で、自分の背中の銀杏の葉の袋を切り破った女の子に一分一厘違いないではありませぬか。

青眼先生は暫くの間は、あまりの不思議に呆気にと取られて、茫然と少女の寝顔に見とれておりましたが、やがてほつと大きな溜息をつきますと、何やらぐつとうなずきまして、震える手で窓をそつと押して見ますと、訳もなくスーツと左右に開きました。そこからそろそろと音を立てぬように中に這い込んだ青眼先生は、床の上に下りると直ぐに、毒薬の瓶の口を切つて右手に持つて身構えをして、丸硝子の行燈の薄黄色い光りに照された少女の寝顔を又じつと見入りました。

見れば見る程美しい少女の姿。夕雲のように紫色に渦卷いた長い髪の毛。長い眉と長い睫毛。花のような唇。その眼や口を静かに閉じて、鼻息も聞こえぬ位静かに眠っている姿。見ているうちにあまり美しく艶やかで、何だかこの世の人間とは思われぬようになりまして。けれどもなおよくあたりを見まわすと、その髪の毛の中や枕のまわりに一粒か二粒宛、紅矢の枕元に在つたのと同じ位の大きさの紅玉が散らばっているではありませんか。



青眼先生はこれを見ると思わず声を立てて――

「悪魔」

と呼びました。

この声を聞くや否やその少女は直ぐにむっくりはね起きて、青眼先生の顔を一眼チラリと見ましたが、忽ち物凄い形相かおかたちになつて――

「あれッ。青眼先生……妾あたしは美紅です。この家の娘うちです。悪魔ではありません」

と叫びながら紫の髪毛かみのけをふり乱し、紅玉ルビーを雨のようにふり散らして、物をも云わず窓から逃げ出そうとしましたが、最早もはや遅う御座いました。青眼先生が注ぎかけた薬が身体からだのどこかへ触さわると直ぐに、身体中からだの血が氷になつて、寝台ねだいの上にドタリと落ちて、見る見る内にシャチコばつてしまいました。

青眼先生はこれを見ると、ほつと一呼吸ひといき胸を撫なで下しましたが、なおじつと気を落ち付けて動悸を鎮めて、それから死骸の傍へ寄つてよく周囲まわりを檢あらためて見ました。そうしていよいよ死んだという事をたしかめてから、薬瓶の仕末をして懐ふところに入れて、又こつそりと窓から出て行きましたが、もしや今の叫び声が聞こえはしなかつたかと思ひながら、急いで紅矢の室に帰つて見るとこは如何いかに！ 紅矢の容態は一寸居まない間に急に悪くなつて、今に

も呼吸を引き取る様子です。そうして固く握り詰めた左手の拳を千切れるばかりにふりまわしながら、嚙言うわごとのように切れ切れに――

「口惜くやしい。口惜くやしい。悪魔。美紅」

と云つています。

その枕元に集まつて泣きながらどうなる事かと心配をしていた紅矢の両親は、青眼先生が帰つて来たのを見ると一時に走り寄つて――

「助けて下さい。助けて下さい。紅矢を助けて下さい」

と口々に叫びながらその袖に縫すがりました。

流石さすがの病人に慣れた青眼先生も、これには驚き慌てまして、紅矢の左の手に飛び付いて、一生懸命こじ明けようとはしましたが、どうして梃てこでも動かばこそ、かえつてだんだん強く握り締めるために、拳固が紫色から黒い色に変わって行きます。青眼先生はいよいよ驚き慌てまして――

「失策しまつた、失策しまつた」

と叫びながら、懐から鋭い小刀ナイフを出して、その腕を黒くなった処から切り落そうとしました。これを見た両親はいきなり青眼先生の腕を捕えて引き離しながら――

「ナ、何をするのです。何をするのです」と叫びました。

「エエ。お放し下さい。今切らなければ鉄になりますぞ。紅矢様は鉄になってしまいましたぞ。ハ……放して下さい」

「エエツ。鉄になる……」

と両親は肝を潰して、青眼先生を放しました。

先生は直ぐに紅矢の腕に取り付いて、二の腕の処に小刀ナイフを突き立てて、ギリギリと引きまわしましたが、何の役にも立ちませんでした。骨でも肉でも豆腐のように切れる鋭い小刀イフも、まるで鉛か銀のように和らかく曲がり折れて、疵痕きずあとさえ付ける事が出来ません。

その間まに見る見る紅矢の身体は腕から肩へ、肩から腕へと紫色が鈍染み渡って、やがて眼を怒らし、齒を喰い締めて虚空を掴んだまま、身体中真黒な鉄の塊となってしまうました。この恐ろしい不思議な死に態さまを見た紅矢の両親は、足の裏が床板に粘り付いたように身動き一つ出来ず、涙さえ一滴も落ちませんでした。

青眼先生も最早手の付けようもなく、紅矢の死骸を見詰めたまま、呆然ぼんやりと突立っていました。そうして独り言のように――

「からだ身体が鉄になる

身体が鉄になる。

見た事もない。

聞いた事もない。

悪魔のしわざ為業か。

鬼の悪戯か。

不思議。不思議。驚いた驚いた」

と云っておりました。

その中うちに東の空はほのぼのと明け渡つて、向うの庭の枯れ木立の間から眩しい旭ひの光りが、この室へやの中へ一パイに映し込みました。そうして大理石のように血の気が無くなつたまま立ち竦んでゐる三人の顔をサツと照しました。けれども三人は瞬またたき一つせ為ず、身動き一つ出来ず、只黒光りする鉄の死骸の、虚空を掴んだ恐ろしい姿を、穴の明く程見つめて立つていました。

するとはるか向うの丘の上に在る王宮の中から、美しい音楽の響ひびきが、身を切るような霜しも風もかぜに連れて吹き込んで来ました。それは今日宮中でこの国から選より抜いた、美しい賢い

少女のお目見得をするという、世にも珍らしい儀式が初まるその前知らせでした。

その時、二人の女中が来て室へやの入口で叮嚀ていれいに頭を下げました。その一人は静かな低い声で――

「濃紅姫のお支度が済みました。只今食堂で御待ちかねで御座います」

と申しました。ところが今一人はこれと反対に齒の根も合わぬような震え声で――

「美……美紅姫……が……お平常着ふだんぎのまま……寝台ねだいの中で……コ、コ、氷のように……冷たくなって……」

と云う内に床の上に座り込んでワツとばかりに泣き崩れました。

## 第三篇 宝蛇

## 十九 黄薔薇の籠

濃紅姫は昨夜夜通し、少しも眠る事が出来ませんでした。この頃自分のまわりに起つたいろいろな不思議な事や、恐ろしい事を考えながら、夜を明かしましたが、併しずっと奥の部屋に寝ていたので、その夜の中にどんな事が兄様や妹の身の上起こったかという事は、まるで知りませんでした。そうしていよいよ夜が明けますと、お附の者に扶けられて湯に這入って、すっかり身体を淨めてお化粧をしました。先ず髪毛には香雲木という木に咲いた花の油を注ぎ、白百合の露で顔を洗いました。身には袖の広い裾の長い白絹の着物を着て、上に黒狐の皮の外套を重ね、頭に碼瑙の冠を戴いて、手に黄薔薇の籠を持ちました。そうして足に鹿の鞣皮の細い靴を穿いて、いよいよ支度が出来上りまして、これから食堂で皆とお別れの食事を喰べて、それからお伴の女中と一所に馬車に乗つ

て、宮中に行くばかりとなりました。

するとこの時不意に化粧部屋の扉を開いて中に駆け込んで、驚く間もなく濃紅姫を抱き締めて――

「お前はどこにも遣らない。どこにも遣らない。死ぬまでこうやって抱いている」

と叫んだ人がありました。それは濃紅姫のお母様でした。

お母様は今朝二人の小供が、世にも恐ろしい不思議な死に方をしたのを眼の前に見て、狂気のようになつてしまつたのでした。そうしてたった一人あとに残つた濃紅姫を、どこにも遣るまいと思つて、こうして抱き締めたので御座います。けれども濃紅姫はそんな事は知りませんから吃驚びっくりしまして――

「アレ。お母様、どう遊ばしたので御座います」

と叫ぼうとしましたが、この時遅く彼の時早く、直ぐにあとから今度はお父様が駆け込んでお出でになりました。そうしてものをも云わずお母様から濃紅姫を無理に引き取つて、その手をぐんぐん引きながら表へ出まして、用意の出来ている白馬三頭立ての花で飾つた馬車へ乗せると、直ぐに馭者ぎよしやに向つて――

「さ。一時も早く王宮へ行け。濃紅。驚く事はない。訳はあとでわかる。それより早く王

宮へ行け。お前は紅木公爵の娘だ。決して意久地のない顔をするな。悲しい顔をするな」と叫びました。

馭者は心得て鞭を挙げて敬礼をしながら、手綱たづなを取ってしゃくりますと、馬車は忽ち王宮の方へと走り出しました。

その時狂気のようになったお母様が駈け付けまして――

「あれ、濃紅姫。行つてはいけない」

と追い縋すがろうとしました。馬車の窓からも濃紅姫が顔を出して――

「お父様。お母様」

と叫びましたが、お母様の方を紅木大臣が抱き留とめる……濃紅姫の方は三匹の白馬に引かれて見る見るうちに遠く遠く小さくなつて、間もなく馬車のあとから湧き上る砂煙のために隠されてしまいました。

紅木大臣はいつの間にか気絶している公爵夫人をあとから駈け付けた女中に介抱させて、夫人の室へやに連れて行かせましたが、自身は只一人紅矢べにやの室へやに這入つて行きました。そこには青眼先生が鉄になつた紅矢の死骸と氷になつた美紅姫みべにの死骸とを二つ並べてじつと睨み詰めたまま、枯れ木のように突立っていました。



紅木大臣は静しずかにその傍わらわに歩み寄よつて、じつと二つの浅あましい死骸しかいの姿を見ておりましたが、やがて今まで堪こらえに堪こらえていた涙なみだが一時いつときに眼まなこに溢あふれて、両方の頬ほを流ながれては落ち、流ながれては落ちました――

「紅矢、美紅……お前達はどうしてそんな姿になったのだ。どんな罪を犯してそんな罰ばちを受けたのだ。お父様は今朝けさ濃紅姫が家を出る時、たった一目お前等二人に会わせてやりたかった。けれどももし濃紅姫がお前達の姿を見たらば、どんなにか驚おどくであろうと思つて、無理矢理に我慢をした。けれどもこの胸は張り裂けるようであつたぞ。許してくれ、濃紅姫。噫あゝ、妻よ。お前も辛あつかつたであろう。お前の云うのは尤もつともだ。紅矢は鉄てつになった。美紅は氷こおりになった。残のこるは濃紅只一人。どこへも遣つかりたくないのは尤もつともだ。遣つかりたくない遣つかりたくない。けれども遣つからねばならぬ。遣つかるならば両ふた親おやが附つき添そうて、腰元こしもとに供ともさせて、華やかに喜び勇ゆうんで遣つかりたかつた。けれどもそれも出来なかつた。身内の者が死ねば、その血筋ちぢんの者はその日いちじつ一日ひとよの間、宮中へ出でられないのがこの国の掟おきてだ。だから紅矢や美紅はまだ生きてゐる事ことにして、お前を宮中に出でそうと思つたが、そのために又却かえつて驚おどかして、悲かなしませて、涙なみだと一所いこに送おくり出した。

噫あゝ、兄あには鉄てつになつた。妹いもうとは氷こおりになつた。あとに残のこつたたった一人は、花はなで飾かざつた馬車ばしやに

乗つて女王になるために泣きながら王宮に行った。女王になるのが何の嬉しかろう。王宮が何で楽しかろう。ああ。ああ。俺は氣違ひになりそうだ」

その声は次第に高まつてしどろもどろに乱れて来ました。とうとう立つていられなくなつて、両手を顔に当てたまま床の上に泣き倒れましたが、間もなくよろよろと立ち上つて、「石神に祈ろう。石神に祈ろう。濃紅姫の無事を祈ろう」

と云いながら室へやをよろめき出て行きました。

あとに残つた青眼先生は、矢張り二ツの死骸を見つめたまま立っていました。けれども紅木大臣がこの室へやを出ると間もなく、有り合う椅子にドツカと腰を下して、腕を組み眼を閉じてじつと考え込みました。そうしてさも悲しそうに独り言を云いました。――

「噫。やつとわかつた。悪魔の逃げ途みちがやつとわかつた。悪魔はあの銀杏の樹から逃げ出したのだ。この間の夢は正夢であつた。美紅姫はたしかにあの夢を見たに違ひない。そして王様も御覧になつたに違ひない。

そうだ。王様は美紅姫と一所に悪魔に魅入られておいでになるのだ。否いや。事に依るとあの四つの悪魔が……王様の御姿を盗んで……」

青眼先生はここまで云つて来ますと、忽ちブルブルと身ぶるいをして屹きつと王宮の方を眺

めました。その顔は見る見る青褪めて、眉を釣り上げ唇を噛み締めました。

けれどもやがて何かに心付いた事でもあるのか、ホツと深いため息を吐いて、頭を低れて両方の拳を固く握り締めて申しました――

「そうだ。自分はどうしても王様の正体を探り出さねばおかぬ。恐れ多い事ながら、もし今の藍丸王様が本当の藍丸王様でなかったならば……自分は是非本当の藍丸王様を探し出して、それを守り立て、今の藍丸王様を退けねばならぬ。悪魔を退治してしまわなければならぬ。美紅姫のようにしてしまわずにはおかぬ。それにしても宝蛇……この家を咥つた宝蛇はどこへ行つたであろう。差し当り先ずこれから探り出さねばなるまい。

気の毒なのはこの家の人々だ。家中すつかり美紅姫に魅入つた悪魔のために咥われてしまった。そして私はそれを助ける事が出来なかつた。私の力が及ばぬとはいいながら二人までも死人を出してしまった。この家の人々は嘸私を怨んでおいでになるであろう。嘸頼み甲斐の無い奴と思つておいでになるであろう。

けれども仕方がない。その申訳をすればこの国の秘密をすつかり話して終わらなければならぬのだから。噫、この秘密……誰にも話す事の出来ないこの秘密。焼いて灰にしてあの銅の壺に入れた秘密。そしてそれを番するという、世にも六ヶしい私の秘密の役目。国

中の人間を皆殺しても、守らねばならぬ秘密の役目。何という不思議な六ヶしい役目であろう。噫、私は何故青い眼に生れたろう。青い髪毛と青い髯を持った男に生れたろう。最早他に青い毛を生やした青い眼玉の男は一人も居ないかしらん。居たら直ぐに、私はこの大切な秘密の役目を譲ってしまいたい。

そうして私は毒でも飲んで死んでしまいたい。

噫。藍丸の国の秘密は灰になった。美紅姫の心の秘密は氷になった。紅矢の拳固の秘密は鉄になった。私の役目の秘密は何になるであろうか。石か。木か。水か。土か。何でもよい。早く青い眼、青い髪の男に出会って、この秘密を譲って、この恐ろしい役目を忘れたい」

青眼先生の独り言の中には次第に不思議な言葉が、いくつもいくつも出て来ました。けれどもここまで云って来ました時、青眼先生は唇を閉じてじっと窓の外の遠い処を見ました。そこには絵のように美しい藍丸王の宮殿が見えて、そこから又もや最前よりもずっと賑やかな音楽の響が聞こえて来ました。これはいよいよお目見得の式がはじまるという前兆まえざしらせでした。

## 二十 海の女王

この日御目見得に來た女は都合六人ありました。その内四人は、東西南北の四ツの国から、一人宛ずつよ選り抜かれて集まった女で、皆各自の国の自慢の冬の風俗をしておりました。北の国の女は、美事なかわうそ獺の皮の外套を着ておりました。南の国の女は、水鳥の毛で織った上衣を着ておりました。東の国の女は、空色の絹の裾を長く引いておりました。そうして西の国の女は、夕陽のように輝やくひいろ緋色の肩掛けを床まで波打たせておりました。この四人は皆四つの国々の中で、一等利口な一等美しいお姫様でしたが、併し他の二人の美しさに比べますと、まるでお月様とすっぽん亀如程違つておりました。

他の二人はこへに濃紅姫と美留藻みるもでした。

濃紅姫は、最前家を出た時の通り白い着物の上に黒狐の外套を重ねて黄薔薇の花籠を手たに持つていましたが、その何となく悲し気な氣高い優しい姿は、他の四人の女達と一所に置くのも勿体ない位に思われました。けれども今一人はこれと違つて、大きなダイヤモンド金剛石の鈕ぼたんを着けた紫色の男の服にきやしや華奢な銀作りの劍を吊るして、頭かしらに冠かむつた紫色の帽子には白鳥の羽根を只一本挿さしていました。そうしてどうした訳か、その上衣の上から第一番目の

鈕は他の金剛石と違って一輪の大きな白薔薇を付けていましたが、それが又誠によく似合つて、眩しい位凛々しく華やかに見えました。

この珍らしいお目見得の式を見て来ていた国々の貴い人々は、皆二人の美しいのに驚いて、神様か人間かと怪しみまして、一体どこにこんな美しい姫君が居たのであろうと怪しみました。けれども又その中に、皆が怪しみ驚いたよりもずっと驚いて、世の中にこんな不思議な事が又とあろうかと、吾れと吾が眼を疑つていた人がありました。それは他でもない濃紅姫でした。

濃紅姫はこの時までまるで夢中でいたのです。お母様に抱き締められ、お父様に引き離されて王宮に来て、何が何やら解からず、泣く事も出来ずぼんやり立っていたのです。が、この男姿の少女を一目見ると、ハツとばかりに驚いて、思わず声を立てるところでした。そうしてこれは本当に夢ではあるまいか。美紅はどうしてここへ来ているのであろう。あの姿はどうしたのであろう。もしや妾の眼の迷いではあるまいかと思いましたが、併し眼の迷いでも何でもありませんでした。顔色は常よりも紅をさして、姿も男の着物こそ着ておれ、あの紫に渦卷いた髪の毛。あの屹と王様を見詰めている眼付。キリリと結んだ口もと。どうしても美紅にそっくり……これはどうした事であらう。他人の空似にしてはあ

まりよく似過ぎていると、呆れて穴の明く程その横顔を見ておりました。すると、この時その少女が、六人の中からズカズカと前に進み出て、王様の前に恐れ気もなく近寄りました。そうして帽子を取つて最敬礼をしますと、やがて銀の鈴を振るような声で挨拶を致しました。

「王様。<sup>わたし</sup>妾はこの国の南の海の底にある海の国の女王で御座います。この度の王様の御布告<sup>れ</sup>を家来の蟹奴<sup>かにめ</sup>から承りまして、御恥かしながら海の底から、はるばると御目見得に参つたもので御座います。妾はこれまで参りますのに、誰も従<sup>つ</sup>いて来る者が御座いませぬから、旅を致すのに都合のよいように、こんな男子<sup>おとこ</sup>の姿を致して参りました。こんな勝手な風采<sup>なり</sup>を致しまして、陸の大王様に御目見得に参りました失礼の程は、何卒<sup>どうぞ</sup>御許し下さいまし。そうして御目見得の印に持つて参りました、この宝石の少しばかりを御受け取め下されましたならば、妾はもとより海の底の国<sup>くにひと</sup>人も皆、王様の広い御心に対して、はるかに御礼を申し上げる事で御座いましょう」

と云いながら、懐中から海の藻の一掴みを出して高く捧げましたが、その中から大きな紫色の金剛石<sup>ダイヤモンド</sup>の光りが虹のように輝き出て、さしにも広い大広間中に照り渡りました。

集まっていた人たち皆、この有様に眼も心も奪われて、酔うたようになってしまいました

た。そしてその場でその少女はお后に定まりましたが、又濃紅姫の閑雅な美しさも藍丸王の御眼に留まって、王様のお付の中で一番位の高い宮女として宮中に置く事に定まり、又他の四人の女も王様のお側付となつて、直ぐにその日から御殿に留まる事になりました。けれども濃紅姫は自分がどんな役目をうけているか、自分の事を人々がどんなに評判をしているか、そんな事は少しも気にかける間がありませんでした。只一心に海の女王と名乗る少女の姿に見とれて、呆れに呆れておりました。ところがその中に不図濃紅姫は、恐ろしい事を思い出して、思わず身ぶるいをしました。「この少女はもしやあの、悪魔とかいうものではあるまいか。紅矢兄様は御病氣の時、悪魔が美紅に化けていると仰しやつた。あの悪魔がこの女王ではあるまいか。それでなくてももし美紅ならば、妾の前に来てあんなに平気でいられる筈はない。そしてもし美紅でもなく又悪魔でもないとするば、あのように、妾から声から髪の毛の縮れ工合まで、美紅に似ている筈はない。悪魔。悪魔。悪魔に違いない。美紅に化けて兄様に大怪我をさせて、今度は海の女王に化けてこの国の女王になり来たのか。事に依るとこの妾を咄うて、妾が女王になるのを邪魔しに来たのかも知れぬ。それに違いない。それに違いない。吁。妾の家はどうしてこんなに悪魔と縁が深いのであろう。何という執念深い悪魔であらう」



こう思うと濃紅姫は、今まで美しい妹そっくりの少女であった男姿の海の女王が、角を  
 生はやして口が耳まで裂けた悪魔の姿に見えて来て、恐ろしさの余り気が遠くなりそうにな  
 りました。そうしてその海の女王が、王様の傍近く進み寄って、女王の冠を戴いているの  
 を見ると、さしもの大広間が大勢の人々と共にぐるぐるとまわるように思われました。そ  
 してやがて皆の者が、一時に手を挙げ足を踏み鳴らして――

「陸の大王様万歳！」

「海の女王様万歳！」

と割れるように叫びますと、濃紅姫は思わず声を挙げて――

「海の女王は悪魔です」

と叫びましたが、可愛そうにその声は大勢の声に打ち消されてしまいました、それと一  
 所に濃紅姫は、あまりの恐ろしさに気絶して、床の上にたおれてしまいました。

## 二十一 死の夢

それから何日経ったか、何時間経ったか知りませぬが、濃紅姫は不ふ図と気がついて眼を開

いて見ますと、自分はいつの間にか、今まで見た事もない美しい室<sup>へや</sup>の真中に寝台<sup>ねだい</sup>を置いて、その上に白い布団に包<sup>くる</sup>まれて寝かされております。そうして頭の上に灯<sup>とも</sup>った絹張りの雪<sup>ほんぼ</sup>洞<sup>り</sup>から出る蒼白い光りで見ると、自分の左右には、御目見得の時に居た四人の女が宮女の姿をして、自分の介抱をしながら寝台の縁によりかかって、四人共いぎたなく睡<sup>ねむ</sup>つている様子です。

濃紅姫はまだ夢を見ている気で、又眼を閉じてスヤスヤと眠りました。するとこの時に寝台の蔭から一匹の蛇が宝石<sup>うろこ</sup>の鱗<sup>うろこ</sup>を光らせながらぬらぬらと這い上りました。そうしてスヤスヤと眠りに落ちてゐる姫の懐<sup>ふところ</sup>に這い込んで、玉のようにふくらんだ乳房の下を静かに吸い初めました。そうして間もなく腹一パイに血を吸いますと、口からポタポタと吐き出しましたが、その血は皆燃え立つような紅玉<sup>ルビー</sup>になって、サラサラと濃紅姫の胸から寝床や床の上に転がり落ちました。こうして吸つては吐<sup>は</sup>いて、何度も繰り返す内に、濃紅姫の身<sup>からだ</sup>体<sup>た</sup>は、まるで宝石に埋まったようになってしまいました。

この時濃紅姫はスヤスヤと眠りながら不思議な夢を見ておりました。

その夢はいつか知らず濃紅姫が睡っている時に、どこか遠い遠い処で歌を謳<sup>うた</sup>う声が聞こえて来ました。その声は如何にも清く美しく、自分の妹の美紅姫の声によく似ておりま

したから、濃紅姫は不思議に思ひまして、どこで謳っているのであろうと、耳を聳こたてて聞いておきますと、その声はだんだん近くなつてつい直ぐ隣りの室で謳っているようで、しかもその歌は美紅姫が謳っているのでなく、この間紅矢兄様が王宮に差し上げた、あの赤い鳥の為業しわざだという事がわかりました。その歌はこうでした。

「扱さもあわれや濃紅姫。」

扱も悲しや濃紅姫。

親兄弟に生きわかれ、

又死にわかれ泣きわかれ。

花の冠戴かぶいて、

花の束をば手に持つて、

花で飾つて馬車の中、

身は生きながら葬とむらいの、

姿となつた濃紅姫。

藍丸国の王様を、

慕<sup>した</sup>う心の一すじに、

今日のお目見得来て見れば、

藍丸王のお后は、

自分でなくて妹の、

美紅か悪魔か海の魔か。

今王宮の奥深く、

ひとり静かに眠る時、

熱い涙が眼に湧いて、

右と左にハラハラと、

流れ落ちるは夢ながら、

夢ではないという証拠。

夢の中なる夢を見て、

夢とは知らぬ現にも、

つらい悲しいこの思い。

われから迷う身の行衛、

知っているのは世の中に、

赤い鸚鵡の他にない。

世に美しい柔順なしい、

女の中の女とも、

見ゆる濃紅が何故に、

王の后になれないか。

美紅か悪鬼か王様の、

后になつたは何者か。

知ってる者は他にない。

黒い海には波が立つ、

青い空には雲が湧く、

昔ながらの世の不思議、

今眼の前に現われた、

赤い鸚鵡の他にない」

濃紅姫はこの歌を聞きながらソロソロと起き上って、隣りの室<sup>へ</sup>の戸口に来て、なおも耳を澄ましていますと、たつた今まできこえていた鸚鵡の歌はピタリと止みまして、室<sup>へ</sup>の中に人の居る気はいも為<sup>し</sup>ませぬ。

そうして思いもかけぬ後<sup>うし</sup>ろから、そつと姫の肩に手をかけた者がありますから、ハツとしてふりかえって見ますと、それは懐かしい藍丸王でありました。王は親切に姫の手を執<sup>と</sup>つて――

「お前はもうすつかり気分はよいのか。昨日<sup>きのう</sup>の朝お前が気絶した時、俺<sup>わし</sup>は随分心配したが、最早すつかり治つたのか。それは何より嬉しい事だ。では最早<sup>もう</sup>夜が明けたから二人で花園に散歩に行こうではないか」

と仰せられます。濃紅姫は不思議に思つて、今は冬で御座いますから何の花も御座いますまいと申しますと、王様は御笑いになつて、まあ来て見るがいいと無理に姫を花園に連

れておいでになりました。

来て見るとこれは不思議——春秋の花が一時に咲き揃って、露に濡れ旭あきひに輝やいていますから、濃紅姫は呆れてしまつて、恍惚うっとりと見とれていますと、王様はニコニコお笑いに  
なりながら——

「どうだ、濃紅姫。俺わしが咲かせようと思えば花はいつでもこの通りに咲くのだ。併しお前に聞いて見るが、お前はどの沢山ある花の中で、どの花が一番好きなのか。赤か。青か。黄色か。それとも白か。黒か」

とお尋ねになりました。

濃紅姫は暫く返事に困つて考えていましたが、やがて悲し気に低頭うなだれて——

「妾はもとは桃色の花が大好きで御座いましたが、今は青いのが大好きになりました」

とこう御返事を申し上げました。すると王様は暫くの間何のお言葉もなく、棒のように突立つておいでになる様子ですから不思議に思つて、姫はヒョイとお顔を見上げますと、こは如何に。王の顔はいつの間にか恐ろしい青鬼の顔に変わっていました。

姫は気絶する程驚いて、そのままあとも見返らずに、夢中で王宮を走り出て自分の家うちに逃げ帰りましたが、門を這入るとほつと一息安心すると一所に、急に淋しく悲しくなりま

した。そうして早くお父様やお母様に会おうと思つて、家中を探しましたが、家は只一日しか留守にしないのに、ガランとした空家になつて、庭には草が茫々と生い茂り、池の水も涸れてしまつて、まるで様子が變つています。濃紅姫はこの有様を見て、何だかもう堪らない程悲しくなつて来て、思わずそこに泣き倒れようと思つたと、不意にうしろから兄様の紅矢が来て抱き止めて、何をそんなに泣いているのだと尋ねました。姫は嬉しさの余り紅矢に獅噛み付いて――

「あツ。お兄様。お父さまやお母様やそれからあの美紅はどこに居ますか」

と聞きました。すると紅矢はニコニコ笑いながら――

「妹は兄さんのお使いで今一寸他所よそへ行つてゐる。それから御両親は今遠い処へお出でになつてゐるが、そこを知つてゐるのはあの『瞬』だけだ。丁度今『瞬』は門の前の馬車に繋いであるから、あれに乗つて行つたら会えるだろう」

と申しました。姫は直ぐにその氣になりました、急いで門の前に引き返して見ますと、兄様の言葉の通り、「瞬」が馬車を引っぱつて、そこにちゃんと待つていましたから、直ぐに飛び乗つて手綱を取り上げて、鞭を高く鳴らしました。

馬車は野を越え川を渡つて、山を乗り越し谷を飛び渡りながら、北の方へ流星のように



走りましたが、やがて涯はてもなく広い砂原へ来ますと、轍わだちが砂の中へ沈んで一步も進まなくなりましたから、今度は馬車を乗り棄すてて徒歩かちで行きました。やがて四方には何も見えず、只砂の山と雲の峰ばかり見える処に出来ました。そこには山のように大きな石で出来た男が寝ねていまして、濃紅姫を見るとむっくりと起き上あつて、見かけに似合あわぬ細い優しい声で――

「お前さんはこんな処へ何しに来たのだ。どこから来てどこへ行くのだ」

と尋ねました。姫はこの石男のあまり大きいのに吃驚びつくりして、暫くは返事も何も出来ませんでした。併し別に悪い者でもなさそうですから、今までの自分の身の上をすっかり話して、何卒どうぞお父さまやお母様に会あわして下さいと頼たのみました。石男は濃紅姫の身の上話を聞ききますと、どうした訳か解わかりませんが大層歎なげき悲かなしみました。そうして吾れと自分の頭の毛を搔かきむしつて――

「呸あゝ。皆俺みんなが悪いのだ」

と泣きながら水晶の玉を眼からぼろぼろと落おちしていましたが、やがて気を取り直ただして、濃紅姫に向むつて親切しんせつに――

「噫あゝ、お嬢様。貴女あなたがそんなに非道ひどい目にお会いになるのは、皆私みなが悪いからで御座いま

す。何卒御勘弁なすつて下さいまし。けれども今更どうする事も出来ませぬから、その代り貴女に御両親のおいでになる処を教えてあげましょう。そこへ行つて貴女は今までの苦労をすっかり忘れて、楽しく眠つておいでなさい。決して眼を覚ましてはいけませんよ。眼を覚ますと貴女は又、あの恐ろしい藍丸王や海の女王の処に帰つて、悲しい目を見なければなりませんから、そのおつもりでいらつしやい。貴女はこれから真直に北の方へ、どこまでも歩いてお出でなさい。そうすれば決定<sup>きつと</sup>そこで貴女の御両親にお会いなさるでしょう。左様なら。御機嫌よう。可愛い、可愛い濃紅姫」

と云うかと思うと、そのまま又もやゴロリと仰向け<sup>あおむ</sup>に引っくり返つて眠つてしまいました。た。

姫はこの石男に別れてから、その教えの通りに猶<sup>なほ</sup>ずんと北に向つて進んで行きますと、やがて日が暮れ初めた頃、向うに火に柱を吹き出している岩山と、その火の柱の光りに輝やいている一つの湖が見えて来ました。その火の柱の美しい事。まるで千も万もの火花を一時に連<sup>つづ</sup>けて打ち上げるようで、紅<sup>あか</sup>や青や黄色やその他種<sup>いづいろ</sup>々の火花が散り乱れて、大空に舞い昇<sup>あが</sup>つていましたが、不思議な事にはその轟<sup>ごうごう</sup>々と鳴る音をじつと聞いていますと、お父様の声のように思われるではありませんか。濃紅姫は嬉しくて堪らず、足の疲れ

も忘れてなおも進んで行きますと、やがて今度はどこからとなく懐かしいお母様の声が聞こえて来ました。姫は思わずその声の方に誘われて、その方へ迷って行きますと、やがて湖の岸まで来ましたが、その声はどうも湖の真中あたりから聞こえて来るようです。

姫は直ぐにザブザブと湖の中に這入って行きましたが、水は次第に深くなって、膝ひざから腰へ腰から胸へと届いて来ました。それでも構わずになおも進んで行きますと、姫はどうとうすっかり水の底へ沈んでしまいました。けれどもちつとも息苦しい事はなく、四方あたりは皆緑色になってしまつて、その中に火の山の光りが輝き落ちて、沢山の花の形になつて浮かんで、まるで花園のようになってしまいました。その中を押しわけ押しわけ行きますと、やがてその花園の真中に、お母さまが白い衣服きものを着て立つておいでになりました、姫を見ますと莞爾にっこりとお笑いになり、そのまま姫を軽々と抱き上げて、優しい手で髪を撫で上げながら――

「まあ、お前は今までどこへ行つていたの。これからお母さまに云わないで遊びに行つてはいけませんよ。さぞお腹が空いたでしょう。さ、お乳をお上り」と云いながら懐を開いて、乳房を出してお含ませになりました。

姫は身も心もいつの間にか、赤ん坊になつてしまつた心地がして、何だか悲しいような

嬉しいような気になりまして、涙が止め度なく流れましたが、やがてお母様の静かに御歌  
いになる子守歌を聞きながら、暖い乳房を含んで柔順おとなしく眠ってしまいました。

「牡丹ぼたんの花がひいらいた。

桜の花がひいらいた。

夢の中からひいらいた。

可愛いお眼々がひいらいた。

お太陽ひさま様がニコニコと、

お月様がニコニコと、

可愛いお眼元お口もと、

一所に笑つてニコニコと。

百合の花つぼが閉んだ。

お太陽ひさま様が沈んだ。

可愛いお眼々もうとうとと、

夢の中へと閉つぼんだ」

## 二十二 白木の寝台

翌る朝まだ夜が明け切らぬうちに王宮の表門が左右に開いて二人の騎兵が駈け出しましたが、門を出ると二ツにわかれて、一ツは青眼先生の方へ駈け出し、一ツは紅木大臣の家の方に飛んで行きました。

紅木大臣は昨日濃紅姫を送り出すと直ぐに門を固く鎖して、二人の小供の死骸を石神の部屋に移して、そこで公爵夫人と一所に一日一夜の間泣き明かしましたが、一方濃紅姫の事も気にかかって心配で堪りませぬ。最早お后になった知らせが来るか。最早王宮からお祝いの品物が届くかと待つておりましたが、とうとうその日一日は何の知らせもありません。紅木大臣は心配のあまり家来を町に出して人の噂を聞かせますと、お目見得に来た女は六人共、皆宮中に留つてゐるとの事で、詳しい事はよくわかりませぬ。その中にやがて翌る朝になつて、夜がやつと明けかかった時、紅木大臣は室の窓を開いて王宮の方を見ました。すると王宮の方から馬の蹄鉄の音が高く響いて来て、その一ツは青眼先生の家の方へ行き、一ツは自分の家の門の中へ駈け込んで、玄関の処でピタリと止まりました。紅木大臣はこれは屹度濃紅姫が后になったその知らせのための使いであらうと思つて、取り

次の者も待たずにツカツカと玄関に出て見ますと、案の定、背せいの高い騎兵が一人、見事な遅たくましい馬を控えて立っています。

その騎兵は紅木大臣を見るとハッと固くなつて敬礼をしました。そうしてはつきりとした言葉付で――

「女王様からのお言葉で紅木大臣へ直ぐ宮中にお出で下さるようにとの事で御座います」と申しました。

「何。濃紅女王様が俺わしに直ぐ来いと仰せられたか」

これを聞くと騎兵はキョトンと妙な顔をしました。

「イエ。女王様は濃紅という御名おんなでは御座いませぬ」

「エエツ。ナ、何という」

騎兵は紅木大臣のこう云つた声と見幕に驚いて震え上つて了しまいました。そうして六尺にあまる大きな身体からだをブルブルと戦おのかせて返事も出来ずにいますと、紅木大臣はつかつかと玄関の石段を降りて来て騎兵の胸倉をぐつと掴みました――

「ナ、何という……御名おんなだ」

「ウ……海の女王」

「どんなお方だ」

「美しい……お方」

「馬鹿者……それはわかっている。どんなお姿だ」

「紫の髪毛を垂らして」

「エエツ」

「銀の剣と……コ、金剛石の……」

「何ツ」

「オ……男の着物を召して……」

「悪魔だツ……」

と叫びながら紅木大臣は、騎兵を突き飛ばして奥へ駆け込みました。そうして何事と驚く家の者には一言も云わず、剣を腰に吊るして外套を着て帽子を冠るが早いか、廐へ行つて馬を引き出して鞍も置かずに飛び乗りますと、イキナリ馬の横腹を破れる程蹴付けました。

馬は驚いて狂気きちがいのようになつて、一足飛びに飛び出しましたが、いつ迄も往來に出ずに同じ処ばかりぐるぐるまわっていますから、紅木大臣は自烈度じれつたがつて――

「エエ。何をしているのだッ」

と叫びましたが、見ると馬はいつの間にか、紅木大臣の屋敷の中にある、大きな丸い馬場の中に駈け込んで、死に物狂いに駆けまわっています。紅木大臣は齒噛みをして――

「エエッ。この畜生ッ。表門へ出るのだッ」

と罵りながら、馬をキリキリ引きまわして、花園も芝生も一飛びに、表門に飛び出しましたが、その時はもう最前の騎兵は疾くとつに王宮に帰り着いている頃でした。

紅木大臣は王宮の表門を這入ると、一直線に玄関まで乗り付けて、馬からヒラリと飛び降りましたが、帽子はいつの間にか吹き飛んで了しまっていました。そうして取り次の者も待たずに勝手知った奥の方へズンズン這入って行きますと、今日は平生いっもと違つて王宮の中はどの廊下もどの廊下も鎧を着た兵士が立っていて、皆鞆さやを払った鎗やりや刀を提ひっさげて、奥の方を一心に見詰めながら、素破すわといわば駈け出しそうにしています。けれども紅木大臣はそんなものには眼もくれず、つかつかと奥へ進み入って、王様のお居間に参りましたが、ここには只玉座ばかりで王も女王もおいでになりませぬ。そうしてずっと向うの腰元の室へやから、思いがけない青眼先生の慌てた声で――

「女王様。お気を静かに。お気を静かに」



と云うのが聞こえましたから、扱さはと思つてその方に急さぎました。

ところが腰元部屋の入り口に来て中を一眠見るや否や、紅木大臣は身体からだ中の筋が一時に硬こわばつて、そのまま床から生はえた石像のように突立ちながら、中の様子を睨み詰めめました。

室へやの真中には綺麗な白木の寝台があつて、その上には絹張りの雪洞ぼんぼりが釣りしてあります。寝台の上には死人があると見えて、白い布きれが覆せてあり、寝台の四隅の足には四人の宮女と見える女が髪をふり乱して気絶したまま、グルグル巻きに縛り付けてあります。寝台の向うにこちら向きに椅子を置いて、腕を組んで、眼を閉じて座っているのは藍丸王で、寝台の前には青眼先生が突立つて、両手をさし展のべています。そしてその手に縫すつて、青眼先生の顔を見上げている、女王の姿をした者の顔を見ると、どうでしょう。一晩夜おとといの晩氷になつてたつた今まで石神の前に置いてあつた、あの美紅姫みへにに寸分たが違ちがわぬではありませんか。

悪魔、悪魔と思ひ込んで来た紅木大臣も、これを見るとき更に、吾れと吾が眼を疑つて呼吸いきも出来ぬ位固かくなつてしまいました。そうして眼を皿ひらのようにして女王の姿を見詰めめていました。

女王は髪を藻のようにふり乱し、顔の色は真青になって、震える唇を噛み締め噛み締め、はふり落ちる涙を拭いもせず、青眼先生の顔をふり仰いでおりましたが、忽ち血を吐くような声をふり絞って叫びました――

「青眼先生。教えて下さい。これは夢でしょうか。本当でしょうか」

すると青眼先生は女王の顔を穴の開く程見ながら、落ち付いた力強い声で答えました――

「夢だか本当だかは女王様のお言葉に依つて定きまります。何卒、何事も包まずに、私にお話し下さいませ。私は只今王様からの御使者おつかいを受けまして、女王様が今朝濃紅姫けさこべにの御逝おかくれになった御姿を御覧になると直ぐに、恐れ多い事ながら気が御狂い遊ばして、あるにあらぬ奇妙な事ばかり仰せられるとの事。それで私の今までの罪を赦すから、直ぐに女王の病氣を見に来るようにとの、有り難い御言葉を承りまして、取るものも取り敢えず参まりた次第で御座います。ところが只今女王様の御姿を拝しますると、女王様は決してそんな忌いまわしい御病氣におなり遊ばしたのでは御座いませぬ。そして私はそれよりもずっと驚おどきましたのは、女王様がどうして生きてここにおいでになるかという事で御座います。何を  
お隠し申しましょう。昨日きのうの朝女王様がまだ美紅姫いで入らせられる時に、私はたしかに女

王様を殺しました。その女王様がここにこうして生きておいでになろうとは、私は夢にも存じませんで御座いました。何に致してもこれには何か深い仔細がある事と思ひます。私は、決して女王様の御言葉を御疑い申し上げませぬ。さあ、女王様。決して御心配には及びませぬ。女王様が、その石神の夢を御覧遊ばしてからどうなされましたか、詳しく御話し下されませ。石神の話はこの国の秘密の話で、これを聞いた者は、その話しの中に居る悪魔に取り憑かれると、昔から申し伝えて御座います。私は今日までその悪魔を固く封じておりましたが、それがいつの間にか逃れ出て、女王様に取り憑いたと見えます。こうなれば王様と女王様には、秘密に致す要も御座いませぬ。却つてその秘密を破つて、何も彼も御話し下されました方が悪魔を退治するのに都合がよろしゅう御座います。ここには仕合わせと王様と私より他に聞いているものは御座いませぬ。何卒御構いなく御話し下されませ。決定女王様の御心の迷いを晴らして、悪魔を退治で差し上げましょう」

と云いながらも女王の手をしっかりと握り締めました。女王は最早立っている力も無く床の上に顔折れました。そうして――

「ハイ。何卒聞いて下さい。そうしてよく考えて妾を助けて下さい」

と云いながら、涙を拭い拭い言葉を続けました――

「妾はあの夢を見てから後は、明け暮れ自分の室へやに閉じ籠もって、美留みるめ女姫であつた昔が本当か、今の美紅の身の上が本当か考えましたが、どうしても解りませんでした。そうしてこれが解からぬ内は、何をしても張り合いがないような気がして、誰に何と云われても何も為する気になりませんでした。紅矢……兄様のお怪我も……濃紅姉様の身の上も……何だか……夢のような気がしていたので御座います。

すると丁度そのお兄様がお怪我遊ばした日の事、妾は青眼先生がお出でになるという事を聞き、扉の隙間からソツと覗いていましたが、前をお通りになる先生の御姿を一目見るや否や、妾は扉をしっかりと閉じると、そのまま気絶してしまいました。青眼先生は妾の思い通り、あの夢の中で、妾を悪魔だといって殺そうとしたお方で御座いましたから、もし見付かつたらどうしようと思つたからで御座います。

それからどれ程位の間気絶したままでいましたものか、不図気が付いて見ますと、時分は丁度真夜中で、妾はいつの間にか戸棚の中に突立っています。そうして戸棚の扉の鳥の形をした透すかし彫ぼりが、丁度眼の前に見えます。

妾は暫くの間は何事かわからずに、ぼんやりと鳥の透し彫りから洩れて来るラムプの光りを見詰めたまま突立っております。もしやこれはまだ本当に眼が醒めずに、夢を見て

いるのではないかと思いました。ですから妾はよく心を落ち付けて、眼をしつかりと見開いて、鳥の透し彫りから覗いて見ました。そうして室の中に灯れている丸硝子の行燈の、薄黄色い光りで向うを見ますと、妾は自分の眼を疑わずにはおられませんでした。妾の寝台の上には、妾の寝巻を着た、妾そっくりの女が、平然妾がする通りに髪毛を寝台の左右に垂らして、スヤスヤと睡っているでは御座いませんか……ハツと驚いて自分の着物を探つて見ますと、どうでしょう。妾の着物はいつの間にか、奇妙な男の着物とかわつていたので御座います」

「貴女そっくりの女。そうして貴女は男の着物……」

と青眼先生は魘えたような声で申しました。

### 二十三 自分の寝姿

外に立っている紅木大臣も、この時両方の拳も砕けよと握り締めましたが、女王も亦恐ろしくて堪らぬように、身を震わして答えました——

「ハイ。昨日海の女王と名乗って、お眼見得に来た時の姿と同じ男の着物でした」

「してそれから貴女あなはどうなされましたか」

「妾はあまりの不思議に身動き一つ出来ず、自分の寝姿を見詰めていました。そしてその中うちにどちらが妾なのかわからなくなりました。妾が美紅みへにか、向うが美紅か。妾が美紅ならばあの眠っているのは誰であろう。睡っているのが美紅ならば、この醒めている妾は何者であろう。もしや妾が何かの魔法で、二人にされているのではあるまいか。それではなくてこんなによく肖にている筈はない。それとも身体からだが向うに残って、心がこちらにあるのであるまいか。それならばこの身体は誰の身体であろう。又は心が向うに幽霊になつて抜け出して現われているのであろうか。それならばこの心は誰の心であろう。どちらが本当であろう。どちらが嘘であろう。両方とも本当か。両方とも嘘か。向うとこちらは別か一所か。もしや眼の迷いではあるまいか。心の迷いではあるまいか。それとも夢かまぼろしかと、すっかり迷つてしまひまして、今にも太陽の光りがさし込んで来たらば、妾は消え失せてしまうのではないか。それでなくとも、このまま戸棚の外に出たならば、直ぐに眼が覚めるのではあるまいかと、迷つて、恐れて、震えて、立ち竦んでおりますと、不意に窓の外に人の来る気はいがしました。

妾はこの時何だか自分の身の上に、怖ろしい事が起りかかっているように思われて、恐

ろしきの余り呼吸を吐く事も出来ませんでした。そうして戸棚の中から一心に、窓の処を見つめておりますと、間もなく窓からそつと顔を出して中の様子を見た人がありました。それが青眼先生、貴方でした」

「あつ。それではあの時貴女は戸棚の中から見ておいでになりましたか」

と青眼先生は呼吸を機まかせて尋ねました。

「けれどもその時の恐ろしかった事。扱は青眼先生はいよいよ妾がこの家に居る事がおわかりになって、この間の夢の中で銀杏の葉の袋を切り破った時と同じように、妾を矢張り悪魔と思つて、殺しにおいでになつたに違いない。それにしても青眼先生は、あの寢床の中の美紅を妾と思つてお出でになるのであろうか。それとも妾がここに隠れているのを御存じなのであろうか。どちらを御殺しになるであろうと、息を殺して震えながら見ておりました」

「噫。私はあの時寢台の中の女を悪魔だと思ひ込んで殺したので御座いました。この国の秘密を守るため。王様のため。国のため」

と青眼先生は吾れを忘れて叫びました。

「ハイ。けれどもそれは大変な間違いで御座いました。貴方が悪魔と思つてお殺しになつ

た女は、悪魔でも何でも無い美紅姫で、かく云う妾こそ悪魔で御座いました。妾はその時から美紅姫では御座いませんでした」

「エ。エ。エ」

と青眼先生はよろよろとあと退りしげをして、屹きつと身構えをして女王の顔を穴の明く程見詰めめました——

「女王様。貴女は本当に気がお狂い遊ばしたので御座いますか」

「イエイエ。少しも狂いませぬ。又嘘も申しませぬ。妾こそ悪魔で御座いました。美紅姫にそっくりそのままの姿をした悪魔で御座いました」

「ウーム」

と青眼先生が両方の手を石のように握り固めながら、女王の顔を睨み詰めますと、室へやの外の外の紅木大臣も、思わず刀の柄に手をかけて身構えました。けれども女王は騒ぎませんでした。落ち付いて床の上に座ったまま、青眼先生の顔を仰いで話しを続けました——

「御ごもつと疑いになるのも御尤もで御座います。本当は妾もまだその時の疑いが晴れませぬ。

ですからこのように打ち明けてお話しをするので御座います。本当の事を申しますと、妾はあの時貴方にあの毒薬を注ぎかけられて、氷になつてしまった方が仕合わせで御座いま



した。なまじいに生き残つたために、妾は悪魔に魅入られた女になってしまいました。

あの時あの少女が悪魔と呼ばれて眼をさまして、『妾は美紅です。この家の娘です』と叫ぶ間もなく、青眼先生から毒薬を注ぎかけられてたおれました時、妾は自分の身体からだの血が凍つたように思つて、心も身体からだも一所に消え失せたと思いました。けれども間もなく又ふつと気が付きますと、不思議やその時妾の心は、今までとすっかり違つて、世にも恐ろしい女の心と入れかわつておりました。妾はその時から今朝けさまで、美紅姫でも何でもありません——多留美という湖の近くに住む、藻取という者の娘で、美留藻みるもという女——美紅姫と同じように夢の中で美留女姫となつて、白髪小僧と一所に銀杏の葉に書いた石神のお話を讀んだ女——湖の底に鏡を取りに行つたまま、行衛ゆくえ知れずになつた女そのままの美留藻になつておりました。そしてそれと一所に、妾はたつた今まで美紅姫であつた事を忘れてしまつて、貴方が美紅姫の死骸を残して、窓から出てお出でになると直ぐに、戸棚の扉を開いて外に出まして、眼の前の寝台の上に横たわつている、美紅姫の氷の死骸を見ると、思わず莞爾にっこりと笑いました。そして先ずこれで美紅は死んだ。あとは明日あすのお眼見得の式で濃紅姫に勝ちさえすれば、妾は間違いなく女王になれると思ひました。

青眼先生。妾は全く恐ろしい女で御座いました。悪魔よりももつと無慈悲な女で御座い

ました。初め妾が夢の中で美留女でいる時に、銀杏の根元で拾った書物かきものに、妾が女王になつた挿し絵があるのを見ますと、妾は急に女王になりたくありません。それと一所に石神のお話の続きも見とう御座いました。つまり夢の中で見た美留女姫の心を、眼が覚めてからも忘れる事が出来なかつたので御座います。そうして眼が覚めて後赤い鸚鵡のちだの、宝蛇だの、水底みずそこの鏡だのを見ますと、いよいよあの夢は本当の事に違いないと思ひまして、どんな事をして構わないから、あの夢の通りに自分の身の上をして仕舞おうと思ひました。それから妾は親を棄て、夫を捨てて只一人、女王になるために都に向いました。

妾はそれから女王になるためにいろいろな悪い事を致しました。

青眼先生。この間紅矢様が大怪我をなすつた時、初めに先生が御覧になつた紅矢様は、本当の紅矢様では御座いませぬ。妾が紅矢様の馬と着物を詐欺かたり取つて、紅矢様に化けて来ていたので御座います。それから二度目の時は、妾が『瞬』に乗つて、紅矢様のお帰りに途に押しかけて、出会い頭に馬を乗りかけて怪我をさせましたので、妾はその死骸を先生の御門の処まで持つて来て、放り出して逃げて行つたので御座います。

妾はそれから又もや紅木大臣のお邸敷やしきへ、騒ぎに紛れて忍び入つて、美紅姫の室へやに這入りました。見ると美紅姫はどうした訳か、氣絶して床の上に倒れたまま、誰も氣付かずに

おります。妾はよい都合と喜びまして、兼ねてから髪毛かみの中に隠しておいた宝蛇を、美紅姫の懐に押し込みました。これが今のように、美紅と美留藻と一所になってわからなくなるはじめとは、その時夢にも思い当りませんでした。

宝蛇が美紅姫の胸から血を吸い初めますと、不思議や妾は自分の身体からだの血が消え失せるように思いまして、急に眼が眩んで立っている事が出来ずに、床の上にたおれました。

妾はその時夢中になつて藻搔もかきました。そして自分が宝蛇に噛まれて血を吸われていると思ひましたから、一生懸命になつて自分の胸を搔きまわして、掴み散らしますと、やがて急に胸の苦しみが除とれてしまひましたから、ほつと一息安心をしまひました。が、それと一所にやつと正気になりましたから、眼を開あいてあたりを見まわしますと……どうでしょう。最前お話ししました時とは反対に、妾はいつの間にか美紅姫が今まで着ていた寝巻と着かえて、片手に宝蛇をしっかりと握つて床の上に寝ております。そして直ぐ傍には妾そっくりの男の姿をした女が、あおむけにたおれているでは御座いませぬか。妾は驚きの余り思わず立ち上りました。するとそれと一所に妾の懐から一掴みの紅玉ルビーの粒がバラバラと床の上に落ちました。

その時の妾の心地——それは最前妾が美紅としてお話し致しました時と少しもかわりま

せぬ。全く妾は美紅か美留藻か自分でわからなくなりました。妾が誰を殺そうと思つて宝蛇に血を吸わせたのか、それすらわからなくなりました。今の様子では自分を殺すために自分の胸に宝蛇の牙きばを当てがつたとしか思われませぬ。妾はあまりの不思議にぼんやりとして、眼の前に横たわつている男の姿の自分そっくりの娘を見詰めたまま突立つておりました。

けれども暫くしてから、妾はやつと気を落ち付けて考える事が出来ました。これは屹度悪魔の仕業に違いない。何故かと云えば、美紅姫も妾も二人共同夢を見て、同じ悪魔の話聞いたに違いないのだから、二人共悪魔に魅入られているにきまつている。そうして鏡だの、蛇だの、鸚鵡だのを妾の方が先に見たから、悪魔が妾の方に加勢して、妾に知恵を授けているのに違いない。妾に美紅姫に化けよと教えるのに違いない。屹度そうだと思ひますと、妾は最早もはやすっかり疑いが晴れました。妾は矢張やっぱり美留藻であつた。行く末は、この国の女王になる美留藻であつた。こう思つて妾は最早もはや女王になつたように喜び勇みました。そうして直ぐにたおれている美紅姫の懐を探つて、兼ねてから隠しておきました青眼先生の眠り薬を取り出して、美紅姫に嗅がせまして、そのまま戸棚の中に押し隠しました。こうして妾はいよいよお目見得の式の朝になつた時、着物を取り換えて自分の代りに本当

の美紅姫を寝台ねだいに寝せて逃げて行くつもりでした。そして昼の間は妾は室へやに閉じ籠もつて、成るだけ家の人にも姿を見せぬようにして、真夜中になつてから起き上つて、薬のために眠つている美紅姫の着物と着換えては、窓から飛び出して悪い事を致しました。

妾はこの時自分で自分の智慧に感心をしておりました。こうすれば妾はいつ家うちの人に見み咎とがめられても美紅としか見えませぬ。けれども一番おしまいの晩にとうとう貴方——青眼先生に見付けられてしまいました。

あの時妾は、紅矢様を苦しめに行きましたが、折角歌で誘い出した貴方が、引き返してお出でになる様子ですから、急いで自分の室に帰ろうとしましたが、その時妾があまり急いで紅矢様の身体からだから蛇を引き放しましたために、紅矢様は眼をさまして、妾を見るといきなり飛び付いて、左手で妾の胸の鈕を掴みました。今でも紅矢様の掌ての中には一ツの大きな金剛石ダイヤモントを握つておいでになるに違いありません。妾はそれを振り千切つて逃げて帰つて、知らぬ顔をして寝ておりました。それを貴方に見付けられたので御座います。妾が貴方から氷の薬を注ぎかけられました時、妾はもう助からぬと思ひました。けれども一旦氣絶して、たおれて又気が付きますと、どうでしょう、妾はいつの間にか戸棚の中に、男の服を着て立つていたので御座います。

この時もし妾に今までの美紅の心が少しでも残っていたらば、妾は女王にはならなかつたで御座いましょう。こんな恐ろしい悲しい思いを為せずとも済んだで御座いましょう。けれどもこの時は妾はすっかり美留藻の心になり切つておりましたから、少しも疑わず恐れずに、美留藻そのままの仕事を続けました。

妾はこの時美紅姫と紅矢様が、鉄と氷の二ツの死骸になつてしまつたのを見て、すっかり安心をしまして、この塩梅ならば紅木大臣を初め家の者は明日あすのお目見得に來ないであろう。そうすれば自分を見咎めるものは一人もあるまいから、安心して女王になる事が出来る。それからあとは青眼先生——貴方をどうかして罪に落して亡ない者にし、又濃紅姫を無理にも宮中に止めて殺してしまえば、あとは一生安心と、こう思つて紅木大臣の家を脱け出しました。そうして大急ぎで宮中に駆け付けて、お眼見得の式に間に合いました。そのあとは御存じの通り首尾よく女王になり済まして、濃紅姫を宮女にしました。そうして……  
…そうして……

と云う中うちに女王は急に床の上に突伏してワツとばかりに泣き出しました。

今まで固くなつて身構えをしていた青眼先生は、これを見ると慌ひやますてて跪ひざまずいて、女王の手を取つて引き起しました。そうして声を震わせながら——

「お泣き遊ばしてはわかりませぬ。それから……それからどうなされました」  
と女王の顔を覗き込んで尋ねました。

するとこの時女王は急によろよると立ち上りましたが、忽ち身を寝台の上に投げかけて泣き叫びました――

「許して下さい、お姉様。貴女を殺したのは四人の女では御座いませぬ。妾で御座います。美留藻の美紅で御座います。昨夜まで美留藻であった妾は貴女が憎くて堪らずに、宝蛇を使つて貴女の血を吸わせました。そうして……そうして……今朝……紅玉に埋まつた貴女を見た時……その時の悲しさ恐ろしさ……。噫。妾は美留藻でしょうか。美紅でしょうか。噫。お父様。お母様。許して下さい。妾は兄様を殺し……姉様を殺しました。そうして妾は何故……何故死なぬのでしょうか。噫、恐ろしい。情ない。死にたい死にたい。お姉様と一所に死にたい」

と死骸に縋り付いて、消え入らんばかりに泣き狂うて叫びました。

これを見た青眼先生の眼からは、忽ち涙がハラハラと溢れ落ちました。そうして慌てて走り寄つて、女王を抱き除けながら――

「女王様。気をお静かに。お静かに。女王様は美紅姫で入らせられます。今は御心も御身

体も、美紅姫で入らせられます。貴女のお家に災を致しましたのは……お兄様やお姉様を殺しましたのは、今氷になつてゐるあの美留藻の魂が、貴女に乗り移つて為した事……」

と申しましたが、その言葉のまだ終るか終らぬかに、雷が落ちたような声を立ててこの室に飛び込んで来て、二人を左右に突き飛ばした者がありました。それは紅木大臣でした。それと見ると女王はよろめき倒れた身を起して――

「あれ。お父様」

と一声高く叫びながら駆け寄ろうとしましたが、紅木大臣の見幕があまり恐ろしいので、思わずハツと踏み止まりました。そうしてワナワナ震えながら――

「才……お父様……お父……様……」

と云う中に次第にあと退りをして、一方の壁に倚りかかつて身体を支えました。青眼先生も紅木大臣の見幕に驚いて、床の上に尻餅を突いたまま、呆氣に取られて大臣の顔を見詰めておりました。

紅木大臣はその間につかつかと寝台に近寄つて、白布を取り除けました。その下には髪毛から首のあたり――胸から爪先へかけて、一面に紅玉に包まれて、臘のように血の気を失つた濃紅姫の死骸が仰向けに横たわつております。



それをじつと見ていた紅木大臣の髪毛は、見る見る中に皆逆さに立ちました。顔色は真青になって、眼は火のように血走りました。そうして齒をギリギリと噛み鳴らし、身体をワナワナと震わせながら、劍の柄を砕くるばかりに握り締めて、屹と女王の顔を睨み付けましたが、やがて火を吐くような声で罵りました。

「悪魔。悪魔。貴様は美紅ではない。女王ではない。又美留藻とかいう者でも何でもありません。美紅を身代りとして青眼先生に殺させ、その次には紅矢を殺し、今は又この濃紅を殺して、この国の女王の位を奪おうとする悪魔。悪魔。大悪魔だ。根も葉もない作り事をして、美紅に化けて欺こうとしても、この紅木大臣は欺されぬぞ。その化けの皮を引ん剥いてくれる。吾が児の讐覚悟しろ」

その声は暴風のように室の中を渦巻きました。

そうして一步退つてガラリと劍を引き抜いたと思うと、女王に飛びかかろうとしましたが、彼の時早くこの時遅く、青眼先生がうしろからしっかりと抱き止めました。すると紅木大臣は齒噛みをして――

「エエツ、放せ。放さぬか。貴様も悪魔の片割れか。今まで悪魔と馴れ合っていたのか。放せ。放せ。奴レツ」

と身もだえをするその手に女王は走りかかって縋り付きました。そうしてその顔を見上げながら叫びました――

「殺して下さい。お父様。妾は……もう……この上の苦しみは見られませぬ。生きては……生きてはおられませぬ。この剣で……さあ一思いに殺して下さい。姉様と一所に死なして下さい。青眼先生、放して下さい。この手を……お父様を放して下さい」

と無理に青眼先生の手を捕まえて引き離そうとしました。紅木大臣はこの時あらん限りの力を出して――

「エエツ」

と一声叫ぶと一所に二人を両方に振り放しました。そうしてなおも縋り付こうとする二人を、又も左右に蹴倒しますと、二人共一時に気絶してグタリと床の上に横たわりました。この時前から椅子に腰を掛けたままこの場の様子を冷やかに笑って見ておりました藍丸王は、<sup>すつく</sup>轟とばかり立ち上りましたが、その右手を高く挙げたのを見ると、一匹の恐ろしい姿をした蛇が、寶石の鱗を眩しい程光らせながら、真赤な舌をペロペロと吐いて巻き付いておりました。こうして王は高らかに叫びました――

「紅木大臣。よく見よ、よく聞けよ。この蛇はこの国の大切な宝だ。誰でもこの蛇を持つ

て来た者はこの国の女王になるのだ。美紅であろうが美留藻であろうが、そんな事は構わぬのだ。そうして女王に害をする者は、皆殺して終うのがこの蛇の役目だ。貴様とても許さぬぞ」

「何を……何をツ」

と紅木大臣は血走った眼で王を睨み付けて叫びました――

「それならば貴様も悪魔だ。本当の藍丸王ならば、そんな汚<sup>けが</sup>らしいものをお持ちになる筈はない。そんな無慈悲な事をなさる筈はない。貴様も悪魔が化けたのであろう。女王も悪魔。貴様も悪魔。悪魔。悪魔。大悪魔だ。エエ知らなんだ。気付かなんだ。そうと知つたら早く退治しておく者を。最早容赦はならぬ。この紅木大臣が忠義の刃を受けて見よ」

と云うより早く王を眼がけて飛びかかろうとしましたが、この時王が右手を挙げるのを見るや否や、一時にドツと籠<sup>こ</sup>み入った多くの兵士は、一方は王の周囲<sup>まわり</sup>を取り囲んで仕舞い、一方は紅木大臣を取り巻いて身体中隙間もなく鎗<sup>やり</sup>を突き付けて、動かれぬようにしてしまいました。そうしてその間にその他の者は気絶した女王と青眼先生を抱え上げて、急いでどこかの室<sup>へや</sup>へ運んで行きました。

槍の穂先に取り囲まれた紅木大臣は、身動きも出来ぬようになりまして、棒のように突

立ちながら齒切りはぎしをして、兵士の顔を睨みまわしていましたが、やがてその持つていた剣をカラリと床の上に取り落すと、そのまま高い暗い天井を仰いで、髪毛を一筋毎ごとにビリビリと震わしながら――

「アーツハツハツハツ」

と高らかに笑い出しました。その気味悪さ。恐ろしさ。周囲まわりの兵士は思わず槍やりを手許てもとに控えて、タジタジとあと退りすこをしました。

けれども紅木大臣の笑い声は、なおも高らかに続きました――

「アツハツハツハツ。可笑おかしい可笑おかしい。こんな可笑おかしい事が又とあろうか。何という馬鹿馬鹿しい事だ。アツハツハツハツ、俺は今やつと思ひ出した。昔の名前を思ひ出した。俺の名前は美留楼公爵みろろうというのだった。何だ、馬鹿馬鹿しい、馬鹿馬鹿しい。馬鹿馬鹿しい。アツハツハツ。」

あれ、美留女が本を読んでいる。白髪小僧が居眠っている。アハ。アハ。何の事だ。俺はこのお話を本当の事かと思つた。これ、美留女。止める。止める。そんな本を読むのを止める。あんまり非道ひどいではないか。あんまり情ないではないか。お前はそれを平気で読むのか。お父さまは最早も聞いていられない。コレ。止める。止めると云うに「

と云いながらよろよろと前の方によるめき出しましたが、濃紅姫の寢台ねだいに行き当って、又ハツと気が付きました。そうして寢台に倒れかかったままじつと濃紅姫の死体を見ていましたが、見る見るその眼は又旧もとの通りに釣り上りました。

「エエツ。矢張り本当の事であつたか。濃紅姫は死んだのであつたか。よしそれならばこうして……」

と云う中うちに自分の外套を脱いで、濃紅姫の死体をクルクルと巻いたと思うと、肩かたに荷かぐが早いか一散へやにこの室を走り出しました。これを見ると火のように怒った藍丸王はそのあとから叫びました――

「ソレツ。あの家の者を塵みながろしにしてしまえ。あとは火を放つけて焼いてしまえ」

#### 二十四 生首の言葉

一方青眼先生は、一旦いったんはすっかり気絶して終しまって、何も解からなくなっていました。やがて自然と気が付いて見ますと、どうでしょう。最前自分は藍丸王の眼の前で、紅木大臣に蹴けられて気絶していた筈なのに、今は王宮の内のどこかの室へやで、見事な寢台ねだいの上に寝

かされて、傍には最前縛られていた四人の宮女が控えております。そうしてなおよくあたりを見まわしますと、自分の枕元には藍丸王がニコニコ笑いながら立って立って立って、その背後には宮中の凡ての役人が星のように居並んで、自分に向って敬礼をしている様子です。青眼先生はこの有様を見て何事かと驚きまして、慌てて寝台の上から<sup>すべ</sup>降りて床の上にひれ伏しますと、王はその肩に手を置きまして、

「オオそんなに恐れ入るには及ばぬ。俺は今までのお前の罪を許したのだぞ」

これを聞くと青眼先生は床の上にひれ伏して、恐れ入って申しました――

「ハイ。有り難い事で御座います。私はもうその御言葉を承りました以上は明日<sup>あす</sup>死んでも少しも心残りは御座いませぬ。私の心がおわかり遊ばしますれば、何で私が王様の御心<sup>みこころ</sup>に背き奉りましょう。何卒<sup>どつぞ</sup>今日までの私の無礼の罪は、平に御赦し下されますよう御願<sup>ごんげん</sup>い致します」

と誠意<sup>まごころ</sup>を籠めて<sup>こ</sup>申しました。藍丸王も如何にも嬉しそうに――

「ウム。お前の罪は女王の言葉ですっかり許したから安心をしる。女王は今居間で養生をしている。そうして世界中で本当の自分を知っている者はお前ばかりだと喜んで泣いているのだ。そうして今日お前の女王に尽した忠義の褒美<sup>ほうび</sup>に、女王は今からお前をこの国の総

理大臣にしてくれと云ったぞ」

と思ひもかけぬ御言葉です。青眼先生はあまりの不意な御言葉に驚いて、夢に夢見る心地で叫びました――

「エツ。私をあゝの総理大臣に。そ……それは王様、私のようなものには」

「黙れ。もう俺わしの云う事には背かぬと、たつた今云つたではないか。この心得違めい者奴が。貴様も矢張り紅木大臣のような眼に会いたいのか」

と忽たちまち王は最前のような恐ろしい顔に変わりました。

「エエツ。そして紅木大臣はどう致しましたか」

「ハハハハハ。紅木大臣がどんなになつたか見たいのか。よし。それではお前は直ぐ紅木大臣の家へ行つて、どんなになつたか見て来い。そうして女王に無礼をする奴は親でも兄弟でも誰でも皆、こんな眼に会うのだという事をよく覚えて来い」

と言葉厳しく申し付けました。

このお言葉を聞くと一緒に青眼先生は、王が最前蛇を見せた時の事を思い出して、思わずゾツと身震いをしました。そうして直ぐに独りで王宮を出まして、急いで紅木大臣の家へ行つて見ましたが、来て見るとどうでしょう。今まで深く茂つた大きな常磐ときわぎ木の森の間

に、王宮と向い合つて立つていた紅木大臣の邸宅は住居も床も立ち並んだ焼木杭の間から、白い烟が立ち昇っているではありませんか。そうして玄關のあたりに大臣夫婦は手も足も切り離されて、方々焼け焦げたまま、眼も当てられぬ姿になつて倒れております。

青眼先生は震える手で、その手足を集めて見ましたが、最早何の役にも立ちませんでした。大臣夫婦の死体は最早切れ切れに焼け爛れて、とても青眼先生の力では助ける事が出来ませんでした。

青眼先生は余りの事に声を立てて泣き出しました。そうしてもしや一ツでもいいから助かりそうな死骸は無いかと、暗の中に散らばっている死骸を一ツ一ツに検めながら、奥の方へ来る中に、不図青眼先生は屋敷の真中あたりで、切れるように冷たい者を探り当てて、ヒヤリとしながら手を引き退めました。それは鉄と氷との二ツの死骸でしたが、薄い月の光りはその物凄い白と黒の二ツの姿を照して、何だか両方とも青眼先生を睨んでいるように思わせました。

青眼先生は思わずタジタジとあと退りをしました。そうして二ツの死骸をじつと見入りました。すると不思議や、青眼先生の直ぐうしろに寝ていた一ツの首が、白い眼を開いて



月の光りを見ながら、唇をムズムズと動かし始めましたが、やがて不意に――

「嘘吐き」

と云いました。青眼先生はハツと驚いて背後うしろをふり向きますと、うしろにはたつた今検あらためた馬べつとう丁の死骸があるばかりで、しかも手も足もバラバラになっているのですから、口を利く気遣いはありません。先生は大方耳の迷いだらうと思つて、ここを立ち去ろうとしますと、今度は別の死骸の、身体からだから離れて転がつている首級くびが、眼をパツチり開いて、月あかりに先生の顔をジツと睨みながら――

「不忠者」

と叫びました。青眼先生は身体中からだが痺しびれる程驚いて、立ち竦んでしまいますと、今度は四方八方の死骸の首が、一時に眼を見開きまして、方々から青眼先生を睨みながら、口々に罵り始めました――

「不忠者」

「紅矢を殺した」

「濃紅を殺した」

「美紅を殺した」

「女王に諛へつろうた」

「紅木大臣を殺させた」

「紅木大臣の位を奪った」

「悪魔の王の家来になった」

「俺達までも皆殺させた」

「そして自分独り生きている」

「悪魔のために尽している」

「忠義に見える不忠者」

「善人のような悪人」

「卑怯な浅墓な」

「藪しじ医者しじの青眼しじ爺しじ」

「貴様のために殺された」

「沢山の死骸を見る」

「俺達はこの恨みを」

「屹きつと度きつと貴様に返して見せる」

「死ぬより苦しい眼を見せるぞ」

「生きられるなら生きて見ろ」

「死なれるなら死んで見よ」

「覚えておれ」

「覚えておれ」

こう云って口々に罵る声が次第に高くなつて来て、しまいには耳の穴が裂けてしまう程烈しくなりました。青眼先生はまるで氷の中に埋められたように、身体中がブルブルと震え出して、眼が眩んで倒おれそうになりましたが、やっと一生懸命の勇気を奮い起こして

「お前達は皆間違っている。私は一人も殺しはせぬ。私はこの国の秘密を守るため……宮中に入入りして悪魔の正体を見届けるため……そのために総理大臣になったのだ。それも自分からなつたのではない。王様が無理になすつたのだ。紅木大臣をこんな目に合わせたのは私ではない……王様でもない……」

こう申しますと、沢山の生首は一時に口を揃えて――

「そんなら誰だ」

と申しました。

青眼先生は云おうとして云う事が出来ずに、ワナワナと戦おのきながら身のまわりを見まわしますと、沢山の生首が皆一心に自分を見つめて、今にも飛びかかりそうにしています。

そうしてその真中の自分の足あしもと下には鉄と氷の二夕通りの死骸が虚空を掴んで倒れたまま、

これも自分を睨んでいます。青眼先生はその氷の死骸を指して――

「ココココココ……此こいつ奴だ」

と叫ぶと一所に力が尽きて、ウーンと云って気絶してしまいました。

するとこの時又もや耳の傍で不意に――

「青眼総理大臣閣下へお祝いを申し上げます」

と云う声が聞こえましたから、誰かと思つてフツと眼を開きますと、こは如何に、最前から見たのはすっかり夢で、自分はもちろんと旧もとの寝台ねだいの上に寝たままでした。そうして寝台の周囲には最前の通りに御殿中の大勢の役人共が集まつておりました。

その役人共は青眼先生が眼を覚ますのを見るや否や、皆一時に手を挙げ頭かしらを下げて――

「総理大臣公爵青眼閣下。御祝いを申し上げます」

と口々に申しました。これを見た先生は呆氣に取られてしまつて、どこからが夢で又ど

こからが本当なのか、いくら考えてもわかりませんでした。そうしてこれはあまりいろいろの心配をするために、気持ちが変わっているのではあるまいかと思いました。けれども斯様かように役人が大勢集まつて、口々にお祝いの言葉を云うところを見ると、自分がこの国の総理大臣になった事だけは、どう考えても本場で、疑う事が出来ませんでした。

## 二十五 止まらぬ花馬車

一方、気が狂った紅木大臣は、濃紅こへに姫の死骸を荷かついだまま、一息に廊下をかけ抜けて、馬にも乗らず真一文字に、自分の家うちに帰り着きました。そうして門を這入るや否や、玄關の横に置いてあつた昨日きのうの花馬車の中に、濃紅姫の死骸を外套に包んだまま放り込んで、それから廐へ行つて名馬の「瞬」を引き出して、自身に馬車に結び付けると、いきなり鞭をふり上げて――

「もとの世界へ帰れ」

と叫びながら、尻ペタを千切れる程殴り付けました。

馬は驚いて棹立さおだちになつて、驀まつしぐら然に表門を駈け出しますと、丁度そこへ王宮から、

紅木大臣を追っかけて来た兵隊が往来一パイになつて押し寄せて、一度に鬨と鯨波を挙げました。馬は益々驚いて、濃紅姫の死骸を載せた馬車を引いたまま大勢の兵隊の真中に駈け込んで、逃げ迷うものを蹴散らし轢き倒して、あれよあれよという中に往来を向うの方に疾風のように駈け出しました。

「それッ。今の馬車には誰か乗つていたぞ。一人も残さず殺してしまえ。逃がすな。余すな。追っかけろ」

と四五人の兵士が怒鳴りましたが、何しろこの国第一の名馬「瞬」が夢中になつて駈け始めたのですから、逆も人間の足の力では追いつく氣遣いはありません。砂埃と蹄の音を高く揚げながら、千里一飛びという勢いで都の南の端にある青物市場へ一目散に飛び込みました。さあ大変だと大勢の人々が逃げ迷う間もなく、往来に積み重ねてある野菜や果物の籠を踏み散らし蹴飛ばして、雨か霰のように馬車に浴びせ、直ぐにその隣りの肉類の市場に暴れ込んで、鳥か獣のブラ下がつたのを片端から引き落して駈け抜けると、今度はその次の反物市場に躍り込み、絹や木綿を引き散らして窓や轆や方々に引っかけ、穀物の市場では米麦や穀類を滝のように浴び、瀬戸物市場では小鉢を滅茶滅茶に打ち壊わし、花市場の花を蹴散らし、魚市場の魚を跳ね飛ばして散々に暴れ散らした揚句、今度は

南の国へ通う広い往来を駈け下りました。

その間幾人の人間を轆ひきたおし、いくらの品物を打ち壊したかわかりませぬ。それでも狂うが上にも狂うた「瞬」の馬車はどうしても止まりませぬ。なおも足を宙に揚げて、死んでも止とどまらぬ勢いでどこまでもどこまでも走りました。

すると丁度晩方頃「瞬」の馬車が走って行く向うから、顔や身体からだを檻ぼろ切れですっかり包んで眼ばかり出した香潮かしのが、白髪小僧の手を引いてやって来ました。雷のような音を立てて来る「瞬」の馬車を見て、慌てて白髪小僧を片傍かたわきへ引っぱって避けさせようとしたが、彼かの時早くこの時遅く、大風のように近附いた「瞬」の馬車は白髪小僧の背中を掠かすめて、背負うちっていた月琴を梶棒に引っかけたままドンドン走って行って、あれよあれよという中に見えなくなってしまうました。





## 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年5月22日第1刷発行

※底本の解題によれば、初出時の署名は「杉山蒨圓《すぎやまほうえん》」です。

入力：柴田卓治

校正：江村秀之

2000年2月5日公開

2006年5月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白髪小僧

夢野久作

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>